昭和四年六月上浣起筆

竹頭木屑録

五

特別
14
1919
413

176678

竹鼓木賞録 上

昭和四年 六月上旬起草

○[illegible]衛鼓の酒の物のシヨウウエンドウ或ハ大喜時ビンデングワ内の飲食料品部なとゝ酒杯の目を惹くもの外国製種々の酒を盛りたる器物に多数見ること、日本の徳利と異ちがひ多くは手のつきおることゝ、グラス類もあれども特におもろく感するハ硝子の朱のものゝ色彩色目の美めることゝ(ときに)装飾あり、一輪生るるもの屋敷と思へるものゝ一つとして

精華 (大野静方筆)

38-9199

足袋、皆さん〳〵る色の柱掛くまつ（あ
おの後の美を用くしめ為めも内容はあ
何かあるか（口まる）いさるものもあるん、ブランデー
ウエスキーなどのことく列こるくることの遠くく
多かるんが五六種用意のみ欲しき思をなす
全体菌類の容器は外面をたくくもあ
るものか日本の徳利なるも思ひつきての工風
か我国の徳利は知る化の美なるこの無き
のあるとんども斯る容器のおもあるを
見ては我徳利を一概に深ちべきあ
くまで或は彼かとき美術の容器を用ち
この婦人用閨房用などい特殊の御の

樣原劇

あることのかも知れず雖し「ゴンゴ西洋の酒瓶」之
んをちかんと此するモカラ（グランド四斗樽）ブルンデル（ブルンデル）七四五十銭八四
○明治食物誌二巻文化三年　京都と千すること所
なる心なる者手の坩堝の若き、坩堝の
誤解上手なる畏敬を拝ぶるを得るべか
此の発法を明あて淡み、其の説く所の人坩
のも微を穿ち、話法の[illegible]輕妙なる
なる感情を惜し浮世、まと倫理道徳なを
を説くの書は此なる通俗をまとまる、重く
るしく興味なしの無きか書なるべく流れ
し坩堝の説きく方ハ抵ぬけるものなる平淡
の説法とも理を富まするこの力なるべく今古

以四五を弄物す、但し筆者を所のと要題
を云が文を摘録する。

○久しく義会の弾丸の押会とゞこめて買いれ能者を
全部を書く文書のセモ味のを要してそれくのもの
を捨して買家を風した。若し買いのもあるあの
若お客さまでのびれくもあるが多いのび、元主てて元れ
どのものもの、所謂る下手まびあるけれども

横原劇

すうの事も難の改味の存するものもある。楽函
の者しれ楽文楽園の校数の義会附属と別
業を接ぐれ姫義の国の数と異なるが所の記
時間に命じれ名び数の背面と其の面表
が刻してある。これは義会の義会はこれいま
である。交証室の短繋、今は用のものもまび
るが砂時計を配しも机表の宜き昔し
を味のものとして面白い。利休形市郎兵衛
心四方相矢筆金と利休形一位六方矢筆金
前者は菓子美後者は茶で共に木工の深
比義を示すものび、凡工の企と難いものびある。
つるべ形杉材者の提灯者の金はこれ又木工

の数多のを潜しとしるのび、手八件を心えん引出しの
つまみも小片を用へてある、この木工の如き技
を絶るこのびある。桶形火鉢こんもびこのび時
代のある種桶又銅のおとしを装つ亦て火鉢
とし比このびある。朝鮮の陶器斗を火鉢に応
用し比この餘程手上手で金味が頗るよろしい
美と分ける為め矣張朝鮮焼の石瓶があ
る。日本の織瓶形なる出来もおて、湯が沸騰す
ると容易に冷却しこの高に特色がある。茶子
釜胴径五寸八分口元三寸三分の大西
洋あり三門か蓋重しと古いに極あるようを高
又時代五寸右又の心給ときこのあるが

榛原製

往年帝国劇の友人小津隆一氏贈られたる
ある。枝木一枚神竜三年丙寅二月廿九の
年月日明分て上野四六万自の碑を拓
の表面に模刻したるのび、文中高田里
とあるの外、別在花北と偽と名を同
のするのも久しく郡とし配土にかけておい
たるのびある。北等のようなる異物を数味
とし比陝の黄拓ひ十数年を経て見るる能
ら無故と今し比ことき感がある。六月三日汽
○汽動映画ひ見れ米国の大学の生活汽車と自動
車つてある学生が「ウトホー」と云ひ人と自分く
くん倉皇カバンを手すして降りてあると鉦が

吉 様　昭和4年 5月31日

賀候陳者御着 述之書籍賣上部數ニ
通リ差出申候間御査收被成度候

月	賣上部數	定價	定價合計	印税合計	印税合計
2月			円		円
月	403	300	120900	12	14508
月	953	250	238250	〃	28590
月	1,731	280	484680	〃	58161.6
2月					
月	40	200	8000	〃	960
月	129	230	29670	〃	3564
月	181	230	41630	〃	4996
月	234	230	53820	〃	6458.4
月		支払印税	計		117234
月					30000
月					

かつてのあの青年カバンの口が開いたからしろくさいやツやハンケチ、靴下などがばらばらと散らばる、そんこの頃着ちらく迫への友人と手を携えて行く、大勢校庭に集まる学生の右舷が一杯満ち溢れ遠入する学生かちらと乱るや、皆の中会ちそ三年生の部屋を占領するとちうて、とやくとなる入って、三年生の出術品を何ま寄ちて、れうり出して、そこへ一同が腰を振へる、ちうちが三年生ちうて、室内に爭開がなまる。互ひの衣類の切り合ひ、敵も味方も衣類引裂けた丈人と裸体とちうちるく幹事が納得と現りて、明日接球をやって勝負を決し負けた方ハ赤を待者ち飲る。」と云ふの口ひ、そんなもの

市島謙吉 様　昭和4年5月31日

拝啓愈々御清適之段奉賀候陳者御著述之書籍賣上部數ニ對スル御原稿料下記ノ通リ差出申候間御査收被成度候

書名	計算年月	賣上部數	定價	定價合計	印税割合	印税合計
頼山陽	自 2年4月 至 4年3月	403	3.00	1,209.00 円	1.2	14.508 円
春城筆語	自 初版 年 月 至 4年3月	953	2.50	2,382.50	〃	28.590
春城隨筆六種	自 年 月 至 〃年〃月	1,731	2.80	4,844.80	〃	58.1616
饅の泡	自 2年4月 至 4年3月	40	2.00	80.00	〃	960
藝苑一夕話上	自 年 月 至 〃年〃月	129	2.30	296.70	〃	3.564
〃 下	自 年 月 至 〃年〃月	181	2.30	416.30	〃	4.996
大隈侯一言一行	自 年 月 至 〃年〃月	234	2.30	538.20	〃	6.4584
	自 年 月 至 年 月			支払印税計		117.234
昭和二年八月廿七日 印税前払ノ分	自 年 月 至 年 月					30.000
〃 十二月二日 〃	自 年 月 至 年 月					20.000
三年五月八日 〃	自 年 月 至 年 月					20.000
三年七月廿五日 校正料ノ分 大谷氏ヘ支払フ	自 年 月 至 年 月					10.000
三年九月八日 筆語印税ノ分	自 年 月 至 年 月					20.000
三年七月十五日 六種校正料 所谷氏ヘ支払フ	自 年 月 至 年 月					10.000
合計				未払	計	110.000

備考：春城隨筆ハ二年三月廿一日 2,700部印税前払ニナッテ居リマスガ未ダ支払数ニ達シマセン。

製本数	賣上数	三月迄数
2,900部	2,509	391

差引支払 金117.234

印税計算月 自十月 至三月 賣上ニ對シテハ五月ニ支拂 自四月 至九月 賣上ニ對シテハ十一月支拂　上記、計算ハ二年四月一日ヨリ四年三月迄ヲ通計シテ御定拾マス

追テ初版又ハ大訂正ノ場合ニ限リ壹百部ヲ新聞社雜誌社 其他ニ賣弘メノ爲メ贈呈用トシテ製本高ノ中ヨリ差引キ計算候ニ付 右御了承願上候

早稲田大學出版部

かゝるあるべきカバンの口が開いたがらしくくしやくしやハンケチ、靴下などがばらくくと散ばる、そんこの横着なく迂くの友人と手を携へて行く、大勢後庭に集まる客の合計が一杯湯をみなぎる迄入る客がまたまた新たや、皆の中会をも三年生の部屋を占領まつり

とちて、どやくくと客を入れて、三年生の出演者品を何を客まつり、そうり出して、そこへ一回が腰を振へるかまるが三年生まるうち、宮内と爭開がなる。五月の衣類の切り会社、敵も味方も衣類の刹那を夫々と裸足とまつりるる幹事が神経と現りなて、四日橋球をやる後の陽気を浩し負けん方ハ主を待ち遠る。と云ふの四日、そんなもの

標原製

○先年山崎直三郎氏宮内省
ゝ出張の節其中一ツ之を北宮氏は
佛壇の画面の一の画を寄せられ

と、一決しさて其の晩のこと寝台のうへの所へ通へ組
睡したのち七番の寝台へ入て時手は
寝衣を占領して他の被つてゐる毛布を剥
きとつて夫を借用する。毛布が足らぬので一
寝台に三人五人宿を合つて睡る。剥ぎ取ら
れた者は目を覚まし乎人共の混雑の
喧騒一通りでない。これが日の野球の仕合
その前夜大の大球を右手左ひざ押して力を籠
めるのであるが、一方手籠で敵し難しと見るや
彼方へ投げ出す。うけて投げ出す。彼を汎し呼
び合ひ、そこで其の急く使えて敗傷者はあつ
た。行人の本あるを知らんとする オートバイを行情した

樣原製

一人は夫と乗つたが他はオートバイの後ろを枝を持
いつけてこれまた七人お乗つて蕎麦屋をさがす
といつ滑稽を極めて順を解かずあるこのかあつた。
ヤット(注)動物まつくと、夫れ等の新自手は乱入
して人の頭を踏ん付けて大球を登りつく、夫の
騒きの立場は目も当てられない。これが映画に現れた
コレ!!じ生活の一斑で法氣横溢、悪戯は盛
人化が、悪者のまへ消れ、無邪氣なのかあつた
おもしろい。

二月三日記

○先年山崎直三郎氏を訪問
したるの際其中に北宮氏は
佛壇の画を描きの画を言ひ

皆四年ぶり大樹の下の一人相撲をとるけ、市術を
で敵する国さの業技の味に投ず、余も
北画風を愛す、楽するの業者八千七百年
六年の巴里に生れ千人ろ七十五年に拙く彼
八粒々の自然の風の姿を捉想化し一筆の美
を表現しろ蛾と北を於て美物色をとるの
泥のらん子、河村清雅八北人に私淑しなかか

○松生の術頭或る長光の多くの人集まり来き
りえレヨウ、ウエンドウをのぞきみろ、何ものと立
寄りて見れば心容色優れる少女が洋装美
でポスターを抱へて立てるなり。こんど氏源流

標原製

行のマチキンと云ふ、ものなり、ブロパカンドの為め
に使用する由なり、松屋呉服店も亦マチ子
キンを見し、かく云ふ同し時装をなし、こんを
の女子の為めに新聞紙流行を開けり流行もいく
ばくの利益をもたらすか知らざれど、別に必要を要
するのあるまじ、容色もさく、よけ名殺ずる役也
何れ高価なるものなるべきが、カビーの如きもの
すべし用途許義也、

六月三日記

手紙乗中一二の物を購ひ、明朝時好店
を訪ねて絵葉書の形を過り理想形の
梅子入れ物を特形の他ものを小品柄とつくる
迷るもよろしく、又他店と比べ猫形の

心りるインデヤ、ラッパーあり、首輪まへ鈴を附[illegible]愛すべし赤犬の首の鎖等けづりあり此と猫じ者も出でうり、皆実用のあるまで而かも玩具味あり、床架中のようなるものです。

報知社がアロハかンドの為め浅草寺へ勧めて観音の出開帳を関西の大市へやらせ可きを寒蔵かあるあり成功ぜと安(此)例の大提燈を持出すまへ行事へ積めるの祇園おこいのぜ汽船に積人びとかいふかそのお坊屋と新なる吊りと提燈も浅草のと同形ぜ一層大なるものである、無論どこからも持込みの事なる

るこのびから、扶桑社を運人も庶ぜ組立なるおもるの、あまのやまく出来る人の日を巻くから、自然ミシナ工風をやつたあらう。

○徳川梦彰まるこの現今法動宮を八条士の旅と称せるる、余もむしろ之の説的を好きあり、頃百其の自叙傳を読もう彼れ之の宮様の[illegible]の人ひ生の[illegible]の義説を[illegible]宮者の人の為め時に義説を[illegible]ばも[illegible]る事あり、同田宮の人を推す時光[illegible]と、恵ひ記す余が[illegible]年的の田宮[illegible]の彼をつとひるこの事、[illegible]義説と[illegible]ます、梦彰と甚れ似る事あり、余初めを梦彰の此事を

入札消息

▲藤田男爵家の賣立

男爵藤田家藏品が、五月十一日に大阪美術倶樂部に於て入札に附せられた。總賣上高は東山御物の夏珪の山水十三萬九千圓を最高に、豫想の三百萬圓が内に入つて二百八十萬圓を計上されたが、現下不況のドン底に於て、斯る好成績を擧げ得たといふことは、瞠目に價ひすることゝ云はなければならない。それにしても、斯の最高夏珪の山水であるが、該品は同家の先代が井上侯の斡旋で明治三十五年に鹿嶋家から七千圓で買ひ求めたものであるとか、思へば轉た隔世の感なきを得ないではないか。それから又木米の山陽賛淡彩秋景山水の八萬圓は、木米のレコードを作つたものとして、これまた斯界話題の中心になつて居る。以下、高價の物を列擧することにしやう。

三萬圓以上

△東山御物夏珪山水（十三萬圓九千圓土橋）△龔米淡彩秋景山水山陽賛半切（八萬圓池戸土橋本山）△田驢背尋梅斎色絹本（七萬一千八百圓池戸本山）△中興名物翁茶入推朱四方中丸牡丹盆添（六萬九千九百十圓戸田）△安南絞手茶碗（五萬一千八百圓米萬）△青井戸雲井茶碗（四萬九千百十圓戸田）△周銅饕餮紋卣（三萬九千三百九十圓）△吳春春景山水（三萬五千九百圓土橋春海土田池戸服部）△藤原時代散蓮蒔繪鍋縁經箱（三萬三千九百八十九圓林中村）△碾青磁浮牡丹香爐（三萬三千九百圓太田田中）△青瑯玕獅子鈕共蓋方鼎香爐（三萬六百圓川部）仁清色繪菊水水指（三萬圓春海戸田植村）

一萬圓以上

△倚信中東坡左右飛泉三幅對（二萬九千百圓分林）△安南絞手雲龍花生（貳萬八千九百圓）△山陽水墨山水半切世稱二百錢（二萬七千三百圓山中）△唐津割山椒向付五人前（二萬六千九百九十圓）△名物唐物八嶋大海茶入（二萬六千九百八十圓北岡土橋植村）△時代蒔繪鬱覺硯箱（二萬六千九百圓福田兒島）△應擧中虛空禪師驢南浦左向陽群禽右飛流錦鱗三幅對（二萬六千二百圓鶴印）△祥瑞反鉢（二萬六千百十圓）△名物古瀨戸浪花茶入（二萬五千九百九十八圓太田林服部）△染付辻堂香合（二萬五千九百圓土橋兒島）△名物此世香爐（二萬四千百十圓春海戸田川部）△大雅堂白雲紅樹（二萬三千九百六十圓本山）△藤原時代金輪王佛（二萬三千九百十圓伊丹山中）△名物古天猫利久小姫釜（二萬三千百八十圓米万）△金襴手丸紋寄向付五客（二萬二千九百圓兒島）△南蠻縄簾花生（二萬千九百三十圓）△粉吹飯櫃茶碗（一萬九千八百九十圓林横山）△公任卿堺色紙（一萬九千八百圓多聞店）△長谷川久藏祇園會（一萬九千圓今貞土橋）△古赤繪金襴手洗盞瓶（一萬八千百十九圓）△景文雪中遠山遊鴨二幅對（一萬七千六百九十圓分林）△幸阿彌松藤棚蒔繪文臺硯箱（一萬七千三百圓山澄中村）△光起金地極彩色源氏若紫薄雲屏風一双（一萬六千九百九十九圓林）△啓書記眞山水（一萬六千九百圓千九百十圓戸田）△應擧矮鶏育雛（一萬六千九百圓米万）△時代春日半月卓（一萬六千八百九十圓春海山中）△錐吳器茶碗（一萬六千百十圓戸田）△一鳳中雪笹熊左藤花香魚右月下秋草（一萬六千百圓山中）△中興名物源十郎肩衝茶入（一萬五千九百圓高田）△吳州赤繪玉取獅子鉢（一萬五千百九十八圓）△周銅夔龍犧首匜（一萬五千五十圓幡新）△中興名物澁紙山櫻茶入（一萬四千九百九十圓戸田）△吳州赤繪小丸香合（一萬四千九百十圓戸田山中）△竹田淡彩秋景山水茶山賛（一萬四千六百八十圓土橋川部）△一鳳菩提樹佛法鳥（一萬四千百九十圓）△景文合歡花双鷺（一萬三千九百八十圓北岡）△交趾狸香合（一萬三千九百十圓戸田土橋高田）△梨皮泥俱輪珠茶銚一双（一萬三千九百圓）△龔米盧同茶歌煎茶碗七客（一萬三千百九十圓）△古筆手鑑温知集（一萬二千九百圓伊丹土橋中村）△吳州水鳥火入（一萬二千九百圓）△西行法師紅葉歌入文（一萬二千九百圓土橋）△俊頼大色紙（一萬二千八百圓池戸）△万暦赤繪桝水指（一萬二千百十圓分林）△中興名物無學祖元禪師墨蹟（一萬一千九百九十圓高田）△本手立鶴茶碗（一萬一千九百三十圓春海池戸服部）△唐物青貝折足卓（一萬一千八百圓田中山中太田鶴印）△ノンカウ黒四方茶碗（一萬一千六百九十圓今貞）△黄瀨戸菊抓蓋向付五人前（一萬一千圓）△利久判木地菊置上大棗（一萬一千圓春海服部植村）△松花堂定家像（一萬八百九十圓）△高取飯櫃三足水指（一萬六百八十九圓太田兒島）△菘翁都名所詩畫十二幅對（一萬六百三十圓）

五千圓以上

△定家卿自詠色紙（九千七百九十八圓植村鶴印）△竹心共筒茶杓（八千九百九十圓土橋服部）△爲恭子之日遊大幅（八千九百六十圓植村今貞）△牧溪達磨（八千九百圓戸田）△又兵衛彩色櫻下遊興圖屏風一双（八千九百圓山中太田高田鶴印）△本手黄伊羅保茶碗

（八千七百九十圓林）△無地赤繪果鉢（八千五百九十九圓）△梨子地櫻山水蒔繪書棚（八千五百二十圓土橋）△應舉紫牡丹白鷗（八千百九十九圓）△祥瑞在銘唐草茶碗（八千百八十圓谷庄）經隆兒文珠（八千圓伊丹横山山澄）△山科宗甫投子衆（七千九百九十八圓）△光正白描源氏繪一卷（七千九百八十圓伊丹中村米万）△織部長角平手鉢（七千九百二十九圓）△宜興窯獨茶銚一双（七千九百圓）△寧一山一行墨蹟（七千九百圓今貞）△寧一山一行墨蹟（七千九百圓今貞）△吳州瓶手火入一對（七千八百九十圓）辰砂三羊壺花瓶（七千八百九十圓今貞高田）△江月聽松二字横物（七千七百九十七圓林中村）△古染付紀三井寺茶碗（七千六百九十三圓植村）△磁青磁龍耳香爐（七千五百圓土橋川部）△如心齋北野三十本茶杓（七千三百九十八圓）△磁青磁瓶子花生（七千三百九十八圓）△探幽中富士左右鷹三幅對（七千三百九十八圓山中）△耀變天目茶碗（七千二百五十圓戸田）△染付桃香合（七千百五十圓）△吳春松竹梅三幅對（七千百圓春海）△又兵衛觀櫻遊宴大横物（六千九百九十圓分林）△寂蓮雲井歌入文（六千九百九十圓戸田）△磁青磁袴腰香爐（六千九百十圓分林）△若冲枯木鷲猿（六千九百圓高田）△斗々屋茶碗（六千八百九十圓）△松花堂布袋（六千五百圓高田山中）△芳園雨中新樹鶯（六千五百圓今貞）△志野葛家香合（六千五百圓土橋）△唐物青貝梅月茶碗一双（六千四百九十九圓戸田）△仁清色繪玉章香合（六千四百九十圓戸田）△古田織部共筒茶杓（六千四百十九圓戸田）△是眞中瀑布左鹽竈右炭竈三幅對（六千三百九十八圓服部植村）△染付口紅算木水指（六千三百九十八圓春海）△元信琴棋書畫四幅對（六千三百九十圓）△兼好神無月詠草（六千百九十八圓山中）△ノンカウ赤平茶碗（六千百九十圓戸田）△古備前德利（五千九百十九圓）△蘆雪鶏飼横物（五千七百九十圓）△周銅雲雷紋盤（五千七百二十圓兒島）△白硅共蓋龍耳香爐（五千六百九十圓）△和蘭陀色繪水指（五千六百九十圓）△白高麗水注（五千六百九十圓米萬）△染付飛馬煎茶碗五客（五千六百八十九圓米萬）△萬暦赤繪輪花式共蓋水指（五千六百圓）△因陀羅樹下人物（五千五百九十八圓林福田高田）△玄鶴野雁羽箒（五千四百九十圓戸田）△鬼熊川茶碗（五千四百九十圓戸田）△寂蓮法師右衛門切（五千四百四十九圓戸田）△又兵衛金地遊宴小屏風一双（五千三百九十九圓林）△唐物籠底四方炭取（五千三百九十八圓）△染付寄煎茶碗九客（五千三百三十八圓山中）△祥瑞在銘瓢箪振出（五千三百圓）△相阿彌富士山水横物（五千三百圓土橋）△祥瑞在銘瓢箪振出（五千三百圓春海）△柔致眞大日一字金輪鶴印（五千二百八十圓）△青磁地紋大平鉢（五千百九十圓高田本山山澄）△定家卿消息（五千百圓土橋）△朱泥三友居茶銚一双（五千百圓兒島）△古伊賀花入（五千圓谷庄）△宗和所持桑柄灰匙火箸（五千圓）

三千圓以上

△古赤繪金襴手酒次（四千九百十圓）△鵜言中俊成忠度左吉野右龍田三幅對（四千九百圓）△宗長大棗（四千八百九十八圓）△名物芦屋指布袋釜（四千七百九十圓）△名物芦屋荷葉釜（四千七百三十圓）△宗甫歌入文（四千六百三十圓）△芳岡中郭公左妙喜庵右松花堂三幅對（四千五百九十圓）△中峯禪師墨蹟（四千五百八十圓）△祥瑞詩入花鳥輪花口紅中皿二十人前（四千五百〇一圓）△秋月樓閣山水（四千三百九十八圓）△宗旦一重切茶入（四千三百九十八圓）△青磁端反鉢（四千三百九十八圓）△唐物兩面獨樂藤實香合（四千三百九十三圓）△一休和尚一行（四千三百九十圓）△貫之龜山院切（四千三百九十圓）△宗全藤組達磨炭取（四千三百三十圓）△蕪村鹿狩二幅對（四千三百圓）△唐物鬚當寄口炭取（四千二百九十圓）△存星桃形炭取（四千百九十九圓）△高取耳付茶入（四千百十九圓）△青磁浮牡丹花生（四千九十三圓）△貫之寸松庵色紙（四千百圓）△紹鷗所持コヨリ組釜敷（三千九百九十八圓）△爲恭源氏繪二幅對（三千九百十圓）△南蠻鉦（三千九百十圓）△與次郎丸釜宗全所持（三千八百九十八圓）△幸阿彌梨子地田家雁蒔繪硯箱（三千八百九十圓）△久以島柿燈籠（三千八百八十九圓）△光起蒼公（三千八百三十圓）△烏泥萬寶順記茶銚（三千八百十圓）△不昧公共筒茶杓（三千八百圓）△唐物青貝斑竹椽蓮童子軸盆（三千七百三十圓）△其一藤花蝶（三千七百十圓）△瑞圖金箋山水詩書帖十二幀（三千六百九十圓）△南蠻海老手水指（三千六百九十圓）△唐物青貝高欄付平卓（三千六百九十圓）△白秤菊花式水注（三千六百三十九圓）染付捻酒呑（三千六百卅九圓）△白秤端反鉢一對（三千六百十圓）△黒無地斷紋煎茶棚三千五百八十圓）△山陽草書鴨厓襍興詩（三千五百十圓）△唐物籠一文字寄口炭取（三千五百圓）△青貝一文字郭子儀香合（三千四百九十圓）△信樂肩衝茶入（三千三百九十圓）△唐物青貝器局（三千三百九十圓）△利休龜判文（三千三百九十圓）

不分為新をつちのけてこれ丈美を称することの近来下手の拙を云い上げた丈美を称することが藝術柄と行はれ出した。自分も美こ日蓋を高きものとする此為人が受する所謂ゴワビ柄ハ抵抗下手のある偏する。自分が茶会の別荘として今きいしいものを一時ひろくの狂茶を集めた。此の茶ハ多くひびれまでありた。此頃本宅く移した。此の記ハ前まで残し置を核人さま美くを通(ゝ)ゝ海ゝ此ゝ多ゝ此ゝ美ゝ千あるの茶室の柄の四畳半桂額ひびの同茶室此を多く不花しに此こと加ある中まハ優れたよ

ふちの比が今の時代の残るものとなる。書物つと一番まきあり、さしてよりへらべハものが、香重が彫る方、上四段ハ蓋のごときものがあるから花瓶ハ唐用公出来る。上ハぐすう」ハ茶の市から吹き出し比緑色のもの[illegible]ハ猫ノスリで神代土器の味あるべきハ主として北のクスリハ在るのと板類ハ香・雲母の三ハ家を家体ハ古いて溶き彫るし比とあるが唐物であるの板ハ杉のかき板木で。彫りも荒らないが、おとし数味があり、彫り板いと底ハ木理が突起しておとを数地きがある、家と輪廓ハ八金箔をのり、すべて果が塗つてある。てび住居

の彫りハ本もの」しとあるびあるとハ十銭の値を掛つて蹴つとあるが北板を家を吉き浮るとある北板ハ彫り浮るとあり七六答ハ無い。田舎家ハ用くる桐谷多くまたまた樹木のコブ」などを利用し、中を彫りつて火入や灰吹を装置してある。道中の茶屋などいくくもあるとあるが、きてよいとあるいとものである。自分ハ可ラ用を拵つて拵かハ一を得ない。きんハ面ハ紅の木を高さ立寸径ハ断裁して火入と灰吹のおとしを装入するとハ穴を穿つたりあるび其他一切手工をかくるのいとあるびである。北木の形かハ

何まらく断乳面から見ると、大体楕円形で
火入を禁ずる所が幅や、廣く、庚吹の家
がやゝ狭く、おもつたの自然木であるのをそこ
周囲に漆ぬりをきびもしたのの如く光沢があて
氣持のよいものである。恐らく光沢の元は此
れが白眉であらう。光沢はこのまゝ保存
が保ちたいこんいは自然でおもしろい。細
心な灰吹が火入とは、同じ平面であるのも
珍しい。茶の棚も和南の共通したものであ
る。茶の棚は簡単であるが黄銅の鎖を
縛しとあやなる呈風のものや上手のものを得
ることの出まび難しとも言はれるが、びびたるも

樣原製

底ことのもとゝ考へると浮きゝび。自分の〻言さ三
尺四五寸幅は上下狭い高さ一尺三寸胴から
くびのて、そこが径一尺七寸位で、総て烏丸は
出来てゐる、上頭の板まは朱漆で支那絵が描か
れてゐる。脆弱のようで揺しやすく安映に侵さ
れいやすいから、支那らしい雅味のある。下手の茶碗
きゝまへ。記した前記を補ふといふ。
素焼飯と形ゐうゝくび手るものも味あり、茶室
用空不庚伸は在の跡基、物を在る巧、こ
んもこゝに附記しておく。

人氣沸く 虫龜の闘牛

縣内各地より觀覽申込殺到
會場は宮内驛より約二里半

開始は六日午後三時

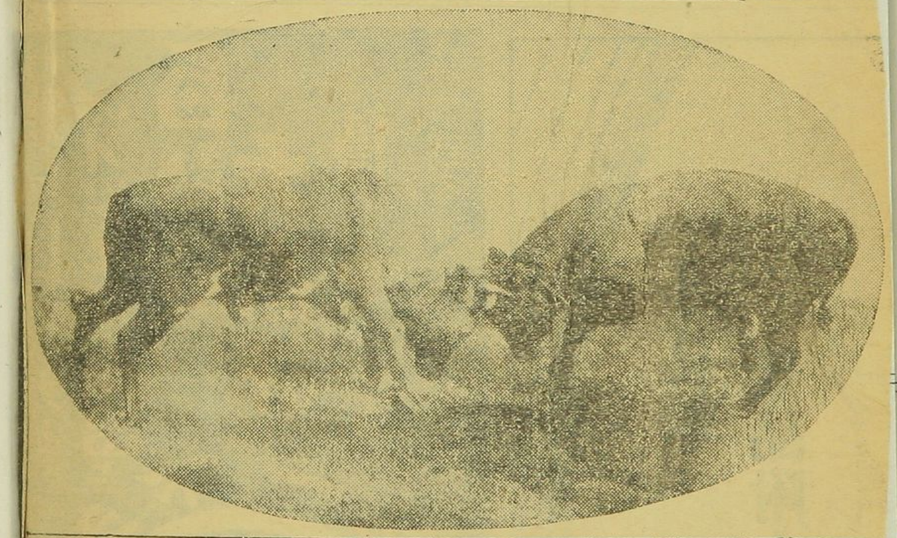
古志郡太田村虫龜では東京漫畫家團氏の希望により六日午後三時から白鳥神社境内に於て闘牛大會を催すとは既記の如くであるが漫畫家一行のほか

活動 寫眞撮影隊、鐵道省高官、北島書伯、長岡市青年會員約二百五十餘名、東都五新聞記者の外折柄端午の節句なるため縣内各地から本社内佐藤留吉郎氏に宛て觀覽を申込むもの引も切らぬ有樣であるが虫龜へゆくには宮内驛下車が最も便宜にてそれより約二里即ち太田村役場前まで自轉車が通じその先闘牛場まで半里を徒歩せばよいので活動寫眞撮影隊は漫畫家一行より虫龜へ先着し闘牛に關し

深き 知識を有する佐藤留吉郎氏より詳細なる説明を聞き

とう上同氏同道の下に撮影をなし午後二時より一同は佐藤氏の招待會に臨み小學校にて暫時休憩の上闘牛場に行く筈であるが闘牛場附近にはこれまで獸菓子商の露店商人が四五個所店だしをなし居る位にて飲食物を商ふ者なければ同地歸人會は遠來觀覽者の便をおもんばから「古い餅」と名を附してつきたてのものを實費にて販賣する外ビール、サイダー闘牛の繪はがき等を販賣せんとの計畫もあるから觀覽者は飲食物欠乏の心配はいらない譯である尚地元虫龜には

土曰時 より引續き遊物を飼育し居る、佐藤新八氏をはじめ佐藤久藏、齋藤重藏の三氏は何れも優物を飼育し國村なる池谷、寺野、濁澤その他各村にも龍能三氏に匹敵すべきもの多ければ敢組さへ順調に運べば稀有の試合を見ることが出來るであらうと云はれてゐる尚て長岡市の鯨護士、山田武雄氏著「牛の角突き」に



廣井 紅秋山人の左の如き序があるが最もよく二十村郷の闘牛の實相を現して居る

（略）二十村の闘牛は、西班牙國の闘牛の如く人間と牛の殺戮的角闘でない、血を流がす慘忍の娯樂ではない、伊豫の宇和島に行はるゝ如き賭博的惨害の伴ふ闘牛でない、琉球の各地に行はるゝ如き興行的闘牛でない、實に山間の農家が芝居に、相撲に其他の娯樂に代ふる唯一の民衆娯樂である、入場料もなければ曼殊もない、老若男女が思ひ思ひの場所に居を占めて自由勝手に觀覽する、御放樂興行である之に依つて體富なる肉牛を造る事が出來る、之を觀て壮活達の精神を鍛練する事が出來る、闘牛は犬や猫の如く噛み合はぬ雞の如く血を流さぬ、角を武器として克く防ぎ、力及ばざれば逃げる、疲るれば引分ける迄で決して慘酷なる娯樂でない、彼等は悠然として闘ふ者で、夫の猛獄の死を賭して角闘する者とは全く趣きを異にするから國技館で大相撲を觀るが如きもので、しかも進退攻防の一瞬間に、手に汗を握らしむる虚々實々の秘術がある、何故に今日までひろく天下に紹介せられざりしかを遺憾とする（以下略）（寫眞は體躯庞博の壮觀）

○下谷廣小路の文の字を訪ねて繁昌を祈る四五の吉をゆめ祈る。

一 芝新銭座廣義塾之記

整理 輪廓線書印刷

廣庚四年 戊辰七月吉日

内容 廣庚義塾之記

祝則

今日祝ひ

入社祝則

日課

義塾図

中元祝酒之儀

元恐々謹言

日深の内々福原小博打上（辰次郎）松山
棟高小兵衛吉等の受取諸義の日を
取めます

一伝兵衛兵衛殿御内忠兵衛書状
去十二ツ打　宗立　義欽
羅馬字の編笠印を捺す
志具の外図取味　京ヲ取
義敬取味　捺す（）文面
平凡なる羅馬字を用ひ

複原製

なる物と珍とすべし（二十四）

文言

已上

為稽徒之祝儀差紙元御鳥目
五疋到来祝着　松魚住侍左
衛門殿

二月廿六日　宗立

伝兵衛兵衛殿

金子五拾匹の羅馬字印を
捺す岡部家の書状を花ヒ
ことなり、今ハ手元なし

一三拾六歌仙貝合書譜　一冊

天保十二年神谷月堂記山中
歌仙庵の主人しゐ庵の題
ふもとに三十六種の貝を活彩
を施し各種の貝に新一首を
題す皆々庵の主人蘭
雪歌者也、蘭味深き人
也、此の書も亦絞れか蘭味の一斑
し、極めて珍とす　候廿五日

一冊

一古鋳百印

金入しく大汝神家と紙印百類を記
すると雖きも未だ之を見るの機を得
す、其印蛾三村仏治の家と雖も
けとも之れを見るの機を得さりしなり
偶ま其印を拾し字印譜を以て
首編に金入記せり、此書の巻尾に
仏治の跋あり、此書を後人に初め
て此印の由来を知り得たり、印は勢
妙洞津の作、二日坊が其志蒐
集し給ふ所也
しとす也
印譜の各紙四類を収め　背面に

印の由来を記すこと甚だ詳なり氏所蔵日
く鈎印を以つて交換したることあり、人
らも惜まんとの如き多きを知る
る、今二日坊自記の日譜らに宮
元りとなるうん、各印鈎の形を注し
して鈎の形を図せず、これ憾むべし
とするもども、印面解するものあり
り、家花五十数の印面も多くは
も此今面へ初めて寄自するものなり
但し之れ印のコレクションの中に関白
印を鈎くに平瀬氏豊臣神社に献
納したる故なりと伝聞する所なり

二日坊の経歴は伝聞する所左のごし
二日坊姓菊池名家祐楊之注津城
主叫業鍼医学養寿少壮入平
あ大宮其寺為僧僧二日帰家
世人称二日坊因以為号年六十又往
天然寺大順和尚弟深仏号内薦
法子あ永四年乙未春春有疾
同五月廿三日歿常陸奥州有同
集花千門人建碑於城南四天王
寺及観世阿波池寺以追慕其
徳

二月六日志

○作蒹寛の遺子微[illegible]る美人の遺集
六石山房詩文鈔七冊を寄せ来る。寛ハ紙絵
新蒲田の人、余の新居に訪ふ。主婦なるの寛
新居日々新しの編輯を司り、余を訪る。
寛ハ壮詩才あり、吟客年高位を伍をなせる
詩を為す。筆[illegible]今田梓に上しとなる
五岳遺稿ハ三信するこ[illegible]
べし。寛もと五岳と詩を[illegible]
[illegible]

余嘗つて寛と四六石の[illegible]
彼れ死つて日く石砫石砫即ち其の出典なりと。

五岳を悼むの詩に云く

雲古壘中高、老春門下衰、橋梓三李の料
抗節五岳亨、頭顱談詩酬、心因議政分
紙吟者在耳、音吐一年響、

余造筆頼山陽を著す時六石所蔵の山陽の詩
筆を寄せ、こゝに巻首に収む。今遺集を閲
すること、詩五十首を得たり。今其の首
詩を掲す

余獲て美上人遺愛山陽詩冊、並海河
游跡一巻、因次其韻、以寄法四人和四首
儒臭俗臭渺然脱、嘉話尚伝游戯末、
数遺愛山陽冊、今人長憶風流美、一游

千古留方寸、却見河田林樾、我今蒼茫
寄清愁、眼前柔枯任乖剌、
五峯と五象と同飯の清荒千万、左二首を
録す

彼岸風物我所思、七年仰望別住時、尊前
舞妓旗亭酒、馬背春山野径詩、細雨無
聊花点点、蒼寒較減苗終知、自今以
月斎再梦、夜夜追君蕩艪枝、
玉洗錦毬感知音、別後寄珍涙不林、
席今宵須東望、駅歌的々又分襟、
垂翅翁辛供低唱、酒有鶯黄迷淺斟、
越山三年労夢寐、却看一往見情深

樣原製

将帰新居、寄懷五峯盤川二君

奇偉歎歎者滝苗、鱸膾蓴羹梦裏秋、
自笑交蕭疎敬字、七年不上故江舟、
月且風物莫古心、住要唯許白鷗尋盟、
秋水八千人、與我相忘就淺深、
月明十里捲珠簾、清風北往從之帰、悵遥深
言飄得旗亭国、玉蘭彩毫説森
樹、

五湖春水白鷗前、我夢唯能與月帰、
蓴根渡折特、敷人先唱井枝蓴、
寄五峯の紀念、詩を刊ちんとす、北蓴の詩数
枝まるも一の也

二月七日記

（昭和十五年三月十日第三種郵便物）　第一萬五千四百七十　聞

英國總選擧ポスター集

【上】保守黨の政策は國民の負擔を輕くする
【下右】働く國民は勞働黨に投票せよ
【下左】貴女の一票は劍よりも強い、戰爭に反對する婦人は自由黨に投票して下さい

騎警がかすためにしまた全く一
安心が出來ない實情にあつて塲　向左の諸氏はそれ〴〵議長となる

東京朝日新聞

編輯兼印刷人　藤本尙則
發行人　東京市麹町區有樂町二丁目三番地
發行所　東京朝日新聞社
電話代表（23）一三二〇番　丸ノ内一四二〇番
案内廣告專用　振替口座東京一七三五五番
定價　一ケ月金一部金五錢
郵税　金十五錢（海外郵税共）
廣告料　五號十五字一回五十錢

本社定期刊行物
アサヒグラフ
週刊朝日
アサヒスポーツ
映畫と演藝
アサヒカメラ
東京朝日繪刷版
コドモアサヒ

柳屋

現代名家和歌俳句
「柳屋三立」郵券

創業二十周年記念
齋藤茂吉氏
中村憲吉氏
現歌壇の最高權

發行所　大阪市南　柳

○英國の政黨　前者は保守黨が多數を占めた内閣更選
若し勞働黨内閣が多數を占めたとしたら
人民、之れ英國政史上、世界に例なき英國で
が勞働者に任せられることは世界に例なき英國で
も無論別問題である。時勢の推移は動くべきものである
保守黨の英國をまもれ此の現象を見る
生活費の騰貴の影響の衣裳を飾る連
中が急に大に任せられて矣し遂に
親しへ、何方も同じく潛秘なる生活を
必ずの沒落は大なる教めとなるであ

六月九日

藤原製

英國總選擧ポスター集

【上】保守黨の政策は國民の負擔を輕くする
【下右】働く國民は勞働黨に投票せよ
【下左】貴女の一票は劍よりも強い、戰爭に反對する婦人は自由黨に投票して下さい

○英國の婦人　前者と若御者が多數を制した國民黨
若し若御者が多數をとりてクドイーに成りたる
人民、之ハ英國政史上、世界前のまたなき殊に一婦人
が勞働者に注ぎたることハ世界に例なき英國で
も無論別所なる。時代の推移ハ驚くべきものあ
る保守黨の英國たるまぬ此の現象を見る。不
生産費の殿を着し、其他の衣裳を飾る婦人
中が急に大臣に任ぜられて矣と内し登廳する
親てへ、何方も同じく滑稽なりしとの所
此メの沒事ハ左る教めとなるであ
ろう

六月九日

納り返つて王宮へ乘込む

第二次組閣の親任式

英國勞働黨の譽れ

【ロンドン】（八日午後一時十二分發聯合）第二次マクドナルド内閣の親任式は豫定通り本日遅ほなくウインザー宮殿において行はれた、この日首相マクドナルド氏以下今日を晴れの新閣員十九名はロンドン西郊のバディントン停車場に勢揃ひし、特別列車に搭乘して一路ウインザーに向つたが、停車場には混雜を恐れたのと場所柄をわきまへぬ勞働黨式の場面の展開を避け樣としたので出發の時間をあらかじめ發表しなかつたにも拘らず群衆充滿し閣員用特別列車と反對側のプラットホームに溢れるといふ盛觀を呈しマクドナルド氏以下閣員が順次プラットホームに入ると、熱狂して大喝采を送つた殊に英國は愚か世界の大國中での最初の女大臣たるマーガレット・ボンドフィールド女史に對する喝采の物すごいばかりで同女史はこの上ない面目を施した、群衆の熱狂裡に包み切れぬ喜びを湛へた閣僚はいづれもきちんと禮裝し男子は悉くフロックコートにシルクハットといふ手の打ち所のない出立ちであつた、やがて特別列車は群衆の歡呼を後に出發しウインザー停車場に到著するや宮廷差し廻しの四頭立の無蓋馬車に乘りウインザー宮殿に向つたが、馬車は型の如く厳粛別當の乘り組み物々しく、この所流石勞働運動界の猛者連もすつかり納り返つた形である、この馬車は昨夕前保守黨内閣の閣僚連が印綬を返納する際參内した時にも用ひられた同じものである、ウインザー宮殿の正門にはこれまた群衆歡呼して新勞働黨内閣の閣員連を送り迎へて晴れ晴れしい活觀を呈したが一同は參内後一時間にして退出しこゝに第二次勞働黨内閣は正式の成立を見るに至つた

揚句、女給排ひを食はされやうとさへした、しかし、新大臣はいづれも、小使や給仕諸君を友達扱ひにして、會ふといきなり「お早やう」と誰かれの差別なく握手したがるので、その仲間では忽ち人氣を博してしまつた二度目の組閣で、はからした珍談豆話は最早くりかへされないであらう

野人……

禮を知らず

第一次勞働内閣當時

珍談哀話の思出

新勞働黨内閣々僚は八日ウインザー宮に伺候して晴れの親任式に列した、その中にはロシアを除く自由黨の尻押しで、世人の驚きと不安焦慮の中に勞働黨が始めて天下を取つた時には、各所に隨分ユーモラスな悲喜劇が演ぜられたものであつた、何しろ新閣僚中二、三人の貴族はあつたにしても、その大部分が勞働者上りで炭坑夫六人、工場勞働者、小學校教員各三人、機械捕除人、電信技手、散髪屋各一人といつた有樣だつたからその奇拔さ加減も破天荒のことに違ひなかつた

◇

まづ親任式の當日、陛下から辭令を頂いて、御手に接吻する段に大變とばかり、ある大臣は片膝つけばいゝところを、兩膝ついて珍妙な恰好をしたものだ、その翌日、いざ初登廳となるとかれ等は揃ひも揃つてしわくちやの背廣に、古帽子を頂いて、鞄片手に、工場へでも通ふやうなつもりで、早朝から、役所の玄關に立ち現れた、ところが、玄關子にとつては初顔面であるばかりでなく、いづれも頗るゾッとしない風體なのでまづ植民相トーマス君（新任國璽尚書）が、物もらひとまちがへられて、こつぴどくやつゝけられた大國ではじめての女大臣ボンドフィールド女史も含まれてゐたわけである、さて一九二四年一月、

横濱製

為泰の精神にもとづくものである。著者の頭腦の所謂利禄の台家の名傳で、此の著は名著と称へられてゐる。永初の版は寛政元年五月の交に出来た。

を要のまま、一般の船に常に随つて其の頭使に保せしものである。

○酒茶の優劣利弊を論じる刊本は珍らしくない。然し此の坊写に浮る酒茶論は寶暦十年の版で漢文七枚の短小版である。忘憂君酒を賞し、滌煩子茶の功績を説く、佛者の秘著が酒茶を就ての利弊利用の人論撰佛典にも出ることの多し、これ此書の特徴也。漢文は巧なくさんざん酒茶論の珍とするすことを得、両論を判じ酒茶共に一所とするすはお宝の断後の平凡なれども、寶暦の著述に以上と思ふ雅し

一月九日記

發聲映画第一陣

□愈々パラマウント・ヒューチュア發聲映画披露興行でございます。

□發聲映画には大體三種類ございます。ホール・トオキー、トオキー、サウンドといふ名稱によつて別れております。「レッドスキン」は伴奏と音響効果のみがついております、所謂サウンド映画でございます。

□また發聲映画のプロセスには二種類ありまして、フイルムの側に音聲のついておりますフイルム式レコードとの連繫によるレコード式が之でございます。

□パラマウントは兩プロセスを採用しておりまして、この「レッドスキン」はレコード式、專門語で申しますとディスク・プロセスと申しますが、になつております。

□當座の使用致しておりますウェスターン・エレクトリツク裝置は世界でも一流映画館のみの致しますそれで、現在最高級と稱されております。前記フイルム式もレコード式もかゝる樣になつておりますダブル裝置でございます。

□この伴奏は七十五名の大管絃樂團でございます。

□チエマ・ソング「レッドスキン」の獨唱は、コロムビア・レコードその他で知られております。ヘレン・クラアクが唄ひます。歌唱は別面をごらん下さい。

□大學の陸上競技場として撮影されてありますのは、一九三二年にロスアンゼルスで開かるべき次回オリムピツクのスタヂユウムでございます。

□以後毎週平均一本づゝ發聲特作映画を上映致します、なにとぞ絶大の御期待をおかけ下さいますやう。

× × ×

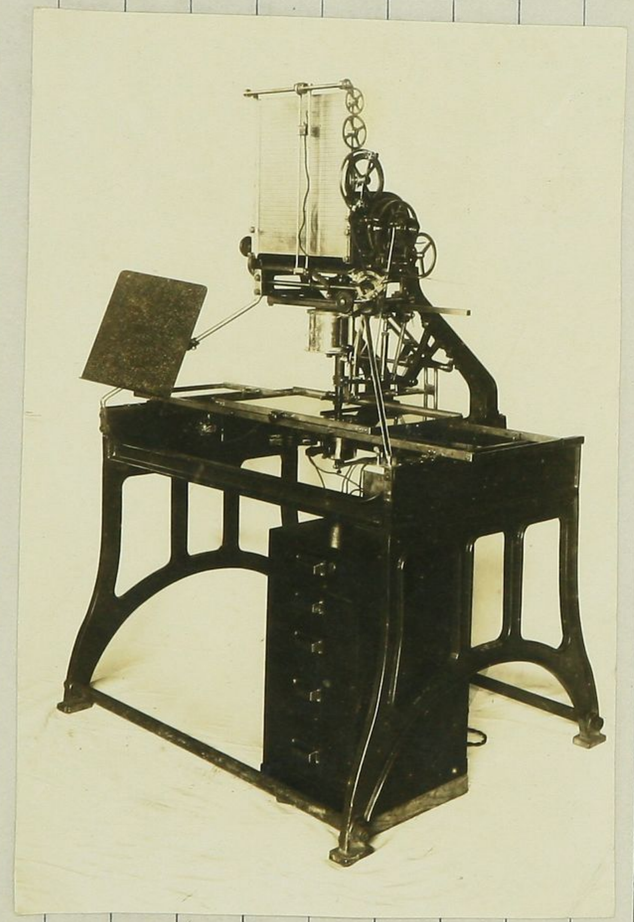
REDSKIN

（グンソ・マーテ）

Redskin, Redskin, boy of my dreams,
Take me back to silvery streams,
Where thru the wildwood in childhood
we wandered;
Songbirds winging and singing to you
and me love's melody.
Redskin, Redskin, let us return
Where bright twilight welcome fires
burn.
With happy hearts we'll go roaming;
I'll whisper in the gloaming,
I love you, Redskin, love you.

○邦樂座で始まる入場者は、義太夫映画といふを始めて見た。如何に鮮明なりとは言へども、未だ音響を交へるのかやはり美樂まじりである。こゝは和洋ソングは赤い皮といふ映画と驚嘆

○ライプツヒ郵便文書用し得るやうなるタイプライターを郵便文書用し得るやうなるタイプのは印刷界の重要事件と云つてよいのだが、こゝまで略々同じやうな工風ひ當を植字機といふものはあるにはあるけれども、漸やく数を増しつゝある。その機械と同じ原理を示す為めに左の二紙を取あつ、行程は委曲尽し難いが、タイプライターを拵へた活字を組合せて鑄造のものであるが、これを入用の字をシリンダーの下まで持ち来ると、そのシリンダーがあつて



えんこ其の一字が容るることゝなる。レンズは大小いろ〳〵あつて、字を大きくも小さくもすることが出来る。さて其を字し終つて現象をしたものが左の二枚目に収めたものゝ如くなる。西洋も既に和字を字たことゝ故字機かの迚年発明されたるとかゝ、其の其こゝに就て考案したものであるが、兎も角これを迚々改良したならば、或ハタイプライターよりも便利とさるゝ事なるかも知れぬ。研究者ハ成功と同時に生計に困しめる境遇と隔つたる新発明今秋の英会と中会ハ共に購入することゝなしたる旨である（六月十日記）

夜中の電話

水木京太

「どうしたのをぢさん、今頃。何か御用。」
――（私の心の中に住んでゐる十八歳の彼女は、失敬にも私ををぢさんなどと呼ぶ）
「ひまだから、一寸君の氣持をきゝたいと思つて……」
「あら、ひどいわ。あなたがひまだからつて――あたしこれでいそがしいのよ」
「でもまさか、夜中にお稽古にも出かけないだらう。二葉會だつて、ピアノだつて、お花だつて毎日ひまだらう。」
「ほゝ。あんなものはみんな廢しちまつたわつまらないんですもの」
「あのかめ。ひまぢやないか。――それともこれからダンスホールへでも出かけのかい」
「ダンス。いゝわねえ。あれなら習ひたいわ。あたし一ぺん見にだけ行つたけど。テンポが早くて官能的なところがとてもすてきね。」
「ぢやあ習ひに行つたらいゝぢやないか。」
「へえ、うちでいけないつてのを知つてるものだから。――ね、どつか人の澤山こない所で、こつそり教へてくれるとこないか知ら。をぢさんどつか知らない、紹介してよ」
「まあその方なら村上君にたのんだ方が早いだらう。」
「人が惡いのね、――でも村上さんこの間つからあたしのこと怒つてゐるのよ」
「どうして。またお轉婆をしたね」

日切者の金次車中無聊に困じ貴帶の林和靖を
を讀ち佳々愛心の詩を一二と毎江東金に知る

山中冬日

殘雪照一離莎、空山無伴詣、翁寒懷下樹、人晏
獨閒門、磨圓春果動、回塘霧氣昏、誰家窠
酒瓶、輟棹懷西村

北山宮望

曉來山北景、回書亦屈曲、村路亂黃昏、人家遥
翠微、雉雀雲外見、僧向月邊歸、一曲誰橫笛、
莫令白鳥飛

山村冬暮

衡茅林麓下、春色已微茫、雪竹低寒翠、風梅
吾晚香、樵烟多獨往、釣事不全忙、更聞有
時起、横笛過野塘

秋日西湖閒泛

水氣并山影、茫茫已作秋、林深喜見寺、岸靜
惜移舟、疎葦先寒折、殘虹帶夕收、平蕪生
何處、歸興起漁謳

小隱自題

竹村幾畝深、沽酒新有後、鶴閒臨水久、蜂
懶得花疎、酒爲防閑卷、春陰入苔鎖、常憐
古圖畫、多半寫樵漁

○芝田滯生中、仰友ども野人の面と左の数歌をうる

小子新日記歷史、四有部編一
明治廿六年、新日記出版
巻末に奉行表を載せ
れ冬青に役主つくるもの也

北溪新吟　　井三編　一冊

明治五年　四月発行　新日新
吟に先ちて劍妃の新吟出版也
月宮帯刀を首魁とし、一
撰騒擾の記なり　所謂大河内一撰也

元永宮本源氏二番　二冊
紀世流　明らかに修正あり

古侍従記物
　　寺山延寿の手写本　一冊

新井田藩の末流家　大数顆

新井田花柳さうの二枚
　　初君追善花合の歌　條
新潟学校紀要　余のこのれ　とう流初の
　　美しい枝　（のみ流　六十）
蹴鞠一枚

蔵書印

蓑山拾得を寄する義明細之也

外に寄物　なんとも一さ記さず
新発田藩　藩侯直長出的の通鉛筆
目録略あり其の既未今尚存す某
友人二枚印刷物も明らる

長澤松角の書　横山親猪句月歌紀
横絶句　こん共と余の未れちとうの又切人
　　り明らと共に余の枝の中袖論書
の枝友上四長水次ら左の枝を寄せらる乃ちこゝに枝
ゆ

誰家領得一仙寰三聽松風
鳥語間麻吉墨り休如説
豊碑鮮至玄神山
辛公爵天神山拝市卯家墓　題

○新潟の日右の菊花（昨年）日清枝書畫
の横毫を設設す　余所を訪ず　一家四聖堂
の作る三尊のうちを　拙き　余心寂の
が身を助るなどの不仕合とハ別人の謂か　保生
大震災と多く災害を受ひ　今ハ生活に困む画
業を動かさざるを得ず　也　坐忘と十数の印
を見る　博重余の印　癖を知り一二を示さる
中に山陽の刻印もあり　刻も佳　銅の四角に
蛇紐あり　災後癖　所と京　余なるこんに逝
と是の印義を語る　六月十吉　新潟の
客舎に於て

山陽刻

竹雲刻

襄海刻

蘭台刻

○澁澤子より米壽の祝宴を催し給ふて謝禮と
紀念を兼ね用帋を賜ふ大なると前者の恩
二冊を一帙となし玉ふと銀紙の書鎮を贈ら
此書鎮こそ子爵の詩を刻し給ふ子爵は壯年より
子爵を慕ひ給ふと深き自己の詩集を
如何なる世に出でんも高氣の為
に出版して共に酬ひ給ふ

業なりもうとなす人の後のを訪ずして流れの上
り（六月十九日記）

○今次の帰着専ら五年前墓参寺の紛擾を聞
きとするまま去る三日間滞在に没頭し新潟の
疲憊を覚ふ。漸やく理事分新潟に滞在
中初の人多く来り訪ひ挨拶を交ふ。この赤松
蹄き清涼を得さるべからず。偶ま行形亭新
築敷を築きたるとき三四の友人を誘ひ
座敷に北風亭の左隅に位する二
間の新築の家の家の前に位する所
室なり。家主五岸主世の日屋に今年所
也。今は二階建なる六室を備ひ彼横木美也
使来行の形亭の鉄瓶の大室なるとなる今

横原蔵

こ通する室の無かりしあり北の新築を得て初
めて那を茶屋と伝する得べし。近来北家の男
まとなる北の新築なる新田なるべし。余例の
如く縦横四畳半を屋敷偶ま新田の書佐市春
流来る酒次城後に算法の大家を生じ
ことなる（き金と別なる算法田理三台
北小千谷の佐藤雪山なる算法田理三台
なる書を著はし近年洋算の大家の激賞を
博し西脇海三郎書を出版して復者と欲
ちしことなるも記臨するも吾郷里西原
山口坂山といふ算学の大家あり坂山と雪山
と答する関係なるやの間に第七八余答ある

ことを得たりし。坐中寺と図書館も村崎諸雄氏
の金村路に移りて、彼の異法円現三台を元
宮のもりに、之れを見す、雪山の傳中初めて
坂山の門人たることを知り得たり。雪山の傳
秋庵三ヶ忠助なる、云ひ解記を私し
なる。雪山の黄的と傳する円理の外人も敬う歎する
所なり。現在の傳士三輪板一郎三上義夫の
専門家の審査を経て世に紹介さんとす。紅燈
緑酒の間に北の不似合の事実を知り得たりし余
の寄りたること所也。石川坂山の事歌の北巷の上部
に掲げある自保七観るべし門人中に名ある人の
ることを思へば坂山の偉を想ふべし

新潟を去らんとする日松井部部法事あり、終日飲み終
に席を生命に移す、生命の生涯の喜び我旅
舎と濃き潟と端る旅亭也。もと豪商小山某
の別荘を大島屋なる割亭を買ひ
既に年あり。余未だ一度も訪ふ事なし。北海
信川と隣へ酒肴を配し。偶々重美代格の
紫格二ヶ所ありしなる後二ヶ所の理三工事
今回さらの間也。今次の紫格い長さを百尺間に縮
めて石垣をなし、川も南側を埋め、私を中央に導き
人比不自二十坪。奥二百五十坪。余北の母
理三工事の私利上の得を知らず。死んだる理三
工事。この時を想ふ。今日の風致八坪

八木上矢部村にて鶴ヶ城帳なくさるを得さる
ものゝ萬代橋もと八木明直の私宅に初まる、而して
今日にいたる石橋成れりとして八木長断す、人ハ八木の
石橋を見すして過くるを悲しむと雖も或ハ之れ
を見すして幸ひとするも知れんなり、川幅
狭まり、洋々たる長流を見るの日、八木をして又也
しめハ余と同感ならん、次浦江に来り
平吉家と呼ぶ所に北のかた橋あり、而して
男異なる旗亭に入るハ北の生氏と呼ぶのり
形の新築なり、接客も酒も好ふ傍らも例
なり
○同者の日記に五峯の余南義二の来訪

人好む酒量あり、余酒の酒の如く軽
の中用に濃厚酒に飲しむ能はざるを余
痛まること得ざるを且つ多く飲むに能はざるが
故と晩酌をなす為なり午前と雖ども、余
共を解する能はず、故を問へば云く晩酌
ハ酔へハ則ち眠る、甚だ楽しく、僅に飲む
の酒ハ書と指を差すことと成るまゝ北言味ふ
なし。酒気を長く味ひ得るハ書酒のみ、酔ふて
直ち倒る快ハ快なれども酒心地を味ひ難し、余の如き
ハ書酒を好まぬ、晩酌の味を識するが故なり、酒ハ
酔ふて眠るか酔ふて目覚るまゝ、酒心地なる味ふ所し
まんハ南の如きの直に酒を知るものと云へ可なり

○長屋海田の書情を婦人[illegible]の[illegible]に南を指さる[illegible]
風[illegible]る金北人の書[illegible]を愛す夢を[illegible]情を[illegible]
す所[illegible]伏し今有[illegible]るしの市物来を書い[illegible]
面[illegible]あるるの、老詩と云く

陳[illegible]
何事狂[illegible]
[illegible]

自天[illegible]
[illegible]

織信海宮[illegible]

海田[illegible]の人海田の[illegible]が今[illegible]

六月[illegible]記

○孟田秀[illegible]へ比較的近年まで存命であった印人
[illegible]が逝[illegible]

所に横たへ斯人日去町の柳橋の横斜に住し、あ清
家に陰枝の場[illegible]とうん秀美の[illegible]枝者の
[illegible]と枝の[illegible]
[illegible]に海を[illegible]の画を挿んで愛玩[illegible]
破鏡歎の詩[illegible]あるしとうも珍[illegible]
表[illegible]の海[illegible]
俗中の仙を集[illegible]
氣の[illegible]
[illegible]仙を[illegible]
家に斯[illegible]格を[illegible]
[illegible]士人の面目を[illegible]
○日本の風[illegible]の歴史も[illegible]

風習を保ってゐるとゐつたのである。大祭祭又三殿
が設けられるのが恒例であるが、三殿の其一回主殿八郎
浴殿であるが神事をもつて同じくもつて陸下八神
事に先だち入浴あらせられるのが例となつてゐる。神子
は身を潔めることがあるが大切であつて、宿直
する。所謂さゝぎ、ちるあも浴びあるが、佛教
指定も同じく浴を大切にされ、考えを以て斎を
除く法として極楽寺の思想上人は十八間の大浴室
を設けて風呂供養を行つた。えらい先きを見
皇后がお手づから千人の民衆の垢をすり落し
給へりといふも実際の風呂供養であるのだ。北條
義時も之れを行ふ。俗に風呂を修し風呂も修する事の

為めに

まることゝなつたのである。いつごろからとゐふことは分らな
いが、豊太閤八幡山に建てられた元雪閣を今移して
西本願寺に移したのが、その中に黄金の浴槽もあつた
浴場がある。あの風呂式であるが、硝子窓の楽
のようなものであるが、東寺の洗心寮などは
風呂も初めは宗教的であつたが、後に
交流事業的となつた。風呂の形式はいろいろあ
つて、今は日蓮宗と浴槽と身体を
ひたせやうなものがあるが、昔は蒸し風呂
が行はれ、流をすると云ふ温泉を云ふことが主び
あつたらしい。湯気が充満してゐるから、或は石を
熱してゐるこゝろをかけて湯気を低つたこともある。

横原製

風呂桶風呂などと呼ぶて湯槽を二龍門に密閉の蓋入る形式もある。風呂の入口をざくろ口と呼ぶことを維新後の式又は式の名残を留めたことのあるもの。風呂の形式の種々なる形式のおもしろい風呂が残りをるを金の上の桶かあるもその桶に人の出入の戸があるもおもしろい一例である。風呂を意味の異に倍したことは湯女が酒を肴めて三絃などかき鳴らしたことも昔かひある事柄なるべし風呂の垢まり場を浴室がれを修せもあるを浴かを修めもあるべし江戸伝説のいた風呂もあり風呂かある。まんをおろすとをるを解剖の式に倣つたものとも研究家にまあるもあるの日本は

以山間で別の意に用ひ温泉かあるから用民と温浴の習慣かあるやうに一概にこうはいへぬ神道佛教は終人で世界に数のるい風呂好の習慣が起つたのか方か海南ひあらう。

二月廿二日

○未廿九の古山金銀を採を田中伯の慰方会を開くこつき伯の切動や人相評や經歴やを席上演説するつきこと幹部ではそれ(を)南の人を移集まる方り流味方面を談する人かそのかくとこあるを自分はそれを撰南せよと特は依頼かあるもの()むそくそれを説しなる伯の説味は就れの余か強者に大略考いてあるから別度童複を免れ得ず()

説き方を就ては改革の必要と共に全く新道つけ故
向るしといふ方法を採ることである。
農業人中多数の名士があるのは偖置
を顧みず自分が興味を起つて譚ひ合
幹から内談があつて、伯のいろいろの方面を
分撮して視察を陳べる献立が出来てみ
るが、伯の趣味方面を語ることのないから
君に依頼するといふ事で、辞退が出て、聊か
男子の感する所を陳べて視察に代へる
ようと思ふのである。
伯の多方面に趣味をもつてゐることは伯に
交りを厚くする人誰も知る所である。

るが、其の多くの趣味の内で伯が最も精神
を打込み、深く濃かに研究もされ楽の
みもされたものは恐らく刀剣の趣味で
あらう。私の特度でいはるが、伯の多方
面の趣味の発点は刀剣趣味であら
う。伯は少壮国事に奔走して元治の間
に大奔走をされ頃から、刀剣の刃の非凡の
鑑賞力をもつて居られたやうである、即ち
天才的と一家道の鑑定家であらんとせや
うである。それが自ら研究を積んで斯
道の大権威者となられて、恐らく伯
の多方面の趣味の内で代表となるべき

北の刀剣趣味であるやうに思へる。凡そ趣味は人格の現れである。高雅の人の趣味は高雅である。伯が春山先づ刀剣の趣味を感じたのは偶然であらうと思ふ。恐らく各般の趣味の内で最も高雅を以て許さるべきものは刀剣であらう。伯が北の趣味を以て第一人者に推さるゝのは取りも直さず伯の人格の現れであると謂へば足らぬ。

伯の趣味を談ずるのは進んで伯の刀剣趣味を語ることである。実は私は刀剣に就ては全くの門外漢で、之れを語るの

標原製

能力をも欠いぬ。実は伯の北方面を語ることは斯道の先輩諸氏が著述中に尽く挙げられるべき筈なのに伯の心得のない私が彼の是迄すのは甚だ僭越の沙汰で、伯に対しても失礼と思ひます。伯の趣味方面を捨て南方面を選んだのは、北の最も大切である一点の伯の別荘を於て刀剣鑑賞の奥義を究めるべきことを教へつゝあることがあるに就ての話。実は伯のお話し

[illegible]日のが自然日数を費引くのでは何人も分るであ
ろうと思う。
他は刀剣の極致を論ずるに外ならず、尤も多くの刀
剣は特に特殊の人の美術であらば、特に特殊の人のは騎馬の人である。馬上
の人の刀剣は自然長からざるを得ず、長ければ
ば重くなるが、重ければ操縦不便であるから、細身薄身で無ければならぬ、そうすると
折れる憂がある。折れるようなすぐれる鍛ひ
かたは無ければならぬ。常に其上に特殊なる
人の刀は品位が高く無ければならぬ、やきも流れも
も自ひも上品ひ無ければならぬ、以上を具備する

榛原製

ものが名刀である。唯に単純なる切れるとか
ある比けれども未だ許すべき名刀とは云へぬ
である。
他の名刀觀は右の如くで、私は刀剣に門外漢で
あるけれども此おの説に感服した。実に骨髄
を穿ち、刀剣と人とは其の極致を云へば同
刀剣に就て有ること、のである。他の
に就ても同じやうな説明はやかて他の趣味
他は書物に就ても趣味をもつて、そして
此方面は最も重きを置かれたのは古字体
である。常つて治平義の古字体をおもしと

ことがあるが、如何も殊勝
逆流の文もあるとも。何人と云ふも書物部類
で最も高雅のものは古宮殿を第一に推さな
ければならぬ。刀剣を以つて比較すれば元帥級
のものである。私の北方面も伯の高雅な人格の現
れを見る。
伯は庭園に取味を持つて居られる。伯が自身住居
されて或つうの帝庭を相見して常に感服させ
られる。伯は伯猶自の意匠がもつて決して他人の
跡を踏むことをせぬ。宮内省技師等の相
当の作庭家がある様子で華族方の庭園は
多く宮内省或は伯の宮内省に頼へ

関係があるのに、全く面目が異つて如何も自然
の趣が備はつて、金具は所々に微塵もなく伯
は作庭の名手と云ふも差し支へない。私
は北方面に於ても伯の人格の現れを見る。
伯の各方面の趣味を一々説くことは時間が許
さぬが、私が伯を最も敬服するのは、伯が趣味
性を高尚に高くして拘泥せず、執着の無いこ
とである。およそ何事も趣味を有すること
事として美に根柢を執着のある人
は、何事に於ても必要の如く、其の切れ
ぬ趣味のよいことは真に花力唯ならざるものがある

これハ尤も及び難い気ぶりである。嘗て岩崎弥太郎氏、刀剣の鑑賞を移したい為めに自分の所有の刀剣の内最も愛玩さるゝ、あるいは無雑品らしいものを選び、貴重な愛蔵の心相を銘らえたことがある。貴重な愛蔵の心相を銘を書かせんとして或る文人を招きて、フトたくらんだ処の研究自分が珠玉するよりも北文人の方がドウ以上珠玉するひめらうと共人に好らんだこともある。私が早稲田大学の図書館を注意してみると、六朝写本皇侃の礼記の義疏の複製本を注の必要の及載をしとゝいと手紙を差上げ所、数ろいたことろハ面白くこのしをつけて好らんだ

其後伊藤の別荘にお目にかゝつて陳謝し此所が伯の言ハゝるのハ拙ハ豆を所を得るとハ拙と共拙の役立ひ、俺んハ折角天平から大国ゆゝ到る古文書を集めて見ず、之を平稲田に献しひと申さんに、私ハ金銭の浦原去を右り難く思ひて決して以上伯の浦原等の望を有つてみるゝとが、伯の浦原をとして名高い六朝の玉篇を就て其清思を宗教つ比所、伯ハ成るもとあんも献すべきこあれと中さんとのて、自分ハ数多き但つ真人比、実ハ皇侃の義疏ひも私ハ命ひも古文書ひも所回寄せるべき次第のあ

る頗る貴重のものである。殊に悟しむ所多く、サツサと世へ出すお乳輕さは全く發爲かされた。故味界又は自分の知る所は伯之亟敬する[redacted]人は一人も[redacted]る。此他折角二年集めた俳諧前後の勸王志士の遺墨を私の戸や畳稲田や此ちの山今彼や沛々卍生作く筆の勢さえ此こと[illegible]の著しい事実である。皆伯の人格の現はれである。

凡を俳味界に指を指を指を集めることは誰でもやるが、此こと執着して教ることは甚だ難い。俳諧かへて手離すことは難く

ハるが、無代價に淡泊に手離すことは最も難い。但し漫に教し無意味に手離すことは寝ぬ比銭ひろへが伯の自家の長所品の置き所を定め、苟くも面白の家とならんハ、此こと難く悦んで世へ出すこと如斯が真の趣味家であらう。伯の如きハ趣味家中第一人に求めも得ず一人を得る稀なる人と私共ハ敬服してゐる。実に出来難いことである。

二月廿四日

○矢坊河教第中文の巻紙に書き方ずこ立寄り四五の回者を婚ふ

一 拓銘拓本集　一冊

各種拓の烙印銘等の拓本五十枚を
収む、延寶的和歌等のほか古代の
ものの無けれども各地のものも冊新
に見集めたるもの

一 河鍋暁斎画書簡裏表貼交屏風　三冊

暁斎最晩年の作品が標本に供せ
らるべき書簡附屏風の形式

橋原製

初年の世態を画したるものなり

一 南海白譜　巻三冊

紀伊の山中信吉の俳輯に係る相譜
に書名に増訂とあり、略言也

一 將軍東国録　二冊

大学頭林輝国著述、国書精法
体の業績、七備八り頗る注意也 價
四十円

一 類聚雲住種月據摭藁 五十六枚 一冊

永祿八年十月 城後新宅寺の僧祖順
の筆寫こ保ゐ、卿四の緣因ある所以也 嘱ひ入

一 大阪相撲 二冊

明暦四年の奥書を刻し写生也

一 北海圖録 一帖

小海道の風俗を圖し写稿もまた著
者詳かならざれども圖板元化より
西俗の圖 五枚部 巻末の圖もあ
り次後のものと思ふべし

○炎暑漸やく加わり登山の期節迫る、偶と筆を曳き神田の街頭を巡る一店登山の補度をひさく家あり、店頭のエヨウ、ルーム、ル、文山野晝台の状を寫し出し完然実況、山小家を背景として外部に白樺二三樹あり配するに文山植物を以てし、登山用具を坊々に掛置す、ピッケルあり登山靴あり、登山背嚢あり、低米むの

而も奈良、アルミニアム先生の銘を初め四五の名
工狼藉等、性比四登山の人物を欠くのみならず一切の
この備なく、最余低四方なる能わず、登山の念とみな
新鳳すれども、老齢之れを果す能わざるもの多し
ちん

六月廿五日記

四四方方山伯の製作金の後、伯の刀剣
数味なる文字かあるのみ、人をして伯の陸
下に献上されたる刀の銘や由来を問合
はせたる所、津伯の節を記して齎らしもき
れ、則ち其の要旨をこゝに収めおく

六月廿五日

田中伯が四代天皇に献上せる刀剣は右の
二振りにて、其他あるべからざるなり

二十八年一月十四日伯に宮内省書記官及総
代として廣島大本営に参候して拝謁を
賜わる際、伯秘蔵の名刀一文字助宗
を献上に及ぶ、同じ時に岩崎弥太郎
氏も備前助平の刀を献上せり、北陸時
地方宮内大臣が陸奥にて北陸
下に北助平の刀へ北陸と銘を切る土方が老
て善と感ずる者なるか如く作へ長くして中々
の業物なると申上げたる北助宗の刀へ
細身にあつて、後の陸下の陣軍刀

こゝ御用ひ遊ばされし
他の一刀は日露戦後祝捷の意を表
まるとなり四十年十月陸軍
陸軍特別大演習御統監の為の
該城に行幸の節
際伯爵は其の名刀備前友成の作
誓丸を献じ奉る

みいくさの朝な毎に勝山の
城なるつくし太刀とぞまもる
大前にさゝくる太刀のつかの目も
てるいわすんじ君が為みを

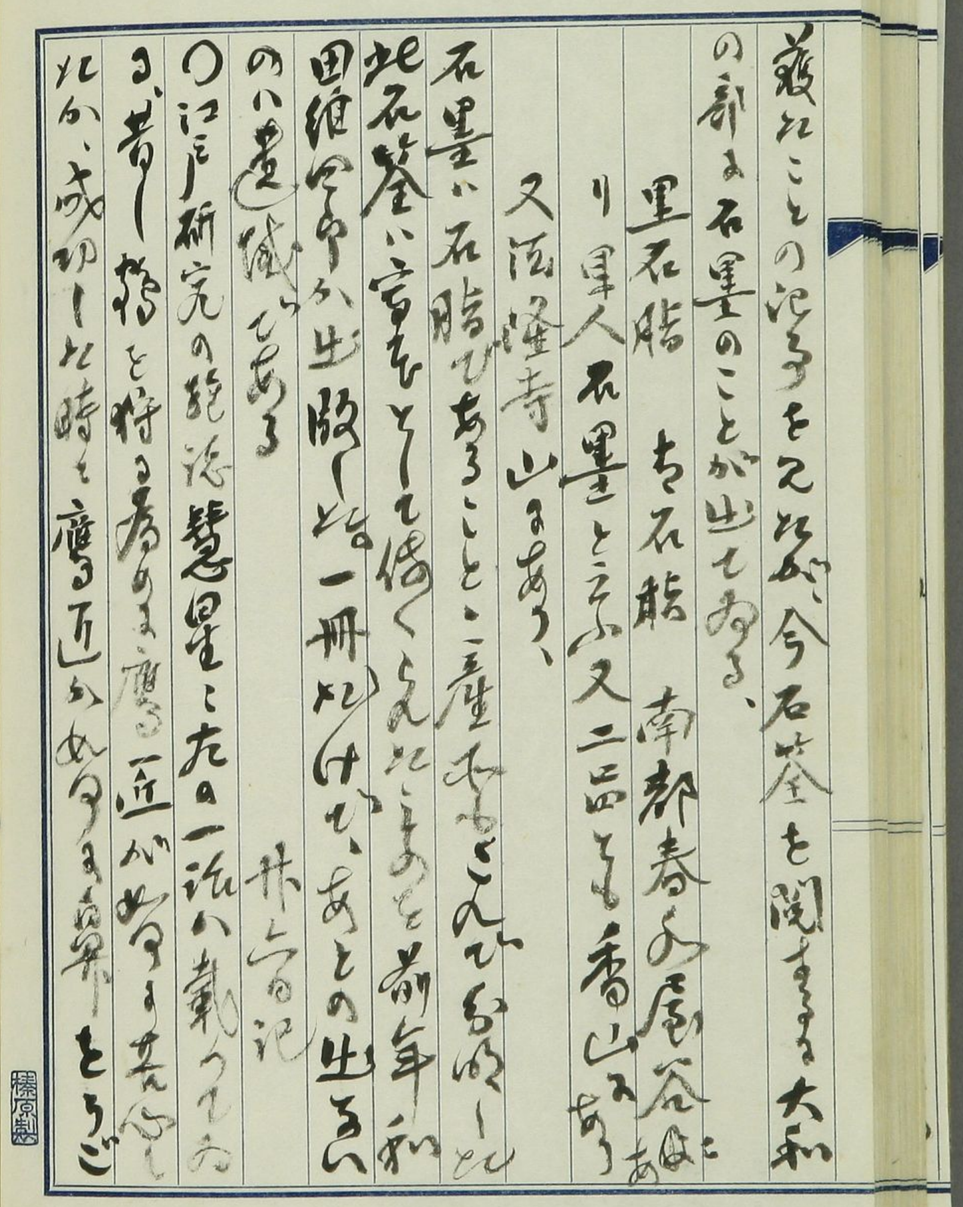
樣原製

此誓丸の名刀は後花園天皇の御宇足利
特氏の遺孤春王等の遺臣と称せる
て該城なる佐城氏朝に伝り兵を挙げ
し将軍義教は大軍を率ひて佐城を
攻め氏朝敗死するや春王安王は小
宣原大膳大夫政康及長尾四郎等豊
景の為の擁立せられ京都に送られ
次美濃守四郎と原と斬殺され此義
義教は小宣原の太刀を以て切られ
重代の誓丸の太刀を以て切られ
京の子孫は城前勝山に移る
山城の宝物として伝へられ

伯家と伯いりとなるが田中伯の手に渡し、也元
刀と謂き歴史の因縁ある法城を行幸
を機として献上されたのだ。
田中伯が銀刀の仲介で高杉晋作との沖の関
係を話人といふ話かつて伯自身から聞へ
たことあつたが、其の刀の銘をも忘却したが
其の刀は義の伯の長崎原兵衛の作で
永禄六年八月吉と銘があつて中身は二尺
六寸で、長崎人摂津城主元吉
久嘉作二つの差料であつた。伯は其之
年四月十日大和十津川に逃れた
此の推原記の日書部の謂る情なれ

のそれと知られ、伯の伯刀伯前祐春と
交換したのが此刀の由来である。伯は此を高
杉晋作に接見した時に此刀を帯したのと
其が高杉の目に留まつて、ひ〳〵と強請され
同市の関係を結んで割愛することとなつ
た。一振の刀が薩長人から土佐人から
去る人へ、さうつり、薩長士の強請とちつと
のものの因縁である伯の法城で
ある。

○いつぢや古物商墨清の序跋を読み、国主が自身
の石墨を藏する其心一途に南都の手に



献上の鶴

将軍の鷹狩の中で、鶴御成りに自ら放つた鷹が好結果を得た時は、鷹匠同心の中で、押へる役の者が飛んで往つて、一人は得物の足を押へ、一人は頭部を押へて、醫者が腹部を解剖して、臓腑を抜きとり其場で鷹に與へて、善く改めた上、直に縫うて紙を張り、四隅に老中が判を捺す、是が所謂老中御判なるもので、太き繩で結び、青竹にくゝりつけて、此場から直に京都に献上するものであるとやら。

鶴を取つた御祝ひ

鶴を取つた鷹の御預り主なる鷹匠は、直ちに使を千駄木の役宅に報知をすると、留守宅では座敷の疊を擧げて裏返しになし、主人の歸宅を待つ、やがて無事に鶴御成がすみ、將軍還御の後、鷹匠衆は各〻自分の住所には歸らす、前に報知した預り主の家に往つて、御目出度し々々と唱へて、土足の儘その座敷に上り込みて、主人を胴上げにして何とはなしに、騒いで祝つたものだ、同時に出入の疊職人が來て各自が歸るや否や、直に引直して元の如くに爲たものだとやら、此時御祝儀として、上から金五兩を頂戴したものだが、又中には御祝ひだとて、藝妓など呼寄せて馬鹿騒ぎをして、結局十兩も足前をするのが、常びつたりになつたと云ふ話、若又己が御預りの鷹が、鶴を取り損つた時は、その鷹匠が失心して、氣狂ひになつた者も往々有つたとやら。

將軍の鶴押へ

家茂將軍は、若年なりしが、仲々剛氣の人で、或時自身自ら飛出して、鶴を取押へた事が有つた、將軍自身で押へたとは氣付かないで、遠くから誰だ誰だと大聲で呼んだ者が有つたとやら是は上將軍より下同心に至る迄、野歷の御裝束は一樣で、同じ色、同模樣で有る爲めに、見分けが付かなかつた爲めである、又鷹野の御成には、辰之口から乘船したもので有るが、これは本丸御出生の方に限つてゞ、分家から這入つて、荃君となられた御方は、必ず日本橋邊から船に乘られたものだと言傳へられた、鷹匠衆の役宅は、雜司谷御部屋住居と千駄木役宅と兩方に有つたが、是等の話は千駄木の方に住んで居た、戸田支配の下の鷹匠衆の遺老から、聞いた話である。

○愛犬が死してからもう犬は飼うまいと思うてゐるとある人から生れて二十日ばかりの仔犬を貰はれ、犬好きの家族一同いろいろもてなしを加へ（既に三十日程経過し）此犬はポインターの種族で色は黒く栗褐色で男性である、ブザけ盛りで元気盛んでこれじゃいのと、名をモボと命じ、其後の数人が新年会に連れて行つて皆々珍重し、紹介を任ず、新年会も良文と保也の二人の抜きを一人宛一人宛出席、前のブルは初時から品位高く閑静で面倒であつたのに牛乳や肉を喰つて食いおかしくなる位炊ばかりをする人である。

○先日の○新聞の通報で五七の校長を招いれ中学二十一二の数が二三人ある此内二人の家が養蚕高ろうろ豊富であるので、相当の教育を受て此養蚕のまとまるまでの事を知つてゐる、彼等用士が話すのを側で聞へてゐると数の多くなることが養蚕高ろうろうろうと可なり或る所が終こと養蚕高の方がよいと決心したるといふを聞へて嬉しく思ふ

○多の学校生徒の社説を記しあるさる松坂屋でマヤキンを見た、前日見たから多い海の股宣伝の為め、多の股を着けてゐたから

一層エロテックなつくり。男性の心の奥の未
成年といふ雰囲気にテツカ甘といふかあるそんなか
うく要男する、テツカ巻を崩して丼を入れ
ばあれ、まくろのかりり身日を飯の上に敷くし
て燒海苔をあしらつたものに濃い茶
を[illegible]ぶつかけ喰べる。酒徒の飯ある。
の昨日大隈信常侯の主唱で華族会館に国史
回顧会の発起人が集つた時自分も出席の席にお
いて国史を回顧せんとの時勢が
愛つて来たれば不[illegible]寧ろ後輩が[illegible]寧ろ
今の国史を全く知らざるものが多くなつて国
もとの方が善いかもしれぬ、コンナ会の起るも

今の政治家は後に招はることとなるかも知れぬ

偶然にもあらず。此日は恰も不敬罪が起訴
されこれに対して弾劾をひらき例の人民の名と称
するものが遂に宣告を決するの日で政府の
七苦八苦の倫えもあるる。忽ち今日の弾劾のが
無い込んで来た。内田金指が金銀の席で迷惑
のあるその弁疏が立派に出て終に起訴決定
解散するもつたと弾劾が報じたのは私は国
史回顧の裏書をするこの美あり此の意
大事件だと感じた。人民の名に於てもいふの面
洋の於てこを言ひ得ることは日本の国体と
於ては決して許せんることである。えんの意
法が公示するのみならず国史の回史に面まんば

理解の出来ることである、然るに全権大使なるものあらうものが、亦其上に立つ外務大臣なるものあらうものが、ウカト條約の原文を訂正することなく調印する事大使、等閑と注意を怠つた外相の責任の大なることいふまでもなかるべし。彼等は西方糊塗を試みたりとも、松本院特派員の言ふ所の如く虚偽なる外交なりとの非難の帰結である。光竟外務当局は西洋の気風と解かずウカト注意を怠つたのであらうけれども、我歴史を知らず日本の国体を解せざることが出来ないのの不注意も来した原因であると云はざるを得ず、大使大臣既に如斯し、而して

横原制

この国史を知らず国体を弄ぶ、我君民の関係を理解せず、萬世一系の天子を戴き、天子い国民の心を以て心とやうやう稍々の国体やうやうも考へず、之れを西洋の諸国と比し全然我国にはない雄きの妄想を擬し来る弊のあるも何ぞ怪しむに足らんや、国史の国体い先づ大使大臣に向つて徒に注意せざるべからざるとん金ふ席上に於いて風しいる不幸也

國史回顧會設立の趣旨

我國は世界の大戰によりて甚大なる衝動を受け、一面大に國際觀念を喚起し之を發達せしめたると同時に、他面國民の思想信念をして殆ど混亂の項點に達せしめ、實生活に卽せざる言論徒に人心を糜爛し、國風に適せざる危激の思想隨所に横溢し、爲に我國民道德の根本と我國體の基礎とを破壞せんとするものあるは、我等の大方諸君と共に憂慮に堪へざる所である。

斯の如きは畢竟するに我國と國情習俗を異にせる外來思想の眞價を識別せずして之を妄信し宣傳する者あるが爲であつて、或は好奇心に刺戟せられ、或は怨咀の念に驅らるゝ輩、動もすれば之に附和雷同して遂に今日の情勢を馴致するに至つたのである。

然し苟も我國民が我國體に對して確乎たる信念を懷き、我國風に對して明覈なる理解を有するならば、一時過激不逞の思想が如何に殺到し來つても、我國家の基礎は秋毫も侵蝕さるゝものではない。

然らば此健全なる思想卽ち我國固有の精神を振作する捷徑は何であるか。曰く一に國史を回顧するにある。我建國の由來を繹ね、天壤無窮の本義を明にし、列聖の洪謨と臣民の忠誠と相俟つて玆に金甌無缺の國體を作り成せる歷史を回顧したならば、發憤奉仕の念は何人にも油然として湧き出づるであらう。

歷史は明鑑である。國民の妍醜は悉く之に映ずる。歷史は功過の總記錄である。國民の眞價は之に依て明になる。我國が古來隣接の東亞大陸より文學、藝術、宗敎乃至凡百の制度文物を輸入した當初に於ては、外來思想に累せられて危機に瀕したこともあつたが、善く之を咀嚼し消化して遂に我國獨特の優秀なる文化を發達せしめ、內は國民思想を向上せしめ、外は國威國光を發揚し、今日の我社會組織、國民生活の基礎を確立したのである。之は實に我等の祖先の赫々たる偉績である。乃ち我國體の精華は廣く外國の文物を攝取して其善惡利弊を甄別し、巧に之を陶冶鎔鑄して卓越せる新文化を建設することにあつたのである。

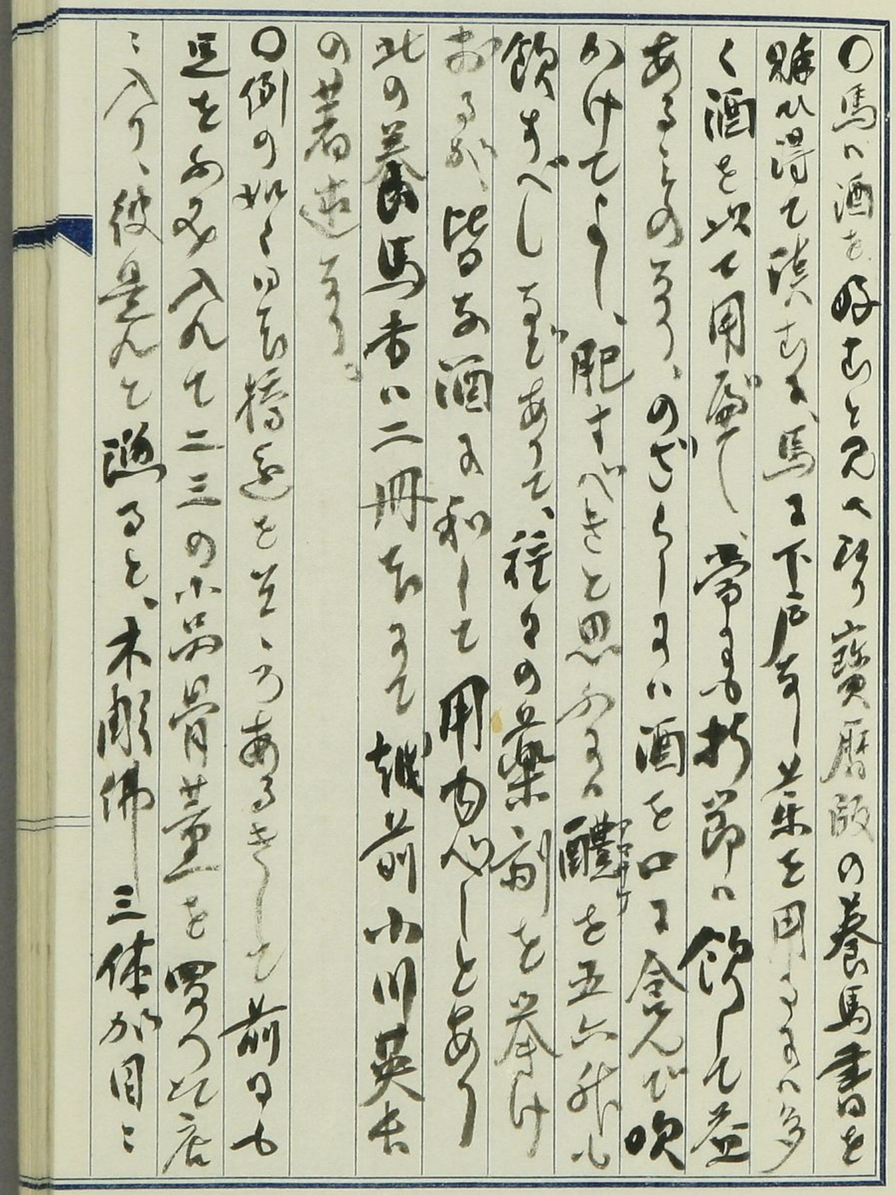
之を過去に照して將來を推せば、今日外來思想、外國文化に對する態度並に其歸結は自ら明瞭である。我等は徒に畏怖し又は悲觀すべきでない。確乎不拔の信念を以て之に對應すべきである。而して國史に基き東西三千年の文化を鎔鑄して新に卓絕善美の文化を作り、以て我國民生活の內容を益豐富にし、我國民精神を愈向上せしむべきである。而も此事たるや實に我國民の使命にして且我國民にして初めて全うし得べき天職である。

方今國際間の親交益其厚きを加ふると同時に、民族間の競爭愈劇甚となるの傾向を呈し、思想界は逐日混亂に陷り、國民精神は動搖不安を極めて居る。或意味に於ては國難に際會して居るのである。此非常の秋なるが故に我等は國史を回顧して先人の遺蹤を尋ぬるの切要を痛感するのである。由來國民が特に其注意力を國史の上に傾盡する時代は決して尋常一樣の狀態では無い。卽ち歷史研究を機緣として必ず何物かが出現するものである。明治維新が國史の回顧に其動機を發せる如きは最顯著なる實例である。今日此際我等が國史回顧會を提唱する所以は實に憂心冲々たるが爲であつて敢て他意あるのでは無い。而も我等は固陋の謬見に囚はるゝを欲せぬ。思想の自由を尊重し以て健全なる新思想の發達を希望するの點に於ては固より人後に落つる者ではない。

希くは天下同憂の士、我等の微衷を諒とし、此企圖に對し賛同を惜まず、以て我等の目的を達成せしめられんことを。

昭和四年六月二十六日

侯爵　大隈信常



ときうたの高さは各々二寸足らずの白で塗土剥は剥
落してみるが相がよい。「私」と天皇自分
京都生勤こと初めて求もとめ、えんはあとか
ら吉いたのだが、確こうえ其の時代があって、
まの品柵のこうめうえ接めてふさいしいのと傾の
蒔絵入れたれ、外に瑞珊瑚
蒔絵をするを任せた婚い入れたれ、外に瑞珊瑚
つたれ大、セークスピヤの肖像と其のコテージ
を刻したれ英国製のブラスの紙切を被
せた。此日市長とよりもの柿の海岸の鮫屋と寿
司と天麩羅を下ち祝に酔を買ってえんから
紙吐と回いつた資生堂サンドウエッチを
喰ひ紅茶を飲んだ、隠会不用和の献立

で長さうで、それでもうの国お会の模擬会長に
用り喰ひとしたやうなと一ぺ笑しと 六月廿八日
の内田貢(魯庵)氏筆の報が係はつて、国民
新聞の記者が訪れて来て魯庵に就ての談
話をと求めた。自分と魯庵とは国音に
就ての交りが可なり永く続いた。国音刊
行会を最初に起したのは、帝国大隈侯爵の生
徒であつたが、魯庵は出席しなかつたが
交りの始めで其後福井県会を起して
魯庵七支の同人に加はつて後妃して、亦国音復
興会を久しいことと席を列ねた。彼の丸善
の岡吉郎への顧問役であつたことの関係から

外国の事物の通人が為て和書を飜訳する味が多く
晩年は小説などの著書を深めず書を国書と就
ていろ〳〵の書を書いた。自分の著述業頼山
陽を中央公論で詳しく評し傍ら自分の性
格などを評した。彼は「棄ぬ過きて皮肉
の評を常とする斯人うん破格であつた」が
自分は知己の言として表人に、　上月井九の
○昨の乗術家が納沼郎と会事を長うした
際に乗術の由説のつき程る流があつた際
世子の乗術の点を出した。なるべく
今は ナギナタ などを世子の武芸とする時代で
まの、どうかとつのる懐金を潜めるのみ

あるかは、矢張の薄命の為める乗術を或る程
度まで心得てある為めかもしれる。知納の私と手を
指（ようと言ふて自分の手を指出したから、笑ん
ばる〳〵御くさを、するりと外した。驚いた加
納は笑つて見つ、こんなるものだと、私も笑つた。北の外
すを恐〳〵世子の護身用とした一番の大
切であらうと、加納の話は世子に入りま
したものあるけれども困ることまの長く續かない
と、

井九の記

○昨夕の事を書き忘れた。田中伯の祝賀会が催さ
れ十数の人が壇を立つて祝辞を陳べた。自分も伯の故
味方面を陳べた。三上の伯と伝つて正会の文書

糸山文庫の文書まもり騰写されたことは今〻伯の力あるを称く伯は未信仰の古刀の本義為を存ある内四種を伯のみを世に現はすまでの如と称く此伯は文献と切結かある此点は他の大臣の及び難い点である、伯は祖先を尋ねて貴の一生涯こまかしく感じたことが三名既往であつた切のの頃若入の菓子を貰つたこと、雅号蕃未庵隠の号吉野山と隠れみを維新となつて新政府から迎へられた時、岩倉右府が政界に流出をすると時其地りを命じられたこと、そして今日の祝宴が一生涯忘れ難ひ出来事であつた。此の伯と国保

ある会の席上五百人に渡らんと。

自分の演壇を下つて休憩すること二三分間と伯の刀剣談味に就て演壇に立つた。伯は名刀をさして有いたことを話つた。言葉切り刀そのものの味がよい。人を切るを思ひ立つとスパスパやる。一旦抜いた刀は切らずんばやまぬ。何事の新を直截であつて病状である、苦痛も信ずる所を行ふまで徒に躊躇せぬ。明るく武士の面目がある。もし、あの人が習はんとて誤解を招くのも伯の切れ味が能さ)ぎるから

びあとう。立截すれば中間を許さぬ、其の結果中庸を得ることもあり、市人の思議の外なることもあるべし、誤解がこんがらがることもあるべし。併し伯の本領も特異もここに在るのだ。珍らしい人格であると云ふを躊躇せぬと云ふ

二月三十日記

○敬業一二市庵を絶ち二三の同志を招き、中に学びて花しく今興きことのあり、一花敬しなるもの再び獲ざるを思ふ、愛玩せし同きい何時又た同じ情あり、会指動くを

あり日ちん、左の如き詩のかきいこれも

一今才補集　落合直文中買本　二冊

一和漢錦繡一説

一更紗図譜

一好古日録

一同　小　茶　友禄画

一拓の説　図是本　蜀山日記

一陶　松浦武四郎注

一皇朝古印譜

一任羅訪古志　八

一錦嚢印林　二

○近来南座に美顔の女を宣伝用に用ゐることが行
はれ出したさうだ。マチキン招
金を意味するが如し、元から婦人が招き猫
を家に置くやうなもの、実は佛語のマチヂンを
訛り呼ぶ也、字義は人形、此の宣伝者は
時々口を開いて高座の説明をなすことゝ
あんだ、無言でもこゝに立つ場合は、宣伝者
を胸迫れのけもこれは充から人形と一般、此婦
を雇ひ来る所以か　実　五月三日記
○昨夜は複製物、今の男人あ田治郎宅に入りて
晩食の御客を受け居つあるが、婦ひ人なれ同
じを示さんばやまる　古浄瑠璃十七冊は寛永正保

横原製

あり、のこるものが新も入らず、浮橋ものも信夫有
とあるのみ、一部を喫して、正保版の中にも施米
を受けてある、此紙が腰に烟草と烟色を
さげてあるのを見て烟草すきの自分は無
こゝ入つたのすべて待つ冊録が施してあつた
黄表紙大のものである。價五千円といふも安
過ぎるべきこのびある。延海を深めた話
曲芸子本也、せきこまれた坊の迷ハ男の
音しを聞しかつた、田中義美が複製
此表紙は新品物、金粉あり、巻端も
透し彫り塗金の金属製の装飾がある
て煙烟まばらもとこのびあつて。来客の

如こ義田中湖の隠遁(後述)義の行をしてゐた

林義樹の直筆義に倣古印一顆を示された。
中臣氏印と刻した銅印で形八分四方位で既
る大雅の風韻あることあつた。これは前田勤
一郎氏の所有(大)の家に久しく蔵してあるとの
とゆへに

七月吾記

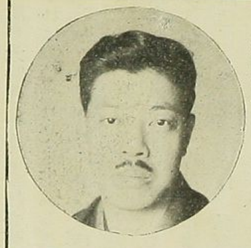
○あのもろもろ今の都人とうつる北野邸墨家
北村四海の貴氏を訪ねて四海氏の
を訪ねた北の柵子の中に有田村の
の像が三基共に夫人、兼に村家の先代の
像も有めてある、あの田舎の深い緑陰のあ
つたことが忘れられない。

○自分と寺崎廣業の交は長く續いたが、其の始めは

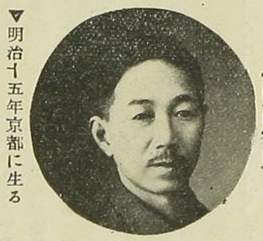
自分が新潟新聞社を辞して上京し新潟の様子を
いふとが日本橋蛎殻町にあつた有尾をやつてゐた
ので、そこへ移る有ると、廣業が日暮でありたの
で、交はることになつた。其頃は東洋堂の伝頼で
東洋絵畫叢誌に収める名畫の模写をやつて
ゐた。隠人廣業の彩画時代であつた。廣業
が殺してから、平福穆庵の門を叩いて
上京したことを少くとも、上京する前に日光を
去れくゝゐたことをとのいふ金く本人から聞かされた
つたが、北陸の美の画、其の国彩時代のこ
とが想ひもあつて、一淡彩の画を見て
る、矢張り其頃から美人画が得意であつたと

美人夕涼の圖　飯塚米雨氏の（日光時代とその作品）參照

寺崎賈藥



▼昭和四年帝展推薦となる
▼現住所東京市下谷區上野櫻木町四三



八田高容氏

▼明治十五年京都に生る
▼竹内栖鳳氏に師事す

▼明治四十二年文展第三回及大正二年第七回に褒狀をうく、後毎回出品
▼昭和四年帝展推薦となる
▼現住所京都市西洞院押小路上ル

附記

今年度帝國美術院會議の、帝展新會員、新審査員、新推薦諸氏の近影と略歴を編して極力御紹介に力めた。

然し乍ら、御旅行中の方もあり種々の理由で、遺漏した方も二三に止まらず出來たが之は故意に形成したものでは決してなく、萬止むを得ず漏れた方は次の機會に掲げるつもりである。

元（ゐ、左ヲ收メ以納涼の圖が日光時代の作品なり。

七月六日記

○時ヲ書店ヲ通ヲ用いつて四五の書ヲ得たり

文　宮本　二冊

花田出公（貴）

がある、元ヲ版本ヲ刷のものであるが、惜しこと

ヲん首部十三枚ヲ闕つてゐる、他外ヲ

宮　一冊

史伝薈伝

ヲ得た、元ヲ元ヲの史伝に仕へた河合正修

の編ヲ以ヲ元ヲの史伝ヲ押　をよ〳〵拠據して

廣業畫伯
日光時代とその作品

飯塚米雨

明治の巨匠として、美術界に大きな足跡を印した寺崎廣業畫伯も、その少壯時代は可なり悲慘なものであつたことは噂にのぼつてゐる。

明治二十一年、畫伯が二十三歳の時所謂日光時代なるものが作られた。それは畫伯が日光に客寓してゐた時代のことで、この間に製作された畫が、日光時代の作品である。この時代の事は興味をもつて、いろ〳〵に話されてゐるが、然し日光に於ける畫伯の生活狀態と、その作品とは、私を納得させるには材料が不足であつた。ところがある緣故で私はその時代の話を聽くことが出來たのみならず、日光時代の作品が、私の書齋に懸けられた。そこでこの作品を前にして話を進めて見やうと思ふ。

豫め斷つて置くが、これは事實談であることだ。當時の體驗者が直接私に談話してゐることで、而も畫伯を救つた一人であるから、畫伯の日光時代を知る好個の資料であると私は信じてゐる。

順序として、この話をする主人公を紹介する。手取早く姓名を言へば工手學校關西支部委員長で、工界の長老として知られてゐる島川實氏。

氏は本姓を桑山氏と言つて、佐渡國相川町に生れ、世々德川幕府直屬の士で、男爵益田孝氏や故高田愼藏氏等と共に佐渡地役人貳百家の一つであつた。幼年に相川町の碩儒丸山溟北先生に贄を執り、故文學博士萩野由之氏や、今の農林大臣山本悌次郎氏等と同門である。明治十六年に上京して東京法學校に入學したが、足尾銅山技師長太田貞澄氏に慫慂されて足尾銅山に赴任して選鑛係を勤務した。時の鑛山長は木村長兵衞氏で、この人は古河市兵衞翁の兄さんの子で大阪に居たが當時足尾が振はないので、翁が態々呼び寄せて所長とした程の人物、足尾今日の隆盛の基礎を築いた英傑であつた。惜い哉三十三歳で早世したが、この木村鑛山長に島川氏は見出だされて秘書役になつた。それは溟北門下の秀才で、詩文を良くし、書に巧みで、且つ剛直であつたところから、他日古河家の柱石たらしめんと竊かに期待するところがあつたからであつたが、それを嫉んだのが、氏より一枚上役の守田兵藝氏であつた。と言つても島川氏に專門的の智識を與へて呉れたのは守田氏であるから、島川氏は今日

でも猶ほ恩人と思つてゐて、昨年古河家の招待で足尾に赴いた節も、日光町に淋しく次男と暮らしてゐる未亡人を訪問して慰めた程である。

「廣業餘芳」の記事によると、廣業畫伯が平福穗庵氏の畫室を飛び出して、日光に行つたのは、此の守田氏を便つて行つたのであると書いてある。そこで當時足尾に於ける守田氏の現狀を紹介しやう。

守田兵藏氏は、下野國壬生藩士で、工部省の阿仁銅山(私田縣所在)の測量技師であつたが、明治二十年に政府が該銅山を古河家に拂ひ下げるに際して、官使も共に古河家で引取ることになつたので、守田氏も足尾に轉勤したのである。島川氏の足尾入所は明治十七年であつたから守田氏よりは四年の古參者であるが、守田氏の方が年配も可なり上であり、履歷も持つてゐるので、島川氏よりは上席に座つた。そして間もなく日光、足尾の中間にある細尾峠の新道開鑿の實測に從事することになつた。今日の足尾鐵道は上州を經て東京に連絡してゐるけれども、當時の足尾銅山の方針では、細尾峠に墜道を穿つて、省線日光と足尾とを連絡させやうとの計劃であつたから、この方面の調査をも同時に守田氏に內命したのであつた。

そこで守田氏は、細尾峠の測量を擔任して、細尾に駐在することになつたので木村鑛山長は同氏の助手として飯塚久平といふ青年を附屬せしめた。同時に島川氏に測量見學のため細尾に滯在することを命じたので、この三人は一つ小屋に數十日寢食を共にし、二人の青年は守田氏から測量術を敎つた。

守田氏は長軀赭顏、頑健な體格の持主で、測量技師としては典型的の人物であつた。また測量にかけては堪能であつてよく二人の青年を導いて呉れた。それに筆蹟を良くし、辨舌流るゝが如くで、世故に通じ、且つ蓄財にかけては却々の手腕家であつた。そして裝飾家で、太い金鎖を下げ、幅廣の金指輪を嵌めて、華美な服裝をしてゐた。妻君は長崎の藝妓上りで、日光町には妾宅を構えてゐた。尤もこの妾宅は、足尾連中の評判であつて島川氏は所謂舟板塀に見越しの松を實際に探訪はしなかつたそうだ。

前身は工部省の技術官、今は足尾の技師として堂々たる風采の守田氏は、日光町の花柳界に持てたのであつた。島川氏は廣業畫伯と同齡の若さであり、守田氏は一廉の紳士であつたから、一緒に茶屋酒を飲むといふことはなかつた。足尾の連中の飲みに行つた料亭は井桁屋といふ家であつたが、この二人は玆の酒席で顏を合すことはなかつたのである。

「廣業餘芳」の記事によると、守田氏は廣業畫伯が便つて來たので、一先づ自宅に置いたが不便なので、自分の親戚に當る日光町の大野屋旅館の一室を借りて、こゝで畫を描かせた、今日では旅館も模樣替えをしたが、その室は保存してゐると書いてある。

話を本筋に進める。

日光町に三流どころの會津屋といふ

旅館がある。今日では他の一等旅館に押されて餘り振はないやうだが、これが古河家の定宿であつた。何しろチョン髷をいつまでも頭に載せてゐた程の古河市兵衛翁だけあつて、他に立派な旅館があつても、一旦定めた定宿を變へなかつた。この關係で足尾の連中は日光町に來ると、會津屋に泊つて、前記の井桁屋などに押しかけたものである。

この會津屋の女將が、青年畫家＝廣業畫伯＝に頗る同情を寄せた。その同情の發露として態々山へ遣つて來て、島川氏に何とか後援しろと言ふ膝詰め談判をした。ドラ猫の平田篤胤に惚れて女房になつた女もあるから、チンクシャの畫伯に會津屋の女將が好意を持つたのも無理がない。註に曰く、チンチシャとは廣業畫伯の顏が、狆が嚏をしたに似てゐると言ふので、後の話だが東京美術學校の生徒間にこのニックネームが流行した。誰が作つたものか知らないが、このチンクシャを宣傳して歩いた茶目の筆頭が松岡映丘氏であつた。これで見ても若い畫伯の顏は、狆のアクビ位はしてゐたに違ひない、會津屋の女將の熱心は島川氏を動かした。ところで當時山にゐた年少氣鋭の連中は公私の用件で山を飛び出して日光の町に來れば、大いに解放された氣分で實際身分不相應な遊興をしたもので、會津屋の女將には常に難題を持ちかけて隨分困らせたものだ。その女將が態々山へ來ての頼みである。聞いて見れば、青年畫家の話だ、これは變つてゐて面白い、何とかして遣らうと言ふので、早速島川氏は飲み友達に相談した。何を言ふにも金だからと言ふことで、同志十名を募つて、一人前參拾圓づゝ合計參百圓也を紙に包んで、島川氏が會津屋へ持つて行つて、女將の前にポーンと放り出した。女將は「お氣の毒さま」とも何とも言はずに、黑襦子の帶の間に挾んだが、双方薩張したものだ。尤も此方は半分は義俠的で半分は平素の罪亡ぼしの意味であつて、畫なんど貰ふ了量は毫頭無かつた。それで三百圓も忘れた時分の或日のこと女將がまた山へ遣つて來た。お金は確かに畫かきサンに渡しました。その御禮心に畫かきサンが畫を呉れましたと言つて一人に一枚の割で十枚出した。そこで一同寄つて抽籤にして分配ると、島川氏に當つたのが「美人夕涼の圖」の頗る艶麗なる一幅であつた。本文卷頭に掲載された寫眞版が即ちそれである。

島川氏はその時の事を回想して、その金は全く氣前を見せた三百圓で、放り出した時は隨分好い氣持ちであつた

今日のやうに畫會に入會といふやうなものでもなく、また他に何等契約的の意味もなかつた、今日の時勢から考えると、今日の青年の遣方とは頗る變つてゐて、氣心が總て面白かつた、と言はれたが、今日では恁ういふ意氣で金を放り出す人もなし、よしんば有るにしても、そう言ふ金に、賴まれもしない、力作を返禮するやうな作家もないイヤ無いとは言はぬが、鳥渡見られない美談で、これは廣業畫伯の美くしい心の一面を語るものである。

「廣業餘芳」にあるやうに、當時畫伯の描いたものは畫箋紙半折が二三十錢位のもので、五十錢とは行かなかつたものを町の有志が足を摺古木にして持ち歩いたことや、一時は畫伯が宿屋の帳付けをしたといふやうなことは三百圓が入らなかつた以前の僅かな間のことであらう。

「廣業餘芳」によると穗庵氏の塾を飛び出して、日光への逐電は盛夏らしく三百圓の御禮の畫の出來たのは八月であるから、一寸一ケ月程の苦しさであつた。それにしても派手者で、見榮坊の守田氏がゐたから、成程守田氏は蓄財家で、この若い畫家のために金錢は出さなかつたかも知らないが、自宅に置いたり、大野屋旅館の一室を借りたりして相當好意を盡してゐたし、その間には會津屋の女將の同情もあつて會津屋にも泊つてゐたから生活が明日にも困るやうなことはなかつたであらう。そして三百圓の入金以後は、熱心な研究家だけに、畫道の修業をしたことゝ想像が出來る。

會津屋女將が島川氏に話したところでは、畫伯は酒の飲み口の綺麗な謹直な青年畫家だつたと言つてゐるから、この時分は一宵の遊興をして多額の金を散ずることはなかつたらしい。また會津屋女將としても、三百圓を受取つて二百圓着服するやうな女でなかつた。若し左樣言ふ女であつたら、山の連中が最屓にして意氣投合する筈がないのである。そして三百圓を使ひ果さないうちに——當時の三百圓は、酒を飲んでも青年畫家の生活として少なくも一年や一年半は保てるから世間で言ふ程困らなくて濟んだので、その翌年には上京して菅原白龍や平福穗庵の斡旋で東陽堂に入つて執筆することゝなつたといふから、畫伯の日光時代は、世間で想像してゐるやうな徹頭徹尾窮迫を續けてゐたものではない。

この三百圓の御禮心の彩色畫は十枚であつたが、それは確實に日光時代の作品として傳ふべきものである。併し現在ではその同志十名も散らばつて仕

舞ひ、畫は勿論のこと　所有者の存否さへ判らない有樣である。只、今日でも島川氏と往復してゐる十人組の一人である安生慶三郎氏が伊豆に幽棲してゐるが、この時の一幅を大切に保存してゐる。島川氏が「どうです、賣りませんか」と水を向けると「どうして〳〵寶物だから減多には賣られぬ」と言つて、二人共、現代畫家の作品に對する評價をもて比較研究をする時は一萬圓だと信じて、それ以下の價格は廣業畫伯の藝術を冒瀆するものだと言つてゐる。大層な鼻息である。

寶は島川氏は令孃を私の弟に呉れたのであるが、この畫幅を私に呉れることはしない。私に見せびらかすために態々大阪から持つて來て、私の書齋に懸けたのである。

書箋紙半折二十錢なのに引換へて、島川氏十人の三百圓は、豪勢なものですねと言へば、實際血の氣が多かつたので、併しあの時代は愉快であつた――と、島川氏は禿頭をツルリと撫でた。

茲で「美人夕涼の圖」に就て聊か所感を述べる。

此圖は竪三尺六寸四分、横一尺〇八分の絹本着色畫である。圖樣は堀切の菖蒲園の夕景とでも云ふやうな場所で水際の菖蒲の葉先きに螢が一疋止つてゐる、そこへ一人の藝妓が來懸つて不斗螢に目をとめたと云つたやうな趣である。夕景らしくもないが、螢の尻に金泥で圓光を暈してゐるから、夕景であらう。

藝妓の顏は、後年の畫伯が描くやうな顆が尖つたケンのある顏形でなく島田に結つた丸ぽちや式で、相當に愛嬌を見せてゐる。右手を上げて指さきで輕く簪を摘み、左手は褄を取つて、左足を一足踏み出して、螢の方に振り向いてゐる。足駄を履いてゐるから、正に雨後である。

着物は當時流行の透矢の夏衣である墨がきで可なり苦心の技巧を見せたものので、線描きがなく、筆あたりをつけて、ぼかし隈を取つたものである。透矢の墨色に長襦袢の紅を映して、少しく肉體を透かせたところから、乳の膨らみを見せたあたりは能く行届　たものので、と言つて少しの卑猥もなく、一見古畫を見るやうな嚴肅さがある。

着物の袖と裾に胡粉で、すゝきを描いて、胸の櫻の紋所が同じ胡粉の線がき模樣。帶は紗の白地へ墨繪の鯉が、金泥を加筆して、琥珀の帶留は、金具が金の菊花。

着物のぼかしの調子と帶や長襦袢の線描は、師匠の小室秀俊の筆法が見え

る　菖蒲の沒骨風は平福穗庵の筆意である。

落款には「明治戊子中秋、日光山客中、廣業寫」の十四字があつて、印が二個捺してある。明治戊子は明治二十一年で、畫伯廿三歳の時である、日光山客中と書いてあるから、これを見ても畫伯の日光時代と言ふ言葉は極めて適切である。

二個の印章は、上の印は「寺崎廣業」の四字が白文で、下の印は「秋水共長天一色」の七字が朱文で刻されてゐる。師匠の小室秀俊も篆刻を美くしたが、刀法が違ふから秀俊の刻ではないらしい。下の印の句は王勃の勝王閣の序文にある句で「落霞與孤鶩齊飛」と對句をなしてゐるもの、勝王閣の主人閻伯嵒が天下の名句と激賞した有名な句である。若い畫伯が恁ういふ印を用ゐてゐたことは、秀俊の感化でもあらうが先天的に南畫趣味のあつたことを證明するもので、晩年に南畫境地に進まれたのは、この天性の自然の歸着である。

序だから書くが、畫伯の印章に對する趣味は非常なものであつた。畫伯が東京美術學校に教鞭を執られた時代は教授でも助教授連でも印章の智識は無かつた。尤も荒木寛畝翁は別である。その中で畫伯は獨り八釜敷かつたので濱村藏六氏に依頼して、その篆刻を賞翫した。だから、畫伯の愛印に駄印は一個もない、曾て時計の鎖に翡翠の小形の印をぶら下げたのを川端玉章翁が見て「エライものを付けたな」と言ふと「印材は兎も角、篆文を見て呉れ」と冷然として答えたが、それ程篆文に注意された。これも南畫趣味で、その智識は小室秀俊から啓發されたものゝやうだ。

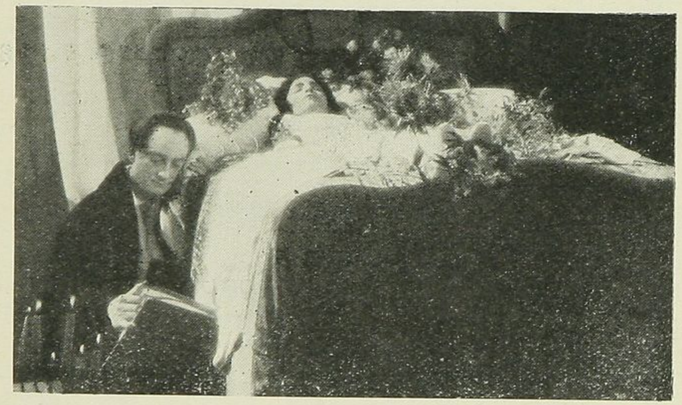
却説、これから筆を改めて、寺崎廣業先生として書くべきことがあるが、それは三百圓とその畫幅には直接の關係がないから、他日の發表として、一先づ筆を擱く。

新刊紹介

良寛と子守

坪内逍遙博士著

坪内逍遙博士が久しぶりに創作せられた舞踊劇「良寛と子守」は六月の帝劇に上演されたが、同年中の收獲として劇壇及文壇を賑はしてゐる。良寛上人を藝術的に人間的にこの位眞摯に取扱つた脚本は恐らく他に比を見ないだらう。これに演劇博物館その他の記事を附し、安田靫彦畫伯の裝幀によつて出來上つたのが本書である。坪内博士の創作に靫彦畫伯の裝幀それ丈けでも如何に立派な内容外觀かは偲ばれるが、手に取つて想像以上なのに吃驚した。（定價金一圓五十錢早稲田大學出版部の發行）



佛ジャン・エプスタン映畫

アッシャー家の末裔

全五卷

「蒙古の獅子」の監督者ジャン・エプスタン氏の新しき作品。エドガー・アラン・ポーの三つの短篇「アッシャー家の沒落」「隨圓形の肖像」「リジィア」の三篇によりモーチフを得て、エプスタン自ら脚色、且つ監督製作したもの。
撮影者は、ルーカス氏。
舞臺裝置は、ピエール・ケッフェル氏。

ロデリック・アッシャー……ジャン・ドビュクール氏
その妻マドレーン……マルグリート・アベル・ガンス夫人
訪問者……シャルル・ラミー氏

梗概——不氣味な燐光と、妖氣のような霧と、じめ〳〵とした人氣の絶へた沼……アッシャーの館はその中に一つ取り殘されたやうに立つてゐた。その荒廢した邸の奥深く主人ロデリックは、妻マデリンとひそやかに世間から絶縁した朝々を送つてゐる。主人のロデリックの只一つの仕事は、妻をモデルとして畫筆をとることだつた。が、斯うしてアッシャー家代々の習慣に從つて描れた彼の妻の肖像が、生の姿を得れば得る程、その描れる人物は益々衰弱してゆくばかりだつた。或る日——それは、秋の夕暮。ロデリックを訪れて友人がこの館に來た。久方ぶりで此の館に笑聲が聞へたが、それも束の間ロデリックが再びさつた畫筆に肖像が愈々生の輝きを增して來た時、妻マデリンの命は絶へた。そして、マデリンの亡骸は遠く野を越へて葬られて行くのだつた。が、ロデリックには如何にしても妻の死が信じられなかつた。

或る嵐の夜——風のむせびと、稻妻の閃く中に、突如棺桶は壞れて蓋はひゞきを立てゝ地上に落ちた時、マデリンは白い薄衣につゝまれて甦つた。——この時、落雷はすさまじい響で落ちて來る。

既明　德川夢聲　伴奏曲目選定　飯田信夫

あるの後ろを西洋の漢文の版があつて、實
延四年の頃に係る。史記若狹小坂問ふよ
くあるまれが、これは全くの別本で自分の從前
寫眞しきの所ひあるが、若狹と名の數似の為
め混じてゐるらしい

七月六日記

○昨日武藏野館で「ゼロ映畫」の内おもしろく感じ
たものを若干ぬめてあるが、此の映畫へさきき帝
劇で二回の入場料とをつて見せたものであ
る。自分のアランポーが味はれる。おかし公衆
まハメまるで有るとて有るらう

七月六日記

○今日又仿写数葉中一若干の図書を雇
ひて終すべきもの二三あり、　七月六日記

蒙史　宮本　一冊

元亀井昭陽が努力の作の日本
史なり頼山陽が亀井に今もし
時此者を冷かしたりとて著名の
ものなれども宮本の流布あり
稿のまゝなることの也　ん雄こゝに一冊
の書を得たるの亦北書の一種を
見るを得べし
神代より開化天皇に至る

漢学源流　宮本　一冊

菊池三渓が源氏物語の内容
木、宣蝶と梅暦の物語を漢
詩しるしたるもの也　侯田学海石洲
随園等の評あり、田松ちにたる
宮もこんまで流布もせざるもの也

敬宇雑文稿　一冊

敬宇翁の序跋雑稿を集
めて一冊とせるもの也　重野明
田信夫さの評あり、余已未見
人に君家の著稿を集めし

九も其部数に入るべし

献品目録　一冊

是れ京都宮崎柳枝の原書にして、百数十枚、謝状を書するの割印を捺したるに、此帳簿に印度と存すれば、斯の如き官簿に何の名と世に出づるか、疑ふべし

二歌仙　一帳

行成卿の書を模するものなるべし、冷泉為泰の例の悪筆もて各紙

三画にして画を地紙とし淡彩を施したり、画ものを極めて初刻本にして少なく画を味ふことを得べし、こん初版にして画も辯やかなり

六種図考　三冊

茅原定紛著す所官本に補ひて流布す、六種とは

第一　輿地

第二　平安都城図　平安宮城図

官廳　宮つかへ

第三　飲饌
第四　錢幣　度量
第五　璽章
第六　碑誌　附　古瓦

北書余の所有にして獲る所、好古家也

○数の尚しき家乗の図書目録一冊成る、数を分つ十、一に曰く自著本二に曰く字書三に曰く訓詁四に曰く金石五に曰く別置図書六に曰く書簡七に曰く複本なり今ハ云く和装版本ハ云く洋装版本ハ云く

榛原製

洋装本北合数冊式のものハ便宜に従ひて、別置図書の形の区々なるものとして特別の元扱をなすもの也、数く未だ一千百部に過ず、数餘既る所寡なし、此の目録に除外とせるもの家書、自抄本、書画用の三類とす、北の三類ハ骨董、雅玩と共に別に目録あり、七月八日記

○京都の谷村一太郎氏より後伝次大阪の某氏家のものを云ふて、花瓶貴主平一冊三る者用弱を得たりとも、尚ほ二冊の貴主を三都に為すの計画なり、全部まて二千番用の價格あると

倍の、然るに負債は四千弗の六千弗に
なり、整理頗る困難、ようやく弗の家計を
始めして月計三弗四十と云ふ、従来
八月計十弗四十といふ、中に負債利子七円
含しなるべきも、豪奢勿論くべし。
○各国のペーパーカッターをもとく英国もちんと
心がけ既に二十数を得たれど、等行つまり、
りう僅かに英国製のブラス細工の箱の傍と
共の長定を刻したるもの一個を得たるのみ、
偶々切人らも一個を宮のセ来るも未だ
塗料を施したるものなく、ハワイ低の観あ
りしん未だ見ずコレリシヨンス無きもの

表紙裏

表人に書く、生年四十湯浅吉郎ハワイ
イらと菓子屋を求め来りて宮のセらる。
木地塗りなすべて此のペーパーカッターと同じ

七月八日記

江戸史蹟

白木觀音由來

附、白木名水物語　由緒古さ白木名物

◇

白木屋の創業は今を去る二百六十餘年前、即ち寛文二年の昔でありまして、爾後元祿、寶永を經て五十年、その頃になつても江戸の中心地たる日本橋附近には飲料に適した井戸水が無く附近住民の不便は言語に絶しました。白木屋祖先は見るに忍びず、多額の費用を投じて井戸掘の工事に取りかゝりました。正德元年から翌二年に亘る難工事で容易に目的を達しませんでしたが遇々土中深く埋もれた金佛を發掘しました。淺草の觀音と略同一體であつたばかりか洵に奇瑞と云ふべきは、鱣て滾々たる良水を湧出するに至つたのであります。人々の驚喜は云ふ迄もなく、之こそ觀音の御利益と、そこで店内に祠堂を造營し、毎年七月の四萬六千日に開帳の例を爲し、淺草詣での人々は必ず此處に立ち寄るの習慣となり、連綿今日に及ぶ事皆樣御承知の通であります。

斯く白木觀音と名水との話が巷間に傳へられ、江戸史蹟の一ツとして謳れる樣になつたに就き、二三著名の傳說を挿話として申述べませう。

◇

(一)正德年中、朝鮮使節來朝に方り白木屋を休憩所としましたに就き、使節は名水の謂はれを聞いて感嘆措かず、隨行の儒者に靈泉記の文を作らせた事。

(二)福井の城主、松平越前公が重病に罹られ如何なる療法も效を爲さなかつた處、此の名水を服して忽ち平癒したので、諸大名皆之に倣つて御膳水或は點茶用として召された事。

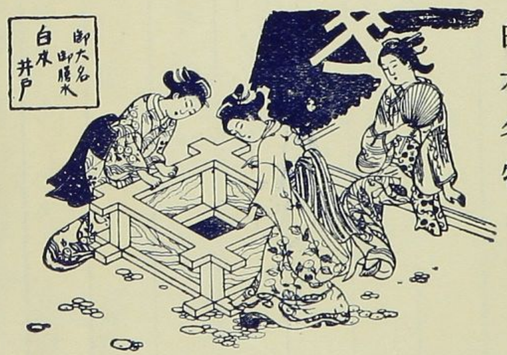
(三)爾後松平家では明治御維新に至る迄、御奥の御膳水として毎朝正四ツ時(午前十時)に汲み取るを例とした事等は其の一部を傳へるものであります。

◇

大正十二年九月一日の大震火災に方り、白木屋店舗並に商品は不幸烏有に歸しましたが、白木觀音のみは危く難を逃れて尊體には何等の異狀もありません。淺草觀音が同樣奇瑞を現はした事より思ひ廻しますれば、愈々同一體たるの感を深くされるのであります。

◇

尙觀音名水にお馴染の方は、同時に江戸時代から大方に賞用されて居る、「白木名物」をも御存じ置き願ひたいものです。之等も創業以來相變ず白木屋の店頭を飾つて居ります。



一、奇應丸（白木屋特製小兒救急藥）刈能書にある通り日本橋傳來の祕藥に數所の貴重藥を配合したもの。二階藥品賣場に販賣して居ります。

二、算盤玉三尺（白木三尺）四階木綿賣場に販賣して居ります。江戸趣味の存するもので俗に一本染とも云はれ、白木屋特製品であります。

三、白木墨　二階文房具賣場にあります。銘に「商ひは高利を取らず正直に良き物賣れば末は繁昌」と先祖傳來の店是を示して居ります。

四、山道手拭　半染手拭　四階木綿賣場にあります何れも本藍染で永い間使用しても褪色するやうな事のないのが誇りで、伊達向のものです。

—昭和四年七月印行—

東京日本橋

白木屋

散りゆく「卅六人集」

武藏女子大學建設の資に……

大谷家の寶庫を出づ

【京都發】西本願寺大谷家の家寶として識者の間に稀代の珍寶と推稱されてゐる古筆三十六人集のうち藤原公任卿の筆と傳へられる伊勢集及ひ紀貫之集の二卷が今度愈々賣却されるといふのでその道の人々の間に大きなセンセーションを起してゐる、事の次第はかねて大谷尊由師が故澤柳政太郎博士、高楠順次郎博士と相諮つて東京市外武藏野村境に創設しようとしてゐる武藏野女子大學建設基金に當てるため西本願寺の入札の際にもこの三十六人集は一括めでなければ賣らぬといふ程散逸を恐れられてゐるもので少なくとも三百萬圓の價値はあり今度賣却される二卷だけでも六十余萬圓には上るものといはれてゐる

非難を押して

手放す「伊勢」と「貫之」

ゆかしき心の大谷尊由師

右につき尊由師は語る

家寶を賣るといふので一部では非難があるやうですが「卅六人集」といふのは元來缺本があつて同大學の財源は最初西本願寺から提出した十萬圓の寄付金外一切寄付金にまつ計畫であつたが世間不景氣の折柄寄付の集まり惡く斷然かく由緒深き寶物を賣物に出す事が決意された譯である先年

この三十六人集は一括めでなければ賣らぬといふ程散逸を恐れられてゐるもので少なくとも三百萬圓の價値はあり今度賣却される二卷だけでも六十余萬圓には上るものといはれてゐる

てまとまつてをらず且つそれが社會的に意義ある人に用ひられるものならば何も底深く藏まつて置く必要もなく一方から考へれば一所に

押込めて置くより寧ろ方々に置く方が天災地變等から考へても保存上上策と考へて手放すことにした次第で武藏野女子大學創設を思ひ立つたのは隨分前のことで大體日本には女子高等師範の外堅實な婦人を養成する設備がなく僅かにキリスト敎系統の大學が二、三あるだけなので一つ佛敎式による內容の完備した女子大學を設けようといふことになり既に當局へも申請してある次第です

勿論七ヶ年（豫科三年本科四年）の豫定で文科、理科の兩科を置くことになります卅六人集の內伊勢、貫之の二卷を賣ることについては佐々木信綱博士、澁東京帝大文學部長、益田孝男爵等の斡旋によつたものでまだ價格等はきまつてゐませぬ

横原制

○長年を経して国宝を過ち用いる、物おのずから見出せるものを尺るる真つこ浮世の盛衰移る感無量なるものあり、亀谷者軒の編輯に係る高法院六冊のこと（此の次六年の刊行に係り高名と関する法親王を輯めたるもの也、有軒と此著あるも孫也）此の次七年者行の○体操者二冊の文部省の出版に係り西洋一の者を及ぼしたるものなり体操初めて日本に重きを加へ此者あるまでは、恐らくは先生の体操書の新も古へるべきものなるべし此の次初年

既義と云ふことは路々考へる説義に関する出版者のものゝ家義なる二三あるべし今得
ばらくこれを文の大海新説無説義あり
又説義者さんちさんも其宗のタノム考、タス
ケタマヘ考二冊八の法井丑年の出版に係る
原口針水著島地黙雷の校閲なる金の初
めて見る所のこの也の法の陳本一時瀧紙と
云ふ多く棄てられたる今は一枝の底無きを徒々珠
書を以つて扱ふる時期の到来したるべし
此の上公の某氏に多く古貨幣を購ひ
中に支那の馬蹄銭あり、大なるものは
金六品有奇上の逼くを得べし

ひらぐ

二個購ひ入る、赤瑞西のインク、スタンドを購ふ、コッテ
ルしゞ式木の細工なる屋を
別に墨壺出づ、家義の日本のエッテ
しゞ二銭なれども、墨壺に適用し
この未だ無し、机上に置きものの
味を充す。

七月十三日記

の書を買ふ人の為め揮毫半日を費す
数寄成る、珠と拙を学ぶ、余の最も感ずる
人の為めに寿筆を需めらるる者多し、従て
祝賀の字を駢列する、陋墨、金の筆を
多く老人を歳するの時を選ぶ上野黙翁の

為めに書すること能はず、文部人の語也云く
十年休矣、元年歟、及利光時慈一般、只
恰不利歟、時光、光年何暇、咲カ年
二味某の壽辭に云く
吾こそ一身、亦有カ不同、壯不同、老、子之
身後焉有子能育父、孫能育祖、幽
期矣、盡孝、所の妻、惟苗好樣
無子孫而已
山陽書の間の跋を作るあり、乃ち山陽
東坡傳を書して、福して山陽を評すべし
と附記して無かれ、東坡の後に云く
長笛地笑、想蜀痕、咳唾滿地

拾人拾

この語山陽自家の未来を云ふが如し。
前月新潟に游びし日、数枚余に扇子に字を
乞ふ、余醉ひて席上書する能はず、翌朝
て家に帰り、吟ず、剩墨を用へて立ところ数
幾の扇子に題す、墨華、実の授書の為めに
題する語を工風する一難也、唯此奥に乗
まんば、自ら自語を拾出す、吟ず、題するもの
の二三を録す

○宮疎眉語度仙輕眼笑来
○花田命薄倫帝雨、柳為情多印之夜

○凡人は成十分好、不如真色一分好

○美人自古如名將、不許人間見白頭

人とおこゝろふ後を思ふの雅し、余旅中往々短冊画帖などの書を乞いれば二年思構の間地なき時、左の語を掛して責を塞くことあり

此時此景境此情、

七月十三日記

○真夏の暑熱かなり強く、朝の涼しさ何かはなるものゝ如しと雖も、秋を待つ時と雖

とも涼しく得る也

○夏は別て飲料の種類が殖えて来たので、身体へつけるものと云へば麻の上衣を脱して裸体となるに、和装でも洋装でも麻のみ止めもさせず、別て白色のが好み、黒色は氣の毒ハ氷也を喰しながらセる、ポーラー、ケーク、ヤエスキーモ、パイ、ラムいよ氷菓子が傷を制する。其形状ガラスが大半を据め透明で氷に似たるを所謂慶物の花瓶、合羽びん、ガラスの器物等の種々のガラス器が輸入せられて来て、酒を盛る杯、酒の種類に依り、杯の形式も異なるが、各種の杯を合器柄

陳列して尤も珍味を受くるは真夏にあるべし、
へこたれ、グラスに清涼の色を帶びたる
もあるが、大抵は切り子の品の如く、
のやうなれども、鐘の音のするやうなるが、酒
器とも云へば、ビールや葡萄酒の瓶の如く、実用
本位のものなれども、同じ沈黙にて、西
洋にも酒器に数味の風のあることは
我邦の酒客が德利を慈あるを以て酒
の種類に依り其の形に種々の工風があり、
大抵皆底の広く下窄まりなる陳列されたるを見
ると、実に涼しきものがある、夫婦の人のあとの
飲用を花するものに意匠があるかと思
はれる、さんから近来化粧品屋にも仲間に成りの
碧海の香水が多く輸入されて其の容器
婦人を惑はせる一種美麗の意匠があり
燃殘の目を眩するものがある、勿論ガラスの物が
十の九までを占め、ガラスの他に陶器もまた
夏の商品でい香水が尤も好婦人の心を惹
きつけるが、その容器が先づ婦人を魅惑
を眩惑する、兎角真夏にガラスの世界である
る、敢て今日から始まる比譬ではなく、ビードロ
ロと名つけた時代から、ビードロの鉢に金魚
を浮かべたりしたガラスの器に氷を盛つたり、ビ
ードロ製の風鈴や天揚の器などが素

なれば時代があの頃志かしビードロの時代の事なれども
粗笨で品柄の種類も単純であつたが今の宮
玉機のレンズも始めの各種の鏡もまだ外国の物
等でありけんが其こは如何様にせよ高家のレヨ
ウ、ウエンドウは大形二枚のガラスを張合せ間に
和かなうしてまるうつる。夏時は陶磁の器か一
般に其内の盤は色物のものを用ひん
と涼味を覚ふことが疑つたとしても多いが矢張り透
明のガラス器が幅を利かせたのである。西洋花卉が
美を競ひんるやうまでなつてから、銅や陶の花入
では調和もしないのであつて、ガラスの花器が行ん生
じたのも無理はないが、價も廉ひ民衆の味は投

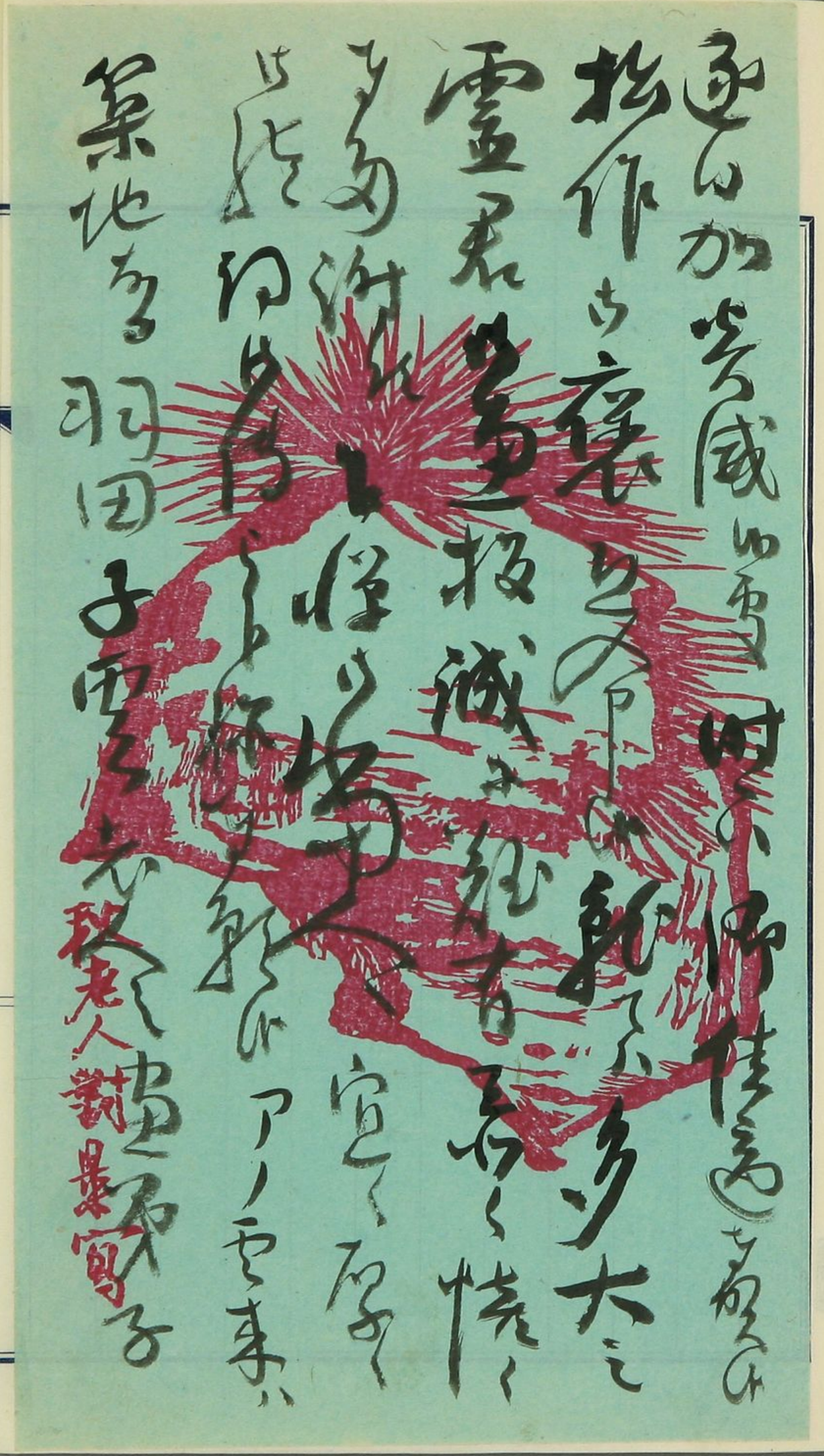
まるかうでもある。がうス研究も一種面白味のあ
ることだが、夏時は特にその味を見へる。
前年満洲を旅のし比路を奉天ひビードロを
吹く工場があつて一見した。炎天の熱火を近つ
いての労働であるのだ。工人は全裸体で巧みな
種々のものを吹くのを見て一面を過ぐ比ら
とを思ひ出すが、あの[illegible]の[illegible]思ひ出の中に共
の心器の清涼の味が出るのは[illegible]
[illegible]何でも後ろ面のつも実際を見ねば
理解が出来難い。

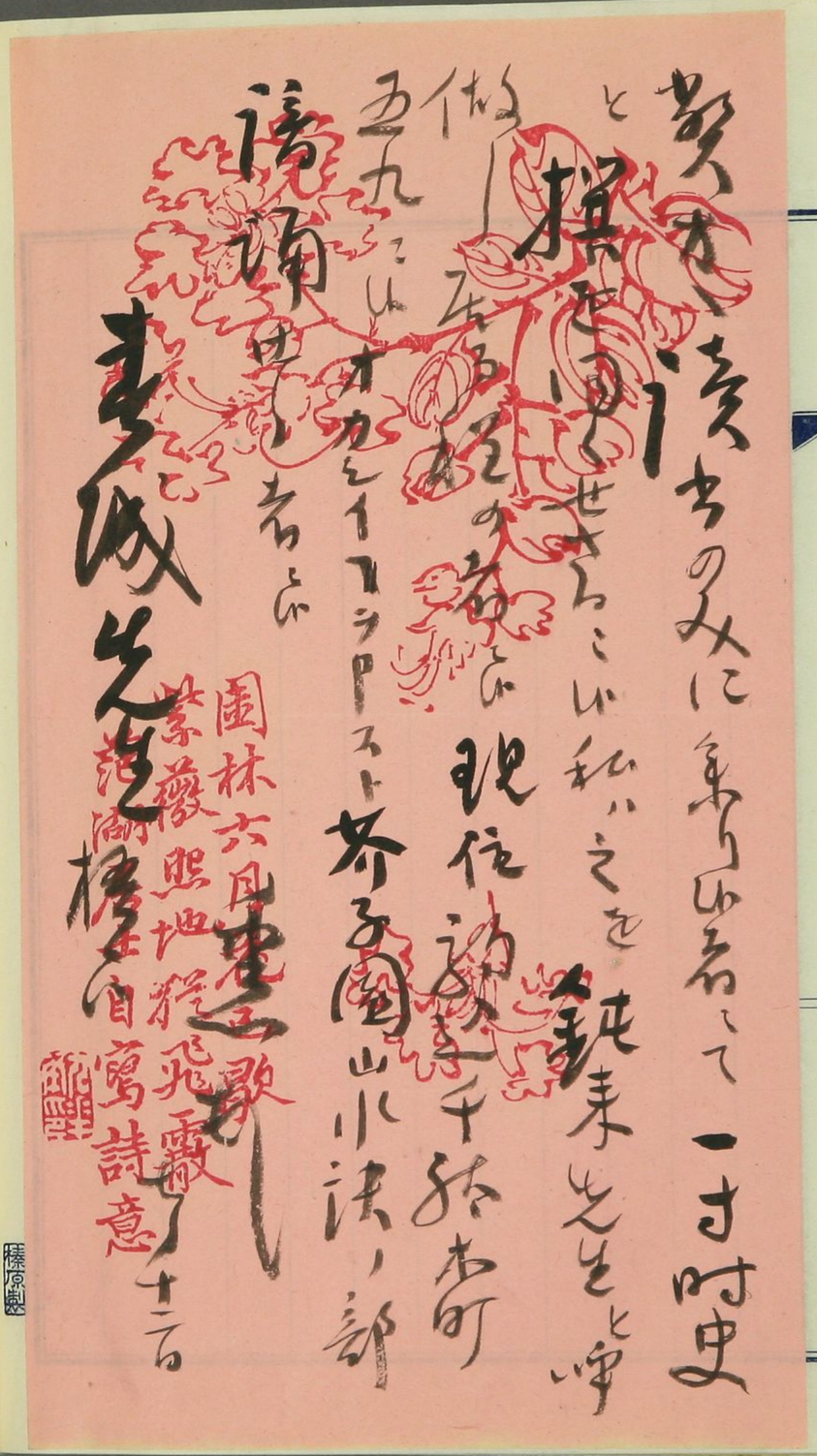
七月十八日記

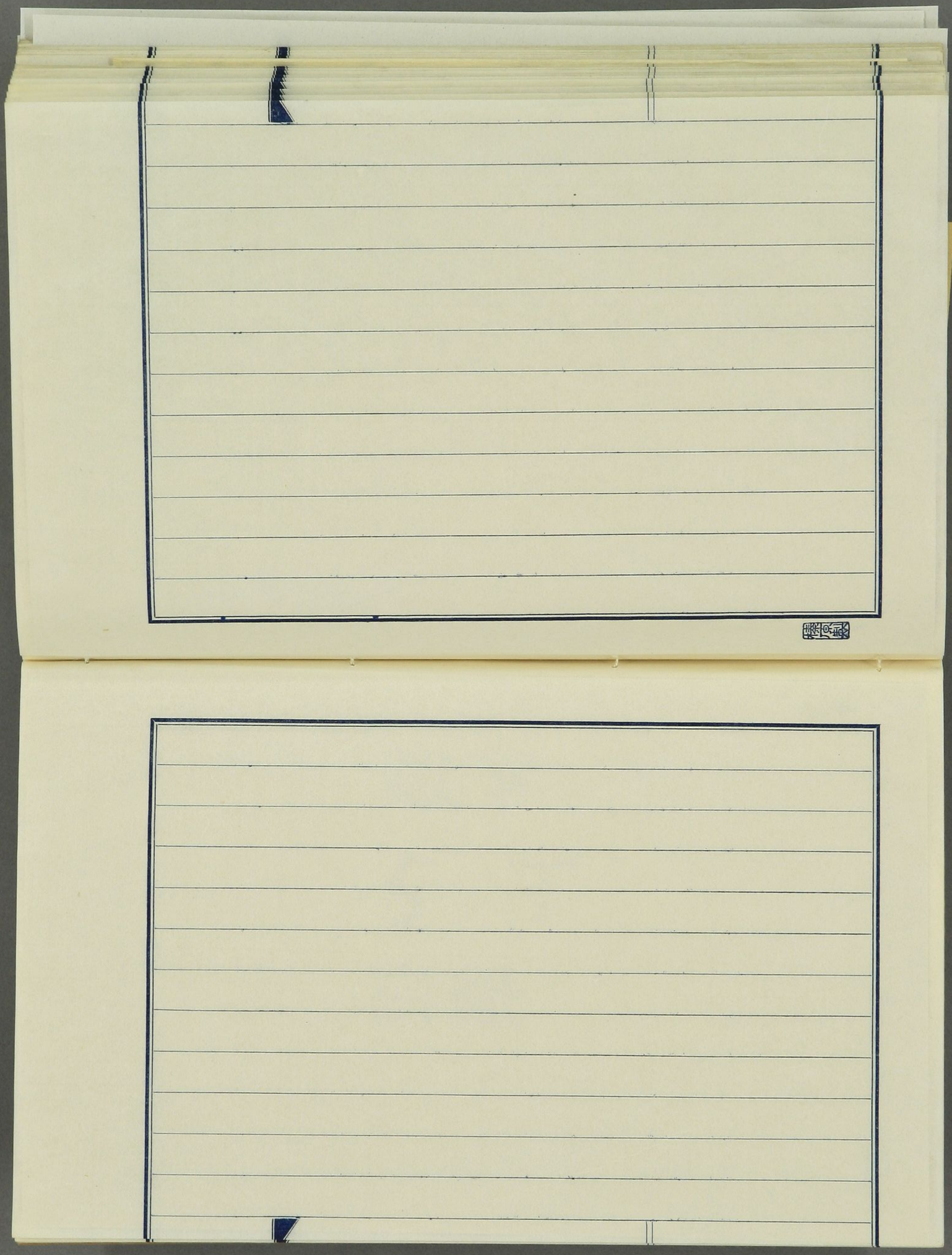
○此頃京都の[illegible]神楽に巻れる別来の新
候物の中で自慢の山水のお、鈴木雲来とい

人の掛上の乱雲の図もとが一枚あつた。画いお
もしろく出来てゐるが、業、書ハ[illegible]
人であるから間合ハもとより、左のめきるる
が来た。明日子雲の画弟子ひあるので雲
の一字が出てゐること顔つかれた、書坂
もの雲を似た雲がある。巻頭が出人を様
して時史と異なる所があると云へ信じから
別なる変りものを見くるる。[illegible]
ことも知れた、

七月十八日記




園林六風
榮徽照地彩飛霞
十二百
詩意



以下
7丁
白紙

苦心慘澹……文藝者の金策

春城翁談の斷片

柏崎の早大校友會で

○極めて豐富な、文藝談の所有者として知られてゐる早大の市島春城翁は、十四日柏崎に開かれた早稻田大學縣下校友大會の席上において、文藝と金融と題して、興味滿々の面白い談話をされた。文藝と金融といつてもそれは、文藝者の苦心慘澹たる金策談であつたのだ。

○文藝者の世界は、月とか、花とかが、詩の對象にも擇ばれまた、それが生命となつてゐる事が少くない。それを封じて金策をする、それは珍しからぬ事だ。村上に詩人長尾秋水といふのがあつた。詩人としての秋水はたいしたものではなく、かれの詩のすべてが朗吟、讃美されたといふわけではなかつたが、海城、寒柝、月生潮、あの詩が評判となつて秋水も、詩人としての名譽を大に揚げたものである。それを知つた仙臺の鍋北探檢家金忠輔、これは秋水に話して文藝と金融といふのを試みる、のが名策だとあつて秋水に掛け合つてみた。

オイ長尾、おぬしのあの海城、寒柝の詩、あれを當分僕に譲らぬか。終生とはいはぬ一時でいゝその報償として僕は、君に金五圓を提供する。

その代り約束が成立した以上、あの詩は僕の物であつて、僕は到處それを自分の詩として宣傳し廻る、その間は君は決してあの詩を自分の物としての吹聽は許さぬぞ。

金のこの掛け合ひを秋水も、文藝と金融の必要から、よし〳〵と諾して爾來或期間、海城、寒柝の詩は金の物となつてゐた。

○文化、文政、江戸文學の高潮期においても三馬、種彦、京傳、あゝいつたやうな戯作者の書いたものので、金になつたものは少かつた、すなはち原稿料、をうけ取り得たのは京傳位にしか過ぎなかつた。そしてそれも甚だ貧弱なものであつたのだ。

○文藝者、文人墨客といつたやうなものゝ第一の金融策は、書畫會を開く事と、漫遊に出掛ける事だ。文藝者の書畫會は友人や、知己の俳人、書家、彩管で生活してゐるものゝすべてに頼み廻つて、來てもらひ、席畫か、さうでなければ宅から書いて持つて來た扇子かなんかを土産、にして金を集めたものだ。この方では馬琴がレコードを作り、あの頃の金で二百兩を手にした事もあつた、といふがそれでもいろ〳〵費用が、かゝるので正味、馬琴の手に入つたのはそんなに澤山のものではなかつた。

山陽も方々へ出掛けて漫遊金策なるものをやつてゐる。山陽のゝはなか〳〵お手に入つたもので、先生は到處にステーションを設けて置き、そこへ行くまでに得たる金は、ステーションに擬せられてゐるその地の某、といふのに預け、利子も相當にとつて、利殖の途を講じてゐたものだ。

○それがこの頃では、圓本の流行から圓本洪水を見る事となり、貧乏文藝者から一朝にして圓本成金となつた、ものさへある位で、この頃の文藝者は悪まれてゐる。

なんでも圓本が賣り出された頃、某文藝者は、一生のうちに千兩といふ金を枕頭に積んで寢てみたいものだ、といひ出し、この事を或る書肆に相談すると、千兩ばかりなんでもない、まつと〳〵とれるといつて聞かせても文藝者、の方では大當、の事としてうけ取らず僕は只千兩さへあればいゝといふので、餘りの淡泊から巨利を書肆に占められた、といふ話もある。

○明治から大正、昭和へかけての老文豪、その名前は申さぬが、私財百萬圓からの蓄積者でありながら某新聞社から逐はれた、それに對する意地もあつて大阪の某大新聞社に身賣し、社賓として莫大もない物質手當をうけてゐる。こゝにも文藝と金融、を物語つてゐるものがあるが、これ等は禍ひが却て仕合せとなつた方で、震災から米のロックフェラーに救はれた帝大の圖書館、なども、その組である。

（稽古町人）

複原製

□遠中若し葬儀に逢はゞ其何人たるを問はず弔禮を

田中先生新著
大國聖日蓮上人
に對する諸名家の感想

その二十
市島春城氏

◇

世の中には日蓮傳といふものは幾通りも既に出て居る。併し乍らこの日蓮傳といふものゝ、茲に最も適當なる著者は何人であるかといへば、私は少しも躊躇することなく、田中先生であるといはなければならぬ。先生の日蓮研究といふものは、既に數十年を經て居るものであり、蟻の如く黙々研究した人は無からうし、またその研究の成績に對して深く信仰をもつて居られる人も、おそらく他には餘り無いであらうと思ふ。斯くの如き人が永い間の精魂を傾けて、この晩年に著されたといふとは、誠に當を得たものといはねばならぬ。

◇

然ゆるが如き信念を持ち、徹底的な研究を經て居られて、而も田中先生は頗る文藻に富んで居られる。その人に依つて出來たものであるから、どの行を讀んで見てもみな躍動して居る。さながら日蓮上人の風貌に接するが如く、またその人の聲咳に接するが如く、如何にも活きて居る。これは到底他の日蓮傳には見ることの出來ない特徴であつて、私は實にこれを近頃の名著といふを憚らぬ。

◇

從來出た日蓮傳といふものも、必ずしも史實を集めることに於て敢て遺算はないが、併し斯樣な性質の書物といふものは、唯材料ばかりを豐富に集めるといふことが能ではないのであつて、精神がなければならぬ。而も日蓮上人を活き意しにするといふ筆がなければならぬ。田中先生の著述は必ずしも浩瀚なものとはいへぬ、といふよりも寧ろ割合に紙數の少い、極く簡單たるものといふに過ぎぬ。併し乍ら實にこの活きたる傳といふことに於て、私はこれを名著に推すことを躊躇しない。

◇

恰度この書物を、堀内博士が自作を朗讀したといふその時に賣つた因縁に依つて、私は茲で再びそのの事を引合に出すのであるが、堀内博士は朗讀のために特に自作を撰んだ。何故かといふと、自分の作は自分がその精神を最もよく知つて居るから、これを充分發揮するについては、自作が最も適當であるといはれた。恰度そんな樣な譯で、日蓮上人を傳するといふことは、田中先生にとつては、さながら自分の事を自分が書くといふにも近いことであつて、永い間頭に充ち溢ちて居る複雜な事柄を全く日蓮その人が說くかの如くにその筆端に迸り出づるといふのは、恰度堀内博士が自作を朗讀するとの樣なものであつて、その作の成功して、世の中に賞讚を傳するといふことは、寧ろ當然のことであると思ふ。(談)＝終＝

複原製本

○赤化の種子を各校に播き、都市秘密運動に容易に移り得るやうな役者の一部分に中会はさんとするの企図を少くとも見んが大略左の如きことあり、完全なる赤化浪士が復讐隠微の中会や行動をなすと共に、隠微の中会や行動をなすと共に、極力、全く市道うのとが赤化浪士のエピソードとして後世に残るべきを期待さんと共にあるものと、左の如き文書を一読し、且つ感慨に堪へつ笑つた。

六月二十日

菊谷警部特別講演要記

秘

左記は本月八日より十日に至る四日間帝國教育會主催全國教育大會高等教育部會に於て其第一号議案『高等諸學校（大學、高等學校、專門學校）に於ける訓育を徹底せしむる方法』の問題に関し右参考資料として現今學生運動の一端を覗知する為に特に警視廳特別高等課警部菊谷主任の出席を求め約三十分に亘る同氏の説述の概要を記録せるものなり

今日大学專門学校以上の学校に於ては殆ど例外なき程に所謂社會科学の研究團体なるものを有して居る、而して彼等の所謂社會科学なるものは要するにマルクス主義乃至レニン主義を指すものにして従つてその目的とする所は其實行運動を目標とするものに外ならぬ、彼等は悉く會員組織を以て行動するものなるが右會員は如何なる場合に於ても官憲又は学校當局に対

して互に會の秘密及大事は決して漏らすべからざることを誓約する、
會員は殆ど悉く偽名を用ゐるを恒とし、中には一人にして多數の
別名を使用するものもあり、而も此等偽名は彼等の同志間に於
てすら互に用ゐらるゝが故に會員中全く他の本名を知らざる者
あり、彼等は先づ班組織を以てその活動の基本とし、班は通常
一学級を標準として組織され、その指導者をチューターと称し、代
表者を幹事と呼ぶ、各班の幹事は別に幹事會を構成し之を
通称エー、カー（M、K、）と呼び、組織部、宣傳部、調査部、財務部、
書部、教育部等の各專門部を設置す、而して右幹事會は地
方部又は支部に於ける、代表者會にして通常その地方部又は支部
に對する指令機関なり
彼等は最大最高機関として、全國学生社會科学聯合會（學聯）
を組織し（全國学生自治擁護同盟）各地方部又は支部は各々
之にその代表者を選出す、而して學聯（F、S、）の幹事は殆ど悉

く共産党員にして彼等はソビエットロシヤの組織に準じてそれ〳〵
の組織及機関を有す
學聯は之を関東、東北、九州等の各聯盟に分ち、各地方を根據とし
て全國的に活動するものであるが今日の實狀はありては概ね帝國
大学学生がその牛耳をとる、
各學内に於ける此團体の活動方法は所謂合法的手段と称する
ものを以て進み所謂合理的に承認されたる各進歩的諸学會に
潜入し、各〻極めて少數なからそれ〳〵が中心となって盛に活動し
常に学生大衆の利害を代表するもの、如く見せかけて、苟くも学生
大衆に不平不満ありと認むる時は巧に之を宣傳し組織化し騒乱を目
的として當局に打つかる、彼等が常に一貫して働く二つの運動
は組織、宣傳機関の獲得又は防衛及犠牲者救援又は解放運動
（モップル運動）である、
彼等の無産者新聞に対する関係は特に注意を要するものにして即ち

無産者新聞は共産党に指導せられつゝ合法的に出版さるゝ無産者労働者への唯一の煽動機関であるがその筋の厳重なる取締及監視の為に労働、無産の各種組合又は個人への直接配布極めて困難なるを以て、学生の団体に巧に之を卸し然る後彼等の手より各組合又は個人に配布するものである

次に會員にして種々なる活動例へばデモンストレーション又はビラ貼等の任務を委ねらるゝ者は決して末輩に非ず此等の者は已に研究會等に入って相當に教育せられたるものを常とするのである、而して此等の者が捕った際に彼等はそれを何人より依頼若くは指圖されたかを言はず又依頼指図等をされたとしても多くの場合事實依頼者や指令者の本名を知らざることが多い、勿論此等の大指導は共産党の幹部より出てをるのである、彼等が此等の主義又は團体に加入する場合には先づ専らマルクス主義乃至レニン主義等の正當性を鼓吹され教育されるのであって彼等はやがてそれ等に共鳴し確信するに至るのである、そして彼等は此の研究運動の為には『骨肉をも之を犠牲にせよ』と叫んでをるから或者はその家庭より勘當又は追放を受くることを寧ろ誇とし又は便利とさい考へる程の熱烈と意気を持って居る、

彼等は絶えず騒乱を引き起すべき要素や手掛りを探索しつゝあるのであるが、一度騒乱の準備成るやその實行運動には多く共産党幹部や学聯の指令の下に外来者の應援を受けると云ふ戦術をとるのである、例へば甲大学の騒乱には甲大学の分子の外に乙丙等の大学の分子が極めて巧な組織と計畫、聯絡の下に活動するのである、彼等が常に偽名を用ゐることは前述の通りであるが彼等は最も重要なる諸會議又は秘密會議に於てすら互に偽名を用ふるのである、従って何時、何所の何會議に木村を議長に又太田を書記に選定して會議したと云ふ記録があっても右木村、太田等の名は全く假空的人物なることを直例として居る

彼等が一度捕へられた場合の申開きは「つい一寸友人某に誘はれた」とか「偶然参加する気になった」とかとぼけるのであるが事實は多くの場合極めて密接な関係にあるのである、尚彼等は官憲に捕へられ又は紀尚等を受けた同志に対しては大抵次の如き手段を用ひて之を禁制する、即ち「輝ける勇敢なる同志」として盛に之を煽動しその感受性を捉えるが「意気地なし、ダラ幹、階級的裏切者」等の悪聲、誹謗を以て之を嚇かし若き青年の名誉慾を巧に利用せんとするのであるから或程度の反省と更生を決意した者でも容易にその仲間より脱出することを得ずして益々深入りする様である

彼等の常套とする協議、聯絡の形式及方法は教室又はグラウンドの隅、カフェー、道路、公園等に於て特に人目を避けて集合協議し特に道路は最も重要なる彼等の聯絡場所にして殊に注意すべきは誰から誰に何が連絡されたかと云ふことを晦ますために、交通者は互に偽名を用ひまた用ひしめ且つ文書の場合には其仲介機関として、時としては余り事情に通じざる同窓生や同郷人を利用するのである

彼等の活動費は時に海外より移入される場合の外主としては會員各自の醵出金を以て充当する

最後に彼等の指導矯正方法としては柔く且つ人情的に特に個別的に訓戒し又は意見をなすを有効と認められる、何となれば彼等は一般に極めて反抗性強く且つ責名的（或は名誉慾旺盛）なるが故に彼等の同志にも知られざる如き方法をもてやさしく又個人的に接するを最良とせらる

（以上）

その頃のこと【一】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の昔話

薄田斬雲記

婿取りの晩

□□□□□□□□□□□□□□□ 穗積博士逃出しのこと

春宵一刻値千金。

その惜しまるゝ春の宵を、櫻がほころびかけた熱海の山の手、水口の高台に、清洒な双柿舎の座敷にすわつて、庭先きから、ヅッと白くぼかされた海の上遙の、初島の墨繪のやうな風景を見下ろした趣は萬金にも換へがたい。

市島春城翁が、先刻、自動車を下りて、双柿舎の表門を入らうといふところで、ちよつと立留まり、その茅屋根を仰いで

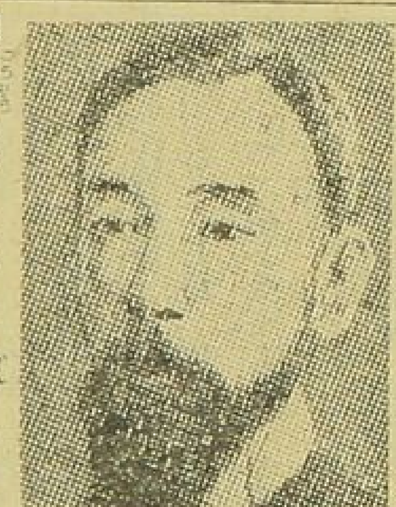
『大分さびが付いた！』といはれたのであるが、坪内逍遙先生がこの双柿舎に移られて早一昔、屋根に苔がついて南畫じみた庵室が出來上つてゐる。

この双柿舎に、今高田半峰、市島春城の二老親友が訪れて、春宵一刻の雅宴が開かれたのである。

一昨年の秋、私が執筆した「半峰昔ばなし」の結末に「坪内、市島の兩君は……隱居の身分となつてゐる事は、實に羨ましい。わざわざ山の中へ遁げ込んで、赤松子に從つて遊ぶにも及ばないが、どうか、私も早く氣樂の身分となつて、この二老友と熱海あたりで、ゆつくり一杯飲みたいと切にねがつてゐる次第である」と書かれてゐる。

この熱海でゆつくり一杯が、今度實現せられて今宵の會合となり、私もその席に連らなる光榮に浴した次第である。

熱海の驛前から狹い道路を、下り、上り、くねり、曲りして、やがて水口園下の溪流の橋を渡り右に進んで又上り坂にならうといふ處に逍遙先生は、飄然と立つてをられた。



清瘦鶴の如く、風骨仙なる逍遙先生は、待ち切れずに、ここまでお迎へに參られたのである。この御厚情は、私にひしと感じられたので、兩御老友にも嬉しさうな顔付であつた。その刹那の、樂しげな逍遙先生の温顔は、私にかつて覺えないものであつた。私は何んの心置きもなく明るい氣分になつたのである。

この日の双柿舎は、座敷の障子を取外づして、縁側の硝子障子越しに、熱海の町の南側半分を一目に見下ろされてゐた。これは坪内先生が逸早く氣付かれての趣向であつたらしく、私共は居ながらにして二本の柿の老木の細かい枝の間を透かして、熱海南半の谷間の光景を一眸に收める事が出來るのである。

庭の櫻は一分咲き

といふ色合で、木蓮は、大きい白い花を明るく一杯に咲き誇つてゐる。直ぐ縁前きに、レモンが一ツ生つて白味かゝつた鮮かな香實を見せてゐる。一昨年の正月には、このレモンが澤山生つてゐたのをもぎ取つて、その生な汁をしぼつて皿の肉に滴らして御馳走に預かつた事を思ひ出した。

『今日は時間も早いし、緩くり話さう』と主人役の坪内翁は、無造作に、氣心の置けない應對ぶりで

『高田君は熱海は一番古い、僕よりも一年前に露木に來てゐた筈だ。』

『然うかな、私が最初來たのはあれは明治十一年であつたと思ふ。五十年前だからね、本當に今昔の感だね。』と半峰翁は受ける。

○此頃在京会談話会などに嘱を経まして談片を書き集めるのや雑誌に載せることが流行して居る。或は甚を設けても或る特殊の人を集め在談を載くすのもあるし、既にして読手をやるのもある。これが為めに続々名士が犠牲となる。至く早稲田の三老が特に熱海まで出かけて八時百業愚談をやったのを、実をいへば利用されたのでは春は或許可多額料を取らせたのもやりといふものであつた。薄田の八十枚の原稿を東京日々へ三十回に分つたと報告して来た。愚談を連日有力の新聞に連載されるのは恥汗を禁じ得ない

六月廿日記

榛原製

顔の人であつたか思ひ出す事も出來ない。御夫婦共に當時、至る處をパラダイス化せでは置かぬ伊藤公の統監時代の京城社交界における流行ッ子でもあつたやうな事を想ひ出した。香阪氏は學生時代から、賑かな方の統帥者でもあつたのだらうと思ふ。

話頭は今、熱海におけるかるた會へ轉じて春城翁は

『あのかるた會などは、それこそ今昔の感だね、露木の十疊座敷を會場に充て見晴らしの好い室で、宿の娘の、先刻のおまさが中心で他家の娘も集まり、それが老女の監督付きで大學生同席の盛大なかるた會さ。この會合に、われ〳〵の側では誰々がゐたか、今ははつきり覺えないが、その頃熱海にゐた友人は、銘々宿は異つて、第一に坪内君、それから穗積八束、澤邊春水、井上圓了、川口宗時などは記憶にある、高田君はゐなかつたやうに思ふ。かるた會に連つたのはこの連中で、女の方では、露木のまさ、奥村光、久住といふのと三人、その中で奥村光が

土地で評判の美人

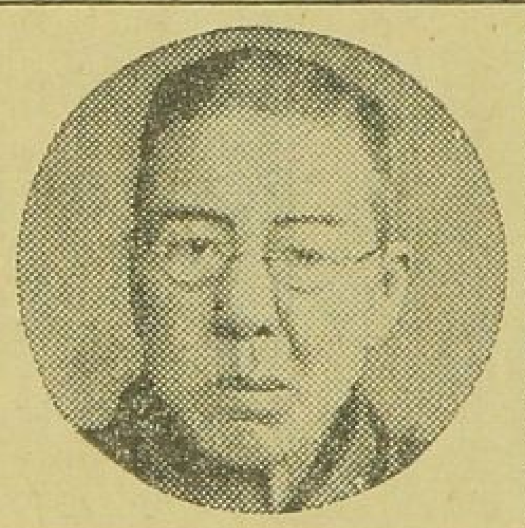
で、醫師の娘であつた。さて二人づゝ組を作るといふので籤引きをすると、二度まで、私が場内美望の的たるお光と組む事となつたので、岡燒連はワー〳〵いふ騷ぎ。美男子を以て自ら任ずる澤邊春水の如きはわが輩の手を掻きむしるなど、痛事を演ずる始末さ。坪内君はいつも讀み役に廻つて例の早口で達者に讀んだものさ。會が終つて、監視の老女も三女も去ると、後で岡燒連は勝手な批評を加へ、奥村光は美人だが惜しい事に寢小便を垂れるので、誰ももらひ手がないなど〻腹癒せをやつたものだね。この奥村の家は今でも醫業を營んでゐるので、その後三十年、私が樋口屋に泊つた時、私の室と二間程隔つた室に病人があつて、そこへ來てゐた醫師はその奥村であるといふ。そこで私は當時の事を思ひ出して、丁度その際私の室にゐ合はした友達に、かるた會の話を聞かせ、奥村光の名も出たのを當の奥村醫師は、廊下を歸りかけ耳にして不思議に思ひ『私の親戚の名を知つてゐるあの客は誰か』と宿の女中に聞いたた事を後でその女中が私に話したとがあつた。』

『因縁が續くものだね』と逍遙翁は回想して『私は眼が惡いので、何時も讀み役に廻された。』

春城翁『このかるた會のあつた同じ年と思ふ。友人五、六人で船を傭ふて、錦ヶ浦の風景を探らうといふので、乘り出した。先年の大震災で

あの邊の奇巖怪石

も崩れ、大分樣子も變つたが、當時はなか〳〵景色が好かつた。處が、錦ヶ浦だけでは物足らず、とう〳〵網代まで船をやつた。今では網代も可なり好くなつてゐるが、その頃は貧弱な漁村で、上陸して見ると、相當な家はたつた一軒だけさ。それに、ぞろり多くの看板が掲げられてゐる、銀行、郵便局、旅館飲食店、雜貨小間物、瀬戸物など營業といふのには驚いた。併し、ほかには晝飯を食ふやうな家も無いので、その家へ入つて見ると、いかにも不潔な家で、ゆつくり酒を飲む氣にもなれず、倉皇喫飯すると、隣室には、怪しげな女が三、四人ゐて、襖を細目にあけてわれ〳〵をのぞき見するので、興が覺めて急いで歸つた事があつた。』



【寫眞は市島春城翁】

その頃のこと【三】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の昔話

薄田斬雲記

押賣の名人

熱海萬屋の主人公

逍遙翁『熱海もその頃は一半は、也有が須磨かと想像した通りの漁村で、湯治客も大抵自炊的にやつたものさ。』

春城翁『宿屋でも、別館と稱して自炊的に出來た宿貸しをする。そこでわが輩も女を傭つて自炊をやつたことがある。朝寢てゐる處へ旦那どうですといつて、ぼてふりが廊下を横行する始末、それを寢床の中からのび上つて魚籠をのぞいて買うね。』

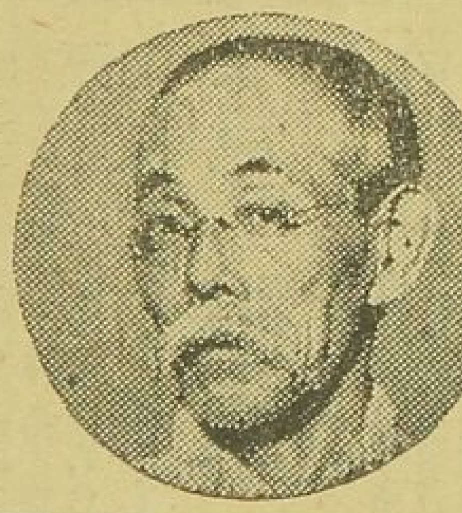
逍遙翁『私も明治十九年の冬、妻と一緒に來た時には、老婆を傭つて自炊をやつた。』

春城翁『あの頃は、熱海の宿賃はやすいものであつたが、東京からは二日の旅程で、是非小田原に一泊する。そこでは小伊勢屋といふのが良い家であつた。

小田原から熱海迄

は、その頃はまだ輕鐵もなかつたから、大抵はあるく、贅澤をいふと籠もあつた。何時であつたか、嚢底覺束ないのに、熱海から東京へ歸る途中、贅澤をやつたもので、旅費が足らなくなり、小田原へ來て、小伊勢屋で、大切な煙草入れを典物に幾らかの金を借りて東京へ戻つた事もあつた、それからその典物を取戻すために態々小田原へ行つた事を覺えてゐる。』

逍遙翁『その頃熱海の萬屋の主人といふのが、働き盛りであつた。店は小間物商ひ、弁舌が達者で、わざと支離滅裂に喋舌り立てるのが得意で、物を賣り付ける事がうまかつた。私が明治廿年に書いた物の中に、この萬屋のスケッチがある。一寸讀んで見よう。』といつて「熱海ペーヂエント」の一節を讀まれた。しかしその「ペーヂエント」中のよりも、翁が明治廿年に「讀賣」のために書かれた「松の内」といふ小説中の一くだりが面白いからこゝに引かう。



『熱海の仲町の中程なる萬屋といふ小間物店に腰打ちかけたる阿みのと老婆……そこへ小田原にて別れし林といふ男來る。林は萬屋の亭主にちかづきと見え、冗口を叩きながら店へ立寄り……それから、阿みのの束髮の出來ばえを賞め、自分もこの間、林結ひといふ洋髮を工夫したといふ。阿みのはそれを聞いて頻に敎へてくれといふ。萬屋の亭主も相槌を打ち、『成程、林結ひはきッと上品でせうな、坂口の旦那はお器用だから（坂口の旦那とは林が坂口に泊つてゐるからいふなり）』『をかしくオレーフを掛るね、味淋の洋行歸りといふベルモットをモ一度賣り

その頃のこと【二】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の音話

薄田斬雲記

評判の美人

かるた會の騷ぎ

半峰翁『私は最初の露木は一週間ばかり泊つた。今の話で思ひ出したが、その頃は露木も潮戸物屋を兼ねてゐたね。その中あの雁皮屋の萬屋のおふくろとも顔なじみになつたり、丁度熱海に芝居が有つて繼見物をしやうといふ話から宿の女中を連れて出かけた。香阪駒太郎氏など一所でね。そんな余計な事をしてゐる中に宿の勘定が一圓足らなくなり、歸りは、半分歩いて小田原の小伊勢屋へ泊つたが半分は山籠で越した』

春城翁『薄田君、その香阪といふのは、君が朝鮮にゐた頃、統監府の裁判官であつた男だ。背の低い男で、併し

その道にかけては

先達でね、高田君と並んで歩く時には、天氣の日でも高足駄をはくね』

私は明治四十一年頃京城にゐた時、新聞の公判廷記事によく香阪駒太郎といふ判事の名を見た。それから、劇場などで何かの寄付演藝會などでは香阪夫人と呼びかけられる小柄なスマートな顔の婦人を見た樣に思ふが、今ではどんな顔の人であつたか思ひ出す事も出來ない。御夫婦共に當時、至る處をパラダイス化せでは置かぬ伊藤公の統監時代の京城社交界における流行ッ子でもあつたやうな事を想ひ出した。香阪氏は學生時代から、賑かな方の統監者でもあつたのだらうと思ふ。

話頭は今、熱海におけるかるた會へ轉じて春城翁は

『あのかるた會だとは、それこそ今昔の感だね、露木の十疊座敷を會場に充て見晴らしの好い室で、宿の娘の、先刻のおまさが中心で他家の娘も集まり、それが若女の監督付きで大學生同居の盛大なかるた會さ。この會合に、われ〳〵の側では誰々がゐたか、今ははつきり覺えないが、その頃熱海にゐた友人は、鉛々宿は異つて、第一に坪内君、それから穂積八束、澤邊春水、井上圓了、川口宗時などは記憶にある、高田君はゐなかつたやうに思ふ。かるた會に連つたのはこの連中で、女の方では、露木のまさ、奥村光、久住といふのと三人、その中で奥村光が

土地で評判の美人

で、醫師の娘であつた。さて二人づゝ組を作るといふので藏引きをすると、二度まで、私が塘内美望の的たるお光と組む事となつたので、岡燒連はワー〳〵いふ騒ぎ。

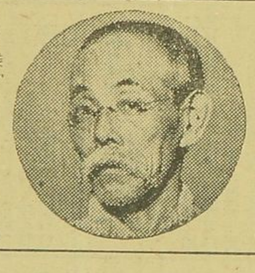
で、岡燒連はワー〳〵いふ騒ぎ。

男子を以て自ら任ずる澤邊春水の如きはわが藏の手を揺きむしるなど、痛事を演ずる始末さ。坪内君はいつも讀み役に廻つて例の早口で達者に讀んだものさ。會が終つて、監視の老女も三女も去ると、後で岡燒連は勝手な批評を加へ、奥村光は美人だが惜しい事に震小便を垂れるので、誰ももらひ手がないなどゝ腹癒せをやつたものだね。この奥村の家は今でも醫業を營んでゐるので、その後三十年、私が樋口屋に泊つた時、私の室と二間程隔つた室に病人があつて、そこへ來てゐた醫師はその奥村であるといふ。そこで私は當時の事を思ひ出して、丁度その際私の室にゐ合はした友達に、かつた會の話を聞かせ、奥村光の名も出たのを當の奥村醫師は、廊下を歩いかけ耳にして不思議に思ひ「私の親戚の名を知つてゐるあの客は誰か」と宿の女中に聞いた事を後でその女中が私に話したことがあつた。』

『因緣が續くものだね』と逍遙翁は回想して『私は眼が悪いので、何時も讀み役に廻された。』

春城翁『このかるた會のあつた同じ年と思ふ。友人五、六人で船原へ來て、小伊勢屋で、大切な煙草入れを典物に幾らかの金を借りて東京へ戻つた事もあつた、それからその典物を取戻すために態々小田原へ行つた事を覺えてゐる。』

逍遙翁『その頃熱海の萬屋の主人といふのが、働き盛りであつた。店は小間物商ひ、弁吾が達者で、わざと支離滅裂に喋舌り立てるのが得意で、物を賣り付ける事がうまかつた。私が明治廿年に書いた物の中に、この萬屋のスケッチがある。一寸讀んで見よう。』といつて「熱海ベーチエント」の一節を讀まれた。しかしその「ベーチエント」中のよりも、翁が明治廿年に「讀賣」のために書かれた「松の内」といふ小説中の一くだりが面白いからこゝに引かう。



『熱海の仲町の中程なる萬屋といふ小間物店に腰打ちかけたる阿みのと老婆……そこへ小田原にて別れし林といふ男來る。林は萬屋の亭主にちかづきと見え、冗口を叩きながら店へ立寄り……それから、阿みのの東京の出來ばえを賞め、自分もこの間、林結ひといふ洋髪を工夫したといふ阿みのはそれを聞いて頻に教へてくれといふ。萬屋の亭主も相槌を打ち、「成程、林結ひはきッと上品でせうな、坂口の旦那はお器用だから（坂口の旦那とは林が坂口に泊つてゐるからいふなり）」『をかしくオレーフを掛るね、味醂の洋行歸りといふベルモットをモ一度賣り

を做ふて、鍋ヶ浦の風景を採らうといふので、乘り出した。先年の大震災で

あの邊の奇巖怪石

も崩れ、大分樣子も變つたが、當時はなか〳〵景色が好かつた。處が、鍋ヶ浦だけでは物足らず、とう〳〵網代まで船をやつた。今では網代も可なり好くなつてゐるが、その頃は貧弱な漁村で、上陸して見ると、相當な家はたつた一軒だけさ。それに、ぞろり多くの看板が掲げられてゐる、銀行、郵便局、旅館飲食店、雜貨小間物、潮戸物など繁業といふのには驚いた。併し、ほかには蕎飯を食ふやうな家も無いので、その家へ入つて見ると、いかにも不潔な家で、ゆつくり酒を飲む氣にもなれず、食皇喫飯すると、隣室には、怪しげな女が三、四人ゐて、襖を細目にあけてわれ〳〵をのぞき見するので、興が覺めて急いで歸つた事があつた。』【寫眞は市島春城翁】

その頃のこと【三】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の音話

薄田斬雲記

押賣の名人

熱海萬屋の主人公

逍遙翁『熱海もその頃は一半は、也有が須磨かと想像した通りの漁村で、湯治客も大抵自炊的にやつたものさ。』

春城翁『宿屋でも、別館と稱して自炊的に出來た室賃しをする。そこでわが輩も女を傭つて自炊をやつたことがある。朝寢てゐる處へ旦那どうですといつて、ぼてふりが廊下を横行する始末、それを寢床の中からのび上つて魚籠をのぞいて買うね。』

妻と一緒に來た時には、老婆を傭つて自炊をやつた。』

春城翁『あの頃は、熱海の宿賃はやすいものであつたが、東京からは二日の旅程で、是非小田原に一泊する。そこでは小伊勢屋といふのが良い家であつた。

小田原から熱海迄

は、その頃はまだ輕便もなかつたから、大抵はあるく、贅澤をいふと籠もあつた。何時であつたか、養底憂東ないのに、熱海から東京へ歸る途中、贅澤をやつたもので、旅費が足らなくなり、小田

その頃のこと【四】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の昔話

薄田斬雲記

熱海黨

井上侯爵の女婿

『熱海の旅館、商店も多くなつたね』と半峰翁は『あの頃は、今の萬屋だの、露木、樋口、坂口など主たるものであつた。私は最初露木にをつたが、その後樋口へ鞍替へをした。』

春城翁『私もその後年末から年を越して三ケ月間樋口にゐた事がある。その折有名な寺が二軒焼けた。古い寺で、温泉寺とかいつたね。藤房の遺物があつたのを皆焼いてしまつたと聞いた。』

逍遙翁『あの頃の熱海黨で今日生殘つてゐるのは吾々以外殆どないやうだね。』

春城翁『熱海黨は余りないが、それでも一つ橋時代の吾々の同窓がまだ廿人近く殘つてゐる。昔よくやつた、四谷見付の三河屋で今も毎年牛肉會を開く例になつてゐるが、去年の冬は、高田君の國府津の別荘に招かれた。その折は、坪内君は不參であつたが、藤澤（利喜太郎）、田中館（愛橘）、土方（寧）、石渡（敏一）、石川（千代松）、原田（竜治）、佐藤（三吉）の七氏の外に、大阪から砂川（雄俊）氏が來會した。これに主人と私とを合せて十人であつた。例の如く腕白時代の話がわいて、皆若返つた。田中館老は

羅馬字の熱心家で

その折も、この宣傳の爲、長崎へ赴くといふので、大きな鞄を携へてゐた。中に何があるのか尋ねたら、この通りと出したのはタイプライターの機械であつた。やがて、記念の寫眞をとるとき、藤澤は「おれは寫眞をとらない主義だ」といつて、後ろを向いてレンズに入つたのもかしかつた。三四年前に、三河屋に會した時は十二人の出席であつたが、食つた牛肉は五十三人前といふのでちよつと驚かされた。私と他にモ一人は酒が專らで、鍋には箸を入れなかつたから、二人を除いた計算で、一人が五人前づゝ平げたことになる。七十に近い老人連のこの健啖は、意を強うするに足ると、お互に健康を祝したやうな次第さ。……但し、あの頃の熱海黨で私が親しくしたのは、前にいつた穗積八束さ。優男でね……』

半峰翁『それから、熱海へ長く來たのは藤田四郎さ。温泉を掘り出したといふ。』

春城翁『藤田は夜遅い、よく二時過ぎまでも起きてをる。それが怪しい事でもなんでもない、碁一方の趣味だ。これは茶も煙草も忘れてやる。女中は眠いもんで、こぼす。碁が濟んでから酒を飲んで寢る。それに神經衰弱で眠れない、朝は早いのだ。

井上侯爵の女婿と

あつて熱海にも大きい別荘を有つてゐた。坪内君は最初別荘の事を共同墓地と呼んで、われ〳〵は獨りで別荘を熱海に建てる事は覺束ないから、共同でやらうといふ話さ、そこでその共同墓地を選定しやうといふので、方々あさつたも

運送
北海道運輸連盟
△鬼怒川水力一割
△北海道運輸連盟

その頃のこと【五】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の昔話

薄田斬雲記

島の女の情話

八重水仙の雲園へ

今朝から曇つてゐた空が、沖の方には雲が切れて處々細く青空が見えて來た。海の色も濃くなつて、枯れ枝の間から透かして見られる魚見崎邊の景色は長閑である。眼下の谷間には、處々桃の花が紅く點々し橙や夏みかんの黄色い玉が方々に生つてゐる。床の間へ置き物を飾つた形に初島が鉛色に正面海上に浮んでゐる。今日は土曜で、熱海へ入つた遊覽客は五千人を數へられ、今年のレコードであるといふ。私共が先刻停車場からこゝへ來る途中、正宗の瓶を振つて花見手拭を頸に卷き、子供を連れて赤い顔の危ない足元の客も見えてゐた。下の水口園でも可なり客が入つた樣子で、子供等の呼び集ふ賑かな聲が邪魔にもならぬ程度に春の氣分を添へる。向うの林の高い木からは折り〳〵四十雀の細いさえた聲が聞える。

『あの初島は、皆の目につくのですが、島物語りが一向に聞かれません。無人島ではないのでせうな』と私はいひ出してから、先年島の女が

毎夜三里の海上を

泳いで熱海の町に住む男のもとに通うたといふ話を聞いたことを思ひ出した。

『あれは共斎制の行はれるといふ樂園さ』と逍遙翁は遙に青黛の島影へと視線を送る。

『何時かあなたに連れられて初島へ行きましたな。』と春城翁も思ひ出にふける體子。

逍遙翁『草が一本生えない程に人念に耕すといふ。』

春城翁『然ういへば島はあつたが水田は無かつた樣だ。』

逍遙翁『初島水仙が滿島に生えてゐたが、今はない樣子だ、あれは八重で特色のある水仙であつた。』

共斎制の樂園で、八重の水仙が滿島と聞いては見ぬ光景にあこがれる氣分になる。繪の樣に美しい形のあの島へ渡つて見たいと思ふ。多くの島は山形に中央が高くなつてゐるのが、初島は中凹に長方形の水盤を置いた形に見える。一座は、島生活を思ひ、海上に浮ぶ島の形にうつとりと見とれてゐる。

『ビールでも扱かうかね。』と逍遙翁はこの好景に對して淺酌の興趣を添へる事を思ひ付かれたのである。

『いや、夫には及ばん。』と二老友はとめる。

『矢張り後で酒がまづくなるからな。』と逍遙翁は心遣ひをされる。

『それよりは、今の中書屋を拜見しよう。』と、半峰翁は促す。

この室へすわつた程の人は、逍遙翁新築の書屋が眼前五十歩の處に巍然として建つてゐるのを不思議な好奇心で眺めずにはをられないのである。それは沖島の

龍宮城を想はせる

ものであり、また五重塔を想はせるものであり、白い脚と青い屋根と、丹塗りの外壁と、屋上の翡翠の風見とが、和漢洋を取入れた風變りな外觀である。これが、十年近くも枝一本折らずに大切に育てた二本の柿の老木の込んだ小枝の間から眺められる趣は『あれは一幅何んだらう』と誰でも不思議な物に思ふのである。

この書屋は熱海の町の南半からは、どこからでも山の手に高く望まれるので、忽ちにして熱海名物の一つと目されることになつた。

庭下駄を穿いて一同は逍遙翁の案内で書屋へと小さい圓石で造つた段々を下りて行く。書屋の位置は庭から一段低いところにあるが、下の水口園からは高い斷崖の上に望まれるのである。京都の清水の二重の塔などを聯想させるものである。その途中には小さい瀧があり、小流があり、この流れに架けた橋は敷茅なもので『之は和藤内の趣向だね』と春城翁の解釋は動かぬ處である。淺い流れには、わさびが鮮かな色の葉を伸ばしてゐる。清楚な氣分が十分である。

その頃のこと【四】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の昔話

薄田斬雲記

熱海黨

井上侯爵の女婿

『熱海の旅館、商店も多くなつたね』と半峰翁は『あの頃は、今の萬屋だの、露木、樋口、坂口など主たるものであつた。私は最初露木にをつたが、その後樋口へ鞍替へをした。』

春城翁『私もその後年末から年を越して三ケ月間樋口にゐた事がある。その折有名な寺が二軒焼けた。古い寺で、温泉寺とかいつたね。藤房の遺物があつたのを皆焼いてしまつたと聞いた。』

逍遙翁『あの頃の熱海黨で今日生殘つてゐるのは吾々以外殆どないやうだね。』

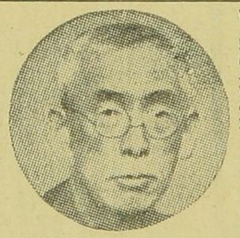
春城翁『熱海黨は余りないが、それでも一つ櫂時代の吾々の同窓がまだ廿人近く殘つてゐる。昔よくやつた、四谷見付の三河屋で今も毎年牛肉會を開く例になつてゐるが、去年の冬は、高田君の國府津の別荘に招かれた。その折は、堀内君は不参であつたが、藤澤（利喜太郎）、田中館（愛橘）、土方（寧）、石渡（敏一）、石川（千代松）、原田（鐵治）、佐藤（三吉）の七氏の外に、大阪から砂川（雄俊）氏が來會した。これに主人と私とを合せて十人であつた。例の如く腕白時代の話がわいて、昔若返つた。田中館老は

羅馬字の熱心家で

その折も、この宣傳の爲、長崎へ越くといふので、大きな鞄を携へてゐた。中に何があるのか夢ねたら、この通りと出したのはタイライターの機械であつた。やがて、記念の寫眞をとると、藤澤は『おれは寫眞をとらない主義だ』といつて、後ろを向いてレンズに入つたのもをかしかつた。三四年前に、三河屋に會した時は十二人の出席であつたが、食つた牛肉は五十三人前といふのでもよつと驚かされた。私と他にモ一人は酒が專らで、鍋には箸を入れなかつたから、二人を除いた計算で、一人が五人前づゝ平げたことになる。七十に近い老人連のこの健啖は、意を強うするに足ると、お互に健康を祝したやうな次第さ。……但し、あの頃の熱海黨で私が親しくしたのは、前にいつた穗積八束さ。優男でね……』

半峰翁『それから、熱海へ長く來たのは藤田四郎さ。温泉を拵り出したといふ。』

春城翁『藤田は夜遲い、よく二時過ぎまでも起きてをる。それが怪しい事でもなんでもない、碁一方の趣味だ。これは茶も煙草も忌れてやる。女中は眠いもんで、こぼす。碁が濟んでから酒を飲んで寢る。それに神經衰弱で眠れない、朝は早いのだ。



井上侯爵の女婿と

あつて熱海にも大きい別荘を有つてゐた。堀内君は最初別荘の事を共同墓地と呼んで、われ〳〵は獨りで別荘を熱海に建てる事は覺束ないから、共同でやらうといふ話さ、そこでその共同墓地を選定しやうといふので、方々あさつたものさ。結局實現したのは堀内君だけさ。』

逍遙翁『今の熱海ホテルの向側の山手の處をその共同別荘候補地として高田君は飲用水の研究まで』

半峰翁『その時、温泉付きの小さい家があつて、春の家といつた。六千圓の買物に出て、安かつた。堀内君の以前の別荘は何年をりました？』

逍遙翁『あそこは新宿といふんで、淺野氏の別荘の直ぐ前の處だ。明治四十四年から十年住んで、次にこの家へ移つてまた十年、前後二十年の熱海往來か。』

半峰翁『私の長岡はもつと後れてゐた。』

逍遙翁『先の新宿は五十坪で積み重ねたマッチ箱さ。』

春城翁『隣家のみかんをこつちの庭園に買つて成らせて置くといふ趣向は流石に逍遙先生の名案で、感服した次第さ。あの家は誰が買ひました。』

逍遙翁『あれは最初露木が買つてくれたが、その後鈴木といふ人の手へまた轉じて行つた。今ではモウあの邊は別荘地でなくなつた。』

春城翁『あなたの住つた頃は、それでもまだ閑靜で

溪流も潺湲たる趣

きかあつたが、熱海も開けた、開け過ぎても困る。』

逍遙翁『全く困る、今年から海岸を八十間埋め立てるといふ計畫が出來てしまつた、あの向うの峰を崩してその土で埋めると遺作ないといふのだが、あれが赤禿になつて、海に入江がなくなつたら熱海もおしまひだね、逃げ出さずば……その頃には此方もどうせお暇だから』

『ま、そんなもんだね』と春城翁は相槌を打つ。

『洒脫な、拘泥しない、物外に超然たる氣分が漂うて、一座胖を向うの峰から海の方へと移して眺め入る。【寫眞は半峰翁】

その頃のこと【五】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の昔話

薄田斬雲記

島の女の情話

八重水仙の栽園へ

今朝から曇つてゐた空が、沖の方には雲が切れて處々細く青空が見えて來た。海の色も濃くなつて、枯れ枝の間から透かして見られる魚見崎邊の景色は長閑である。眼下の谷間には、處々桃の花が紅く點々し橙や夏みかんの黄色い玉が方々に生つてゐる。床の間へ置き物を飾つた形に初島が鉛色に正面海上に浮んでゐる。今日は土曜で、熱海へ入つた遊覽客は五千人を數へられ、今年のレコードであるといふ。私共が先刻停車場からこゝへ來る途中、正宗の瓶を振つて花見手拭を頸に巻き、子供を連れて赤い顔の危ない足元の客も見えてゐた。下の水口園でも可なり客が入つた樣子で、子供等の呼び集ふ賑かな聲が邪魔にもならぬ程度に春の氣分を添へる。向うの林の高い木からは折り〳〵四十雀の細いさえた聲が聞える。

『あの初島は、皆の目につくのですが、島物語りが一向に聞かれません、無人島ではないのでせうな』と私はいひ出してから、先年島の女が、

毎夜三里の海上を

泳いで熱海の町に住む男のもとに通うたといふ話を聞いたことを思ひ出した。

『あれは共齋制の行はれるといふ樂園さ』と逍遙翁は遙に青黛の島影へと視線を送る。

『何時かあなたに連れられて初島へ行きましたな。』と春城翁も思ひ出にふける瀧子。

逍遙翁『草が一本生えない程に人念に耕すといふ。』

春城翁『然ういへば島はあつたが水田は無かつた樣だ。』

逍遙翁『初島水仙が瀧島に生えてゐたが、今はない樣子だ、あれは八重で特色のある水仙であつた。』

共齋制の樂園で、八重の水仙が瀧島と聞いては見ぬ光景にあこがれる氣分になる。繪の樣に美しい形のあの島へ渡つて見たいと思ふ。多くの島は山形に中央が高くなつてゐるのが、初島は中凹に長方形の水盤を置いた形に見える。一座は、島生活を思ひ、海上に浮ぶ島の形にうつとりと見とれてゐる。

『ビールでも拔かうかね。』と逍遙翁はこの好景に對して淺酌の興趣を添へる事を思ひ付かれたのである。

『いや、夫には及ばん。』と二老友はとめる。

『矢張り後で酒がまづくなるからな。』と逍遙翁は心遣ひをされる。

『それよりは、今の中書屋を拜見しよう。』と、半峰翁は促す。

この室へすわつた程の人は、逍遙翁新築の書屋が眼前五十歩の處に巍然として建つてゐるのを不思議な好奇心で眺めずにはをられないのである。それは瀧島の

龍宮城を想はせる

ものであり、また五重塔を想はせるものであり、白い脚と青い屋根と、丹塗りの外壁と、屋上の翡翠の風見とが、和漢洋を取入れた風雅な外觀である。これが、十年近くも枝一本折らずに大切に育てた二本の柿の老木の込んだ小枝の間から眺められる趣は『あれは一幅何んだらう』と誰でも不思議な物に思ふのである。

この書屋は熱海の町の南半からは、どこからでも山の手に高く望まれるので、怨ちにして熱海名物の一つと目されることになつた。

庭下駄を穿いて一同は逍遙翁の案内で書屋へと小さい圓石で造つた段々を下りて行く、書屋の位置は庭から一段低いところにあるが、下の水口園からは高い斷崖の上に望まれるのである。京都の清水の二重の塔などを聯想させるものである。その途中には小さい瀧があり、小流があり、この流れに架けた橋は敷寄なもので『之は和藤内の趣向だね』と春城翁の解釋は動かぬ處である。淺い流れには、わさびが鮮やかな色の葉を伸ばしてゐる。清楚な氣分が十分である。

その頃のこと【六】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の昔話

薄田斬雲記

逍遙書屋

五分も隙さぬ用意

外から見た書屋は、最も奇なものであるが、内部の造りは頗る便利重寶なもので、ぬかりなく、具合の好い構造である。

『誰の設計ですか』と、半峰翁は『誠に重寶な工夫ですな』

『皆んな私の工夫さ』と、逍遙翁は軽く抛いて、『立派な技術家にたのむと、此方の言ひ分が通らなくなるから、未だ大いに名を成さぬ、隠れたる若手の名匠を聘して一切私が案を立てたのをそのまゝ、實行してもらつた。一寸した調べ物は、この樓で間に合ふ丈けの參考書を入れて置くに過ぎないので』と謙遜されるのであるが、書棚、窓、階段、引き石、その他美觀と便利を巧に兩立させた點は五分も隙かさぬ

逍遙翁の用心が窺はれるのである。

『今に乗の時節になつたら、この白壁と丹塗に綠色の配合が立派でせう』と半峰翁は感に堪へて眺める。

内部は三階になつてをる。この書齋は三畳の書齋になつてをる。この書齋は、清楚を極めたもので、實際に讀み書く場所たるよりは、飾り書齋として掛すべき趣味がある。

唐紙やその他の裝飾に、すべて羊を取入れてをるに付いて逍遙翁の説明があつた。

『私は羊歳の生れ、一生讀むと書くで、紙に因縁浅からず、紙を食つて生きる處が羊の性、そこで干支に因んでの小羊さ。幸ひ、坪内は留中に通ずるから、留中に逍遙さ。』

おあつらへに出來て、いや味のない處が大なる天分を享けた人の德であらう。

斷岸の上に僅ばかりの地を物して鬱んだ庭園であるが、高低參差たる地形を利用して小徑を造つてあるから、ぐる〜廻つて歩く氣持は正に逍遙である。何から何まで逍遙の一生、功成り名遂げてこの

茅屋に閑居する人

の老いて益々健康なるは、觀せ仁王と命名してある、双柿の老樹健かなるに似て、双柿舎の名もふさはしい。

なほ、この逍遙書屋に關しては市島春城翁すでに之を早稻田學報に記述する事詳であるから、こゝには略す。

書屋一見を終つて、再び室に歸り座につく。

『あの書屋があると、向うのまづい物が隠れていゝですよ』と半峰翁は『何よりも得をしたのは水口園だね、下から見た書屋は奇觀だらうし、第一自分のとこの目印しになる』

『それだよ、皆んなが、あれを水口園の建物と思つてとんだ骨折が演じられる次第さ』と逍遙翁陽氣に『親戚の子供が來て「伯父さん水口園が變な物を造つたのね」といふから、いや、あれは伯父さんが建てたんだよといふと、さう、好かつたね、龍宮へ行つた樣ねと來る。先日も誰かゞ見えて、いやどうも目ざはりな物を水口が……と來たから、またきまり悪い思ひをさせては困ると思つて、早速こちらから、あれは私がやつたのでといふと、いやどうも結構な物がと早變りさ。一段低い場所だから丁度水口園がやつた樣に見える』

その頃のこと【七】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

四十年前

「書生氣質」の思ひ出

この時暮色蒼然、御馳走が運ばれて電燈が點る。坪内老人も席に列つて配膳やお燗のことなど心を添へられる、話は入り亂れて座は陽氣になつた。

『何時も正月にばかり來るが、熱海の花時は初めてだ』と、春城翁が、庭前の白木連や、一分咲き初めた櫻を眺めて杯を擧げる。三老友中、他御兩人は、それ〜持病があつたりして、持藥を放さないのであるが、春城翁のみは、老いて益す酒に親しみ、快談、怪談、縱橫、春日この人に集まつてゐる。

しかすがに翁さびけり君もわれ

もの心は昔さながらにして。

この歌は、逍遙翁が先年の作で、半峰、春城兩翁にあてたもの、よく

眞情を穿つたもの

として兩翁の愛誦措かざる處である。

『お互白頭の翁になつたが、昔四十年前熱海へ來た時には若かつたものさ』と春城翁三杯の酒に若返つて『露木の宿屋はわれ〜大學生には親切であつた。それといふも氣が置けない學生で、感じの好い學生さんとして買はれたものだらう。』

逍遙翁

『當時の東京大學生は金が無いなどゝはいはない。宿の勘定は他から借りて來ても拂つたものだ。』

春城翁

『「書生氣質」を、紅葉の因縁で伊井が芝居にやつたが、あれは打ち壞しであつた。何んだか妙な大學生にしてしまつて品も悪い。われ〜の生活氣分とは大分かけはなれたものになつてゐた。伊井には解らんから、仕勝手に自分流の大學生をこしらへてしまつて。』

半峰翁

『あれは全くいかん、あんなものではなかつた。』

春城翁

『われ〜の服裝だつても、ちよつと異彩があつたものさ。高田君の黄八丈の羽織などは立派なものであつた。後の眞岡木綿の紋付時代ともちがふんだ。』

逍遙翁

『越後の市島で、春城君の服裝もりうとしたものであつた。高田君のは蓄流しでね、江戸つ子の本色だね。』

半峰翁

『母のをそのまゝ頂戴したので黄八丈となつた樣な次第さ。あのころ

わが輩は甘黨で

何時か勝村へ行つて上等の菓子といつたら一つ五十錢といはれて、あやまつて、十錢のを三つばかり買つて歸つた事がある。』

春城翁

『全部絵觀生制度のその時代の大學に一個五十錢はちよつとこたへたね。その給費では足らんといふので、政府の顧問物をもらつて内職をやつて補ひを付ける始末。そこで校長の加藤弘之博士が、われ〜のはいてゐる下駄が贅澤だといはれて、貧乏學生で宜しいと御宣託が下るね。われわれは皆、ほう齒の日和下駄をはいて歩いた。』

逍遙翁

『然ういふと、甚だお粗末に聞えるが、併しわれ〜のは品の悪い煎茶々々ではなかつた。』

春城翁

『何時か坪内君と夜中歩いて、上野から新橋まで行つて、又九段へ引返してその公園へ入つて寢た事がある。公園の入口には交番があり、誰何されると困るので、石燈籠の下の草原に休み、そのまゝ野宿だ、朝人通りがするので、目を醒まし、又歩いて學校へ歸つた。その後坪内君と九段を通つて、こゝは古戦場だと笑つた事がある。』

『兵士の夢の跡で、これも四十年前の茫々たる夢と化したのであらう。』【寫眞は伊井蓉峰】

その頃のこと【八】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

芝居の話

逍遙翁の思ひ出

話題は、熱海の昔ばなしを通り越して東京へ轉じて行つた。そして芝居の話へ移る。

『芝居の話は高田君が豐富だらう。江戸ッ子で幼少から見てゐたらうし』と、逍遙翁は、今日日本一の芝居通であることをば棚へ上げて他の昔話を誘ひかける。

半峰翁は恐縮の體で『少時に少しは母に連れられて芝居も見たが、そんな變り目毎に見る樣な譚には行かない。丁度維新の騷亂で家道甚へた際だからどうにもならなかつた。』

逍遙翁

『さうかね、私が東京で高田君に連れられて新富座へ行つた。あれは明治九年か十年かね、慶應は何んであつたかな……』

芝居を見た最初は

こゝで逍遙翁は、そのまゝには滑まされなくなつて、身輕く緣側から庭下駄を失つかけて龍口城へ乘り込み、大册物を取出して來られる。日本演劇史である。その眞を頼とめくつて、眼鏡を額へづらして細字を探される。

春城翁は、頭と杯を擧げて陽氣になる、『私は明治八年に芝居で最愛の時計をすられた、伯父から授かつたものをしてやられたので、殘念な事をした。』

逍遙翁は、演劇史を探りながらも、客をそらさず『時計持ちはその頃余りなかつた。そこは越後の素封家だね、……えゝと、西南戰爭の芝居は、あれは、十年の出來事だから

十一年後の事だね

そこで十一年には、どんな芝居が打たれてゐるかね。』と、天井眼鏡で細かい年代記を探してゐる。

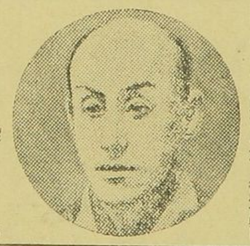
春城翁は委細構はず大學時代の失敗談を續けて『大丸で百圓の著物を作つた、目的はそれを質に入れる事で、つまり現生では手に入らんから、先づ著物にしたのさ。』

牛峰翁

『當時の百圓は嫁入支度だね、大家の若旦那は氣張つたものだね。』

春城翁

『著て威張る間もなく、直ぐやみへ入れたんだ。後受出して今日まで下著が殘つてゐる。當時は散々な事で、下宿の物を借りては質に入れるね。卒業したら直ぐ大臣になると吹くのだから、下宿でも眞に受ける。こつちにしては好都合さね。』



逍遙翁

『然うとも直ぐ書記官になつた位だ、今の參與官處かな、……局長か……あゝ、出た出たあれは明治十一年、新富座「松の榮え、千代田の神德」といふ題だ。高田君之れだね。三河風土記の築山御殿の處だ。菊五郎の豐太閤とある。……何に、事實か、それは

家康鷹狩の場で

先供が、百姓の爺を突き倒す、そこへ家康が來て藥をつかはすといふ、その仁愛の人たるを現したもので、殿樣ぶらない、人間味を發揮したものさ。これは、前例のない行き方で、作者は河竹新七、團十郎の新工夫で、神德を如何にも自然に見せた處が好かつた。私は思はず落涙した。熱海場の涙でない處が好いのだ。』（寫眞は五代目菊五郎）

その頃のこと【九】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

名人輩出

神田伯山の天一坊

春城翁

『あの頃は團十郎の眞似が流行つたものさ。高田君にも團十郎があつたらうといふものさね。』

逍遙翁

『あの頃は各種の藝人に名人輩出で、劇道ばかりでない、講釋の方にも有る、高田君はその方も精通な筈だ。』

半峰翁

『下谷の本牧亭に、伊藤潮花といふのが出た。これは名人で、軍談が得意、貧我物語りなどうまいものであつた。』

逍遙翁

『正系の講談で、本を前へ置いて讀んだもの、その方がきいてゐて安心がなるし、本人も落付いた氣分でやれた。』

半峰翁

『それで、女も余り女にならず。はなし家とは異つてゐた。それが、桃川如燕となると、本を見ずにやる、女は女らしく、どこまでも

やはらかい語り口

になつた。それから田邊南龍、これは私のきいたのは二代目で、修羅場の名人、川中島の軍談が得意で、讓信の車がゝりなど息も纖が

春城翁

『天保錢が一枚で、その頃は錢湯へ入り、手拭を買つて、髮床へ行つて、夜鷹を買へたといふね。』

せぬ呼吸さ。玉藻の前の禪りなど、精進潔齋、水垢離を取つてやるといふ意氣だから、聞く方も緊張するやうな講で。……當節の寄席では見られない。隨分眞劍なもの。それから、先刻の南龍。それから、神田伯山は天一坊で賢つて藏を建てたといふ全盛だね。木戸は天保錢一枚だ。』

である。（KH）

牛峰翁

『私の昔ばなしにもある通り、その頃私の家は、今の萬世の處で、通船屋敷といつた。そこに材木の置場があつて、われわれは夕方河岸を遊び廻る。

すると夜鷹が客と

共にゐるのを棒片れでたゝき出す

といふ惡戲をやつた。』

春城翁

『右側圖の方だね、ハヘ、その頃の柳原は川に面した方は空地で、あんな煉瓦建ての家なぞ勿論無かつた。頗る寂寥たるもので、私は淺草橋の伯父の家へ遊びに行つて歸り、日が暮る。すると、夜鷹が路を横ぎる。人を見分けるための瀉路みだね、それと自己廣告だ。氣味が惡かつた。』

牛峰翁

『夜鷹は柳原が本場で、本所の入江から出て來る。當時の柳原は川の側に柳があつて、反對の側には古著屋があつた、實に淋しい處さ、……その夜鷹は、手拭をかぶつて吳服を抱へてゐた。』

逍遙翁

『先刻の講釋の方には、伯圓、人情話の方には圓朝などいふ名人もゐる。』

斯う水を向けてモッとその方の話を引出さうとする。『私が聽いた伯圓は二代目です』と半峰翁は『松林伯圓だね、あれは泥棒伯圓といはれた。

盜賊講談が得意で

數良講談と名乘つて出た男さ、丁度明治も演說流行の頃なので、伯圓は卓子を持出して立つて語る。嫌味なものだが、新しい。盛に演說を交ぜる、明治式だ。その弟子に神田圓玉といふのが出た。

春城翁

『その明治式から誘はれて出たのだらう、伯龍といふのは、旗本の倅であつたとか聞いた。』

華族の次男、活弁になるといつたもので、時代が大いに動き出したのであらう。

夜色熱海の空を覆めて、燈下酒間の講談一層の親しみを加へる。

（寫眞は二代目伯圓）

樣原製

その頃のこと【十二】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

假名垣魯文

過渡期の戯作者

春城翁『私は魯文を全く知らないが、單に俗物と思つてゐた。しかし、妙に高い趣味もあつたと見えて、その書齋には、古銅の佛像が置かれ、襖は古墨紙で張り詰められてゐたと聞いた。大阪の文樂で名を博した人形遣ひの故人紋十郎がかつて魯文を訪ねた時、魯文のいふには、君も佛を人形に遣ふ事もあらうから、參考のために示したい。そこの庭の沓石にある草履を見給へと。紋十郎は起つて行つて見ると、蓮の葉で作つた草履であつた。魯文のいふには私はこの通り

佛いぢりをやつて

るるから、庭の虫を殺してはならぬとの用意から作つたのがこの草履だ。ぶく〳〵してゐるから、これなら虫を殺さずに濟むであらうと。さて魯文歿後程經て、近松作のある記念の年、文樂で、近松作の釋迦入來を舞台に上ぼせた時、私は丁度大阪にをつた。すると紋十郎が魯文を訪ねたといふ前觸の懷舊談が新聞に出て、紋十郎は、今回は、山中修行の釋迦に蓮の葉の草履をはかせると書いてあつた。私はわざ〳〵見物に行つたが、草履ははかせなかつた。實は跣足の方がよいので、蓮の葉の草履を用ゐたらう全くぶち壞しであつたらうと思ふ。私がその時紋十郎の藝に感心したのは、得て人形遣ひは、喜怒哀樂の感情に支配されて、人形を遣ひながら、自分の

感情を面に現はし

たり、甚だしきは聲を發するものさへあるといふに、紋十郎はどんな場合にも、神色自若で、顏の筋一つ動かさなかつた事である。』

逍遙翁『兎に角魯文は過渡期の戯作者として、染崎延房と共に特筆する價値がある。惡くいへば三馬で、一九や種彥や春水の滓渣を取つてゐる者といはざるを得ないが、如何にも達者で、馬琴のまねさへも出來る多方面な點はえらい。戯作者流の最後の一人で、その門下は夥しく、何れも何がき何文といつた。今では野崎左文氏が殘つてゐるばかりだが……あの齋藤綠雨の正太夫は魯文の弟子で、文壇の大家綠雨先生、とんと子供扱にされてゐた。』

酒が廻り、春城翁ビールの肚文となり、懷舊談が愈々濃やか。話題はいつか繪畫へ轉じて半峰翁の舞台となり

半峰翁『是眞はあれで下町に勢力があつた、腕はあつたが品位が落ちる。

それから河鍋曉齋

も下品な方だが、腕は大したものであつた。雅邦翁も曉齋と菅原白龍の事を稱めてをられた、有名な話で、曉齋が、不忍の三河屋の書會の折、西洋人で御公卿さんに屈をひつかけてゐる處を席書で書いたのが問題で、その場から拘引された。私は少年時代で、習字の先生に連れられて行つてその場を目擊した。後に曉齋は、この騷動の實境を自ら書いた。池に飛び込んで逃げる人など書いてゐる。』

春城翁『曉齋は奇才で、意想外の思ひ付きを見せたやうだね。』

半峰翁『達者過ぎると嫌味が出るもので、是眞には嫌味があつた。四條派でも吳春、栖鳳あたりはさういふ嫌味が更にない。』

逍遙翁『品位が異ふね。』

春城翁『栖鳳には群を抜く工夫がある。』（寫眞は假名垣魯文）

雅邦と貧書生

當意即妙の諷刺畫

半峰翁『狩野芳崖は骨で、橋本雅邦は肉だね。芳崖は天才肌だから時々拙いものもあるが、雅邦には、不出來なものは少い』

逍遙翁『いかにも、明治の天才はだれ〳〵かと數へる段になると、芳崖はたしかにその一人だね。』

春城翁『天才ではなからうが、淺島榧岳などもたしかに奇才だね。榧岳の子の賀月は古本蒐集家で、その方の具眼者であつた。西鶴物を澤山集めた。その頃はまだ西鶴は顧みられなかつた。それを世に

紹介したのは寒月

の力だ。西鶴の中、色里三處世體の方が、珍本で滅多に手に入らないといふのは珍本で滅多に手に入らない。そんな本を寒月は紅葉、露伴に貸した。紅葉も初めてそんな西鶴物を讀んで感心し、今の色里三處世體を丁寧に寫した。私もそれを紅葉から借りて寫したが、返す時、君が自分の寫した本を藏した處でつまらなかつたから、私も自分の書いた物は面白くないから、お互に寫して交換しないかといふと、紅葉は、それもよからうと、私の方が字がうまいなどといつて交換してしまつた。處が紅葉歿後、私の寫しが紅葉の筆寫として賣られ、誰かの手に入つてゐるだらうといふ譯で、勿論、私は紅葉の筆跡に似せて書いたのさ。それから畫家ではないが、その道の批評家として岡倉天心も俊才だね、かれの美術上の貢獻は大なるもので、

芳崖、雅邦を世に出したのも岡倉の力だ。岡倉は天才的で、計畫を立てゝ實行力もあつた。』

半峰翁『菱田春草は一時大觀、觀山と名を齊しうしたが、早死をした。春草が今まで生きてゐたら、佳い作を澤山殘したであらうに

惜しい人であつた

或人から聞いた話に、岡倉が大觀、觀山に注意して大觀はモツと技を練れ、觀山はモツと讀書せよといつたといふが、今日になると大觀の技巧も大に進み觀山の見識も大に擴まつて二人とも押しも押されもせぬ大家となつた』

春城翁『觀山が畫を持つて行つて雅邦に敎を乞うと、雅邦は決して弟子扱ひにはしないで對等に扱つたといふ。

歸りには玄關まで送る。其處には觀山の汚ないほう齒の下駄がちやんと直されてゐる。その事を聞いて觀山の父は、先生に見送らるゝはいかぬと戒めたといふ話がある。それで雅邦は觀山に對して途に手を取つて敎へるといふ事をしなかつた。觀山自らいふには、雅邦先生に會ふ毎に、それでも何か敎へらるゝ氣がしたと、人格の光りが其處に現れたものであらう。』

半峰翁『觀山は子供の頃からの弟子なのだが、雅邦は、手本を書いたり、手を取つて敎へたりはしなかつたさうだ、總て自分で考へさせたさうだ。

或る時雅邦翁は

私に梅を畫いてくれて、畫といふものはこんなものと思ひますといつた事がある。その畫は一見何んの奇もなく、平凡な、素人めいたものであつた。處が考へて見ると、之は、雅邦翁が、雪村の瓜の畫を常に畫望にかけて門生に向つて、眞の畫といふものはこれであると說き聞かせたといふ話と同じ行き方なのである。その瓜の畫といふのは、素人目には一向面白いとも思へないものであるが、雅邦の考へは、手腕技巧を具へてゐる人が、素人の樣な心持になり、子供の樣な氣分で繪を描くのでなければいかぬといふにあるらしく、私にくれた梅も、その意味で出來たものであらうと思ふ』

春城翁『雅邦が諷刺畫を作つた話を想ひ出した。或る貧書生が、當代第一の畫家とも知らずに、突然雅邦の玄關へ上り込んで先生に面會を求め、どうか一枚書いて下さい、それが直ぐ金に代はるのですからといふ。この書生は、或る知人の處へ金の無心に行つた處、何か物を持つて來い、畫なり書なりを、たゞはいかぬといはれ、そこでやむなく畫家の門を叩いたので、然ういつて率直にたのんだのが雅邦の同情を買つたものと見え、雅邦は

直ちに紙を展べて

書き上げたのは、橋の圖で、橋の袂には、人が跪いてゐる。一見、三條の大橋に高山彦九郎が遙に禁闕を拜するの圖と思はれるのであるが、實は諷刺畫であつて、自分の姓は橋本であるから橋袂を描き、書生が叩頭憐れみを乞うからといふ意を寫し、彦九郎ならぬ書生を描き添へたのであつた。當意即妙のこの諷刺は有名なものとなつてゐる。』（寫眞は橋本雅邦）

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

……薄田斬雲記……

成島柳北

熱海紹介者として

春城翁『それから想ひ出すのが東原晴湖、明治の畫壇に男性的の畫をかいた唯一の女性だね。晴湖は南畫の脈を引き、粗畫を多く作つたから、多くの人はその粗筆を難ずるけれども、密畫にすぐれたものが多い。晩年は多く密畫を書いたやうだが、その畫も鄭板橋に私淑した樣子で畫と折會つて、女流の書には珍しいものである。』

半峰翁『小蘋よりも晴湖の方が筆力は上であつたやうだね。』

春城翁『それから梶田半古、よく

紅葉の小說の挿畫

をかいたね。才筆であつたが、世渡りが拙であつたので、大いに現れなかつた。おとなしい人でね。』

明治の畫家の話が、今度は熱海紹介者としての成島柳北へと轉じ

半峰翁『柳北の祖父は司直といつて、幕府の奧儒者で有名な人である。表儒者は林家であるが、奧儒者は成島家であつた。成島家が奧儒者となつたのは享保頃でしたか道筍といふ人が最初であつたと思ふ。この人の櫻花の賦が飛鳥山に立つてゐる筈だ。それを道筍自ら書いたのを買つた事があるが去年澁澤青淵先生に贈つた。』

春城翁『柳北が文章で熱海を天下に紹介した功は大したものであつた。その意味で、柳北は熱海の恩人といふべしだ。この地の溫泉が氣に入つて幾度來たか知れぬ。そして來るたびに

相當に長い紀行

が書かれ詩も少からず出來た。それが朝野新聞に載せられた。その頃は未だ熱海へ遊びに來る人が少なかつた時代で、柳北の詩文の宣傳で熱海が有名になつた事を思ふと、熱海の人はかれのために記恩の碑ぐらゐを建つるが宜しい。私が泊つてをつた樋口屋は確か柳北の宿であつたので、入口に氣象萬千樓と柳北書の額が今でも掲げてある。そこで私は柳北記念碑を立てたいと考へた事がある。それは今から廿余年前の事でその折坪内君にも相談した。坪内君も賛成で坪内君の案では、字を多く彫る碑を建てるよりは、柳北の特徴ある像を彫り付けて、それに碑文を添へて、樋口屋の庭に立てゝは何うかといはれた。そんな簡單なものならば、樋口屋の泊り客からきよ金をしても出來やうといふので、早速宿の主人に同意を求めたが、醵金趣意書が出來ぬ内に、私は急に東京へ歸る都合になり、そのまゝに終つたのは遺憾な次第であつた。』

逍遙翁『柳北は熱海を夏にも好いとほめてゐる。昔は冬の轉地であるばかりでなく、夏が好いといつたものと見えて

元祿時代の刊本に

もさう書いてある。わたしゆとこにも柳北の書幅が一つ有つた筈だ。』

逍遙翁は思ひ出すと、直ぐ柳北の七律の一軸を床へ掛けかへられる。秋の熱海の詩だ。それを一瞥して春城翁は

『成程、これは熱海の別莊に掲げるにはふさはしいものだね。柳北は溫雅の人物であつたが、書も菱湖風でその人の如く和かだね。その詩は專門家は上乘とはしないがしかし書生などに氣受のよいものが多い。私なども青年時代に愛誦して今も暗誦してゐるのが幾つかある。』

『一つ吟誦していたゞきたいものです』と私はきつとそれは十國峠の詩であらうと期した。

春城翁『いや十國峠は君に讓る、わが羅のは柳北が京都に遊んだ折の春夕の詩でこんなものだ』と吟じたのは

同學春遽醉喜天。高人清對美人妍。亂雲吐月又吞月。三十六峰茫似煙。

といふのだ。この問答で熱海の夜景も茫として煙の如く思はれた。

柳北の文才は頗る奔放で、いはゆる漢學者臭味がなく、新樣に出て、自在に文字を役して情景をほうふつせしむる處は山陽にも似て、もつと柔靡性に富んでゐる樣に思はれる。

柳北の名に因んで、話題は例の柳橋新誌、東京繁昌記などから、東京新誌を出した

服部誠一へと移つ

て行つて、春城翁は『あの服部といふ男は東北人らしく、話はさつぱりわからないが、筆は馴れたもので、書き放しで直す事も少なかつた。われ〳〵の大學時代にはあのあたりの漢文脈を禰讀したもので、つまり坪内君の書生氣質が出る前は、漢文學と駄洒落だけであつたのだ。』（寫眞は成島柳北）

複原制

その頃のこと【十四】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

わさび谷

小涌谷の雲畑

この時、お膳の刺身へ付いてゐるわさびが話題になつて、わさびはやはらかく摺りおろすべきものとさもないと味がわるく、辛いばかりで、あま味が出ないといふ樣な事から、春城翁は忽ち熱海のわさび谷を想ひ出され『吾々が幾度も杖をひいて賞翫したわさび谷は、今の衛戍病院の門前にあつた。そこには、自然に水がわいて、その水が傾斜のある、相當な幅の溪谷へ流れて行く。その谷は鬱然たる樹木に蔽はれ、白晝影暗い幽境でわさびの栽培にはおあつらへに出來てゐた。從つてわさびがきれいに生えてゐる。坪内君はそこにかにがゐるのを見て、かにも文人畫家に愛せらるゝだけに、生意氣に文人等の喜ぶ辛味を好むといはれた。實は、久しい間、かにがわさびをかんでゐるものと解せられ、わさびの枯れ葉はかにのためと見られてゐた。處がよく見ると、小さい虫がゐて

わさびを食ふものと知れたので、

初めてかにのために免をそゝぐ事も出來た樣な次第であつた。今では病院が建つてこのわさび谷も亡んでしまつた。』

逍遙翁『今日のわさびは、この庭前のそれさ。』

『なる程』と春城翁は再びそれに箸を付けて『かの谷に失つてこの谷に得るか。誠に味も結構、これは喜ばしい。一つこの庭の流れへもかにを放たんかね、……近年熱海の風致は次第に亡び行く間に、それを慨して新たに風致を作る人は逍遙君であるといはなければならん。先づこの屋敷の老いたる双柿を見立てゝ、こゝに別莊を設けられたのも、また今回書樓を築かれて熱海に一異彩を添へられたのも皆逍遙君である。前面の峰の上に赤い鳥居を建てたのも、あれは他人の所有に係る山ではあるが、景趣を添へるために逍遙君の特志から起つたことだね。』

半峰翁『わさびは清い處に生えて、藥味の中で一番清潔で氣持が好い。片田舍へ行くと、わさびがないので淋しい。大震災の時には

わさびは閑却され

なか〳〵出てこないで頗る困つたね。この双柿舍の庭にはかうわさびが生えてゐるので、一層清らかな風致を添へる。』

と、ガラス戸越しに庭さきを眺めて

『かうして向ふを見た夜景の熱海も面白いね』

たゞぼんやりした景色ではあるが、電燈が眼下遙に連らなつて、日中見馴れた林や、丘や、海上まで心眼に映じて來る。木蓮の白い花だけは、ガラス障子近くに室内をのぞいてゐるやうに見える。

『景色といふと、どこが一番好いのか、高田君は方々見てゐたらうね』と逍遙翁は突然辰巳行する事が少いので、半峰翁を先達にする。

半峰翁『熊野は見ないが、どこの景色も大概型がきまつてゐるやうでね、幾らか好いのは十和田だらう。陰鬱だが深味がある。スコットランドの湖水の景色に似てゐる。スイスとは異ふ、スイスのは山白く水紫で、きれい過ぎる。日本人の趣味には矢張り、スコットランドの湖水が適する。その意味で十和田は日本趣味が好く現れてゐるやうに思ふ。』

春城翁『十和田は途中の溪流が好い。原始的な處がある。殊に湖水へ三里ばかりの間が好かつた。』

逍遙翁『景色は見方によつて變化するから、高い處から見るのと

または見る時刻

などで、――夕方とか、朝とか、それ〳〵變つた趣があるね。』

半峰翁『屋島の夕景色は實に好かつた。』

逍遙翁『あの山もみな好い、宮島の彌山も好い。』

春城翁『坪内君には、小涌谷の雲畑の研究といふのがあつた。それは、坪内君が箱根の小涌谷に一ケ月ばかりをられたので、私は小涌谷の風景はどうかと聞くと、その答へに、あそこの雲畑の變化は甚だしいので、俟臾の間に景色がいろ〳〵變るのが妙だといはれた。その後私も三日ばかり、小涌谷に泊つた事があつたが、成る程、雲畑の變化は、一つの景色を十にも廿にもするのが面白かつた。高山の景は雲畑にあると思つた。』

樣原製

その頃のこと【十五】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

時代の暴虐

困つた大遊園計畫

半峰翁『國府津の私の家から相模灘を見ても變化が可なり多い。』

逍遙翁『熱海のこんな小さい處でも、見る時刻と場所とで變化が多い。變幻躬まりなき處で、大自然の妙趣さ。』

半峰翁『國府津からは右の方、箱根、天城、伊東の方がよく見える。左の方には三浦半島や房州の鋸山などが見え、眞中に大島の噴火が見える。』

春城翁『交通不便で、私も熊野は見る機會がなかつたが、風景通は全國第一の勝といふ。大きな溪谷で、雄大な景色でありそうな事は想像される。またこれを他と比較して書いた人もないので、噂に聞くばかりさ。そこへ行くと

十和田湖の如きは

自分の見た湖水の中では第一に推さざるを得ん。但し、私は十和田の湖面の景よりもむしろ湖畔まで三里ばかり奥入瀬の溪流美を愛する。あの溪流は奔湍の入らぬ老樹が鬱蒼として天日をさへぎり、その枝が垂下して水に浸つてゐるなど、野趣横溢で興が深い。又途中處々小さい瀑があり、急瀑があり、或は岩石が水中に突出して、それがために水が右往左往に秩序なく流るゝの妙もある。蘆原あたりの溪流は深く落ち込んでゐるが、この十和田の溪流は道路と平面を保つてゐる。出水の場合は路を浸すであらうと思ふ位だが、左樣な事がないといふから水量は常に平均を保つてゐるらしい。この三里の溪流の處も今は自動車が通ずるが、ガソリンで走り拔けるには惜しい氣がする。私共の行つた時には、丁度雨が降つて來たが、自動車の幌を外づしてぬれるのをいとはず見物する驟雨、刻々變化する湖畔へ達するとこれはまた潛明な湖水で、どんなに雨が降つても濁る事がないといふ。船で見廻ると湖心へ樹木の倒映が鮮かなもので江天一色纖塵なしさ。夕ぐれ、夜景もよかつた。……近年は文化の發展に伴つて、昔から知られぬ景色が深山埋れる。黒部溪谷なども大したものであるらしい。冥眞で見ても目を驚かすに足る樣に思ふ。』

半峰翁『外人觀光客を呼ぶために、設備をするのは好いが無方針のやり方は困る。先づ京都、宮島日光、それから、この邊は、箱根、熱海をその中心にして

富士を中心にして

二百圓ばかりもかけたら立派にならう。ヨーロッパがアメリカのお客で儲ける事から考へて見ると十年ばかりでその費用は取返せると思ふ。設備は第一に道路を造らなくてはいかぬ。西洋の婦人も來るから、芝居や舞踊場も設ける。夕方西洋婦人が盛裝して見ても、行き所がないから、ホテルの亂下に行列してゐるといふ狀態では、外客誘引も覺束ない。』

逍遙翁『設備の仕方が大事だ。熱海も海岸を八十間埋め立てするといふし、金剛山へケーブルをかけて魚見崎へ上る樣にするといふが、十べて打壞しさ。十國峠へケーブルをかけるといふが、これはまだいゝ。』

半峰翁『熱海は道路が第一の問題だ。自動車が樂に通るやうでなくては……』

逍遙翁『遠からず海岸を埋め立てゝ十何間とか廣げるといふから都合はよくなるだらう。その代り注意が疎ぐらい事だらう。』

春城翁『なんともこの開けるといふやつが困るね。

今の大遊園計畫

などは頗る事を正して、自然の趣を出來るだけ殘し、大きな園遊地を造る事だね。』

逍遙翁『熱海には倶樂部もない。』

春城翁『各人思ひ〳〵だからいかぬ。別府などは世界的溫泉地として、何れへも行ける要路に當つてゐる。あれは突堤を出さなくてはいかん。何せよ日本一の大きな溫泉場で、外人吸收が第一だ。モツと遊戯等の設備をしなくてはいかぬ。無茶な事に費用をかけて天然の美觀を打ち壞す時代だから困る。』

その頃のこと【十六】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

時勢の産物

半峰翁『別府方面、瀬戸内はわが地中海で、海の大公園だ。旅行は何となくあつちへ惹かれる。關西と聞くと明るい氣持がする。……關西には隨分うまい蒲鉾があるね。大阪の灘萬のかまぼこも有名だが、尾の道のそべのかまぼこがうまかつた。宇和島のもなか〜うまい。併し小田原のきすのかまぼこは最もうまい。』

春城翁『國府津の鳥賊の鹽辛は結構だ。あれは小田原の桃花軒がやる。癖入りにしたたゝきでね。』

半峰翁『それから越中富山の烏賊の黒づくり。墨を一所にする鹽辛に好いのがある。』

春城翁『佐渡でもあれを造る。私は富山へ行つて初めてあれを味はつて感心した。厨始的な處が好い。』

半峰翁『越後あたりで出來る生干しにしたするめも宜しい。』

春城翁『近頃は鹽辛類は皆あまくなつていかん。世の中が全體にあまくなつたのだから、これも時勢の産物かね。萬事は大衆向き

嚙みしめた味など

いふものは無くなつた。大衆時代といふのは物を一列に低くする。いはゆるモダーンかね、この間モンパリといふ活動を見たが、斷崖の上に立つて、裸體で前だけを蔽ひ、後をあらはにして踊るんだね世界一般の流行だ。大水が出て、ごみくたが、猫の死骸まで一緒に押し流されてゐる形さ。免れて恥なき時代、わが輩今度の讃會なんか見ると、眞に慨慨せざるを得ない。われ〜のやつた頃は亂雲でも荒くても、あんなだらしない事はなかつた。併し大衆の力は阻止されない。それで國家が隋落滅亡といふでもないので、一體に諧子の低い、打算一方の社會が出來て行くらしい。恥だの、名譽だの外聞だのといふ事は問題でなくなる。萬事が露骨で、無趣味だ。神田邊の復興建築だつて國民本來の趣味などといふ事は見られない。安つぽい外國の眞似、これが大衆時代の一特徴だね。文學も大衆文藝に押されて、諧子の高い雑誌は立ち行かない。偶に寄席へ入つても昔の樣な實のある落付いて聽く話といふのはない。芝居の方だつて同じ事でせう。』

半峰翁『新國劇も澤正が死んではちよつと行詰まりらしいね、惜しい事をした。澤正は人を統率する才幹をもつてゐた。川上も同樣だつたが藝が澤正に及ばない。兎に角、澤正は名物男であつた。』

名物男から、又名物の話へ戻つて、各地料理比較論の氣焔が揚がる。

半峰翁『京都、大阪、名古屋、江戸、長崎と日本の料理は五流といはるゝんだが、長崎は支那の轉化で、純日本料理でない。京都料理は茶會席料理に近い。江戸料理は別流で具合の好いものであつたが、今は亡びた。大阪料理に壓倒されたのだ。中華亭あたりも、大衆に押されて料理は惡くなつた。

元來日本料理では

茶料理が一番進んでゐるが東京では容易にたべられない。』

春城翁『江戸料理は上方に征服されて荒んだ。上方必ずしも惡くないが東京でくふとまづい。上方の經營力はえらいもので、江戸は全く壓倒された形だね。山王の星が岡茶寮は、支那式で日本料理を食はせる、小樂などは全く支那式に小皿を並べるが、支那料理、支那種が一つもない處が特色だ。銀座へ支店を出して名所を見せる、清潔を標榜するのだね。それで銅器などは使はない。銀座に因んだ銀鍋でやるといふ趣向、繁昌すると好い。』

半峰翁『何時か星が岡で狸汁を食はせた。加賀の白山で捕へた狸だといふ。味が上品で頗るうまかつた。』

その頃のこと【十七】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

料理、建築

春城翁『更に角東京料理は亡びたね。上方の勢力にまけたので、昔の八百善の料理などは、江戸文化の結晶の一面を示したものともいへる。當時名士流の江戸留守居役は、いはゞ外交官で、鄕國政策に沒頭したために、料理も自づと發達した。この留守役の中には、相當の趣味家もゐたに相違ないから、料理屋の方ではそれ等の人に敎へられた事もあつたらう。抱一上人などいふ書畫界の大家も、吉原歸りには八百善へ立寄るのが例で、現に花魁を誘出して左右に侍せしめた程の通人であつたから、かれは料理の事でも八百善に註文した事がいろ〜あつたらうといふものさ。

八百善で浴場を

久保扶桑のことし、刺身抱丁を磨いて、そのまゝ用ゐると、あつて、磨いた抱丁を鑄につるして井戸に下げさせたのも抱一の發意だといはれる。併し、今では江戸趣味が各方面共に追々と亡びて、上方風が盛んに侵入して來るので、料理も、今は殆んど關西風になつてしまつた。何せよ關西は經營に長じてゐるから、東京はとてもかなはない樣だ。』

半峰翁『江戸文化も德川氏が參覲交代制を設けてから、全國の田舍人が集まつて、最初はその趣味も濃厚であつたが、やがて、淡泊で渡いものになり、關西の方が却つて濃厚で甘いものになつた。今はまた關西と取替へッこになり、東京は京は女の趣味なども濃厚で、京都で半えりなぞを賣ふ場合に、三十の女に似合ふものを賣ふには二十の女といつて註文しなければいかぬといふ有樣だ。』

春城翁『花柳界では、東京の關門は新橋であるから、名古屋女はまづ本場の新橋に入る、それから赤坂、築地邊へ散ばつて行く、そこで江戸ッ兒妓は押つ付けられて芳町柳橋下谷などに屏息、哀れを留むるといふ始末さ。美人といへば名古屋女に限るとされたこともあつた。』

半峰翁『萬事その式で、關西の勢力が事々を壓して來るね。太阪の強みは大阪人自らが

鄕土を支配する

處にある。市政もしたがつて甚だしく亂れない。東京は寄り合だから、烏合の衆で愛鄕心などいふものが存在しない。いつた中心力もない。したがつて市政も治まらない。江戸料理もかうして亡んだ。時代は大衆向きになつてカフエーだの、バーだの、ガラス戸一枚でのぞかれてお手輕な、そしてデパート式の處へ落ちて行く。便利重寶といふ安上りな低い方へ流れる。建築を見てもその通りだね。』

春城翁『建築といふと、久保扶桑を想ひ出すね、あれは、日本鍛道の運轉課長だつた。僕はあの男には感服の事がある。豪放で面白い工夫をもつてゐて茶人式の趣味工夫にも富んでゐた。一番好く現れたのは建築さ、本業ではない、全くの余技であれまでに工夫の固いたは感ずべしさ。面白い工夫だが、動もすると奇に趨る缺點があつた。高田君の國府津の香寶莊は、久保の門弟とでもいふべき河名老人が造つた宅だ。久保は私の鄕里新潟へも來て新發田の豪家白勢家へ出入して白勢氏の趣味的感化を受け、それが後年建築の方へ移つていつた。その建築道樂をやり出して後の事、先生、柳橋の鑁清の娘と愛に落ちた。そして鑁清の家のある部分の建築をやつた。娘に取つては

一擘兩得の重寶な

お客だ。處が、工事中、久保氏は毎日指圖をする。監督をする。が、遂に告げて曰く、私はお前を援助して建築をやるのだから、食客ではない。殺合は一所でも、これは別事だと。そこで鑁清に起臥して普請の指圖をしながら、わざ〜飯をよそへ食ひに行くといふので、遂にそれをやり通したといふがおもしろい。』

半峰翁『天才的で奇を好んだね。それで、家を造るまでが樂みで、出來上ると賣つて仕舞ふ。自分で住む氣はないのだ。死ぬる時入つてゐた家といふのは、一室きりで夫婦で長くこの家に暮した。その造作なども頗る氣の利いたものであつた。』

その頃のこと【十八】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

半峰翁の謠曲

大隈さん閉口の事

春城翁『椿岳の如きは、二疊の室に夫婦僧尼の生活で向島に住んだといふ。何時か坪内君と共に國府津の高田君の香實莊に泊つた。夜眠られなくて、朝早く起きた。坪内君の香實莊批評は芝居的に持つて行つたもので、何事にも直ぐ芝居眼を注ぐ處が坪内君の本色だね。そこでその評に曰くだ。この家は面白く出來てゐるが

居室千篇一律で

あることがどうあらうか。芝居だつて、一番目、二番目中幕と取交ぜて目先きをかへる。家の建築も變化がほしいといはれた。』

逍遙翁『それに反して高田君の長岡の家は變化が多過ぎて少々街氣が見えた。久保といふ人の癖が現れ過ぎたのだらう。國府津の方は本邸式であり、茶室式であつて變化は無いけれど嫌味もなかつた。』

春城翁『長岡の方はきやしやに出來て二階の上り下りに音がする位であつた。久保は後には狂言師になり、私邸に舞台まで作つた。戸棚を三枚戸にして廣く開けられる樣にしたり、なげしの上に棚を造つて邪魔にならない樣に工夫したり、縁側から庭へすべつて下りる樣に板を張つたり、久保の工夫は盡きなかつた。あれで表面眞面目にしてゐれば、近藤乘平位の地位には進める人であつた。』

酒間忽ち横になるといふ特徴を逍遙翁の筆に描かれてゐる半峰翁は、とくから横になつて陶然としてゐた。

『高田君、謠曲を一番やつては如何。』と逍遙翁が思ひ出したやうに促す。

半峰翁『私の謠曲も三十年になる、日清戦争の時からだ、實生の松本金太郎翁から習つた。實生九郎は素人の弟子を取らない。安田義次郎、細川公爵、安川敬一郎位の處で、他は玄人の仕上げに全力を注いだ。稽古はやかましくて、養子の一人は稽古の時撲たれたのが原因で

死んだといふ噂を

された位だ。それで門下隨一の松本金太郎は素人の方を受持つた。』

逍遙翁『どんな教へ方をしたかね。』

半峰翁『教へ方は上手だ、百番位あまり直さずに通して、それから繰返して教へる、二度目はすこし八釜しくなる、三度目には一句毎に直す。初めは謠でも質が宜いと賞められる。段々六かしくなる。』

逍遙翁『人前で謠へるまでには何年かゝるね。』

半峰翁『まア三年だね。愉快に感ずるのは半年目位からで、非常に愉快だ。自分の聲を自分で節を付けて聞くのは樂しみなものさ。』

逍遙翁『女の謠曲は望みのあるものかね。』

半峰翁『まア正式には駄目らしい。』

謠曲は永續する可能性があるかどうかといふ問題起り、

『家元が嚴存し、上流に弟子が多いから永續するだらう』と逍遙翁の觀察であつた。

『坪内君が高田君に何の曲かを熱海で習ひかけたとかいふぢやないか。それは何日永續したね。』と春城翁は笑ひながら椹檜を入れる。

『たつた二日さ。到底僕は習ふといふことには縁がないね。我流一點張だから。』と逍遙翁。

『わが輩も實は危ふく魔道に墜ちる處だつた。』と春城翁は高笑ひ、

――『それは高田君が謠曲を初めて三ケ月も經つた頃、矢來の家番の上の家を訪ふと、細君もゐないしするから、今日から謠曲を初めよとすゝめられる。丁度求友亭に學校の會合が夕方からあるので、今から其處へ行つてやらうといふので出かけた。すると黒川九馬が早くも來てゐるので、其處でやるのも變な事になつて、そのまゝになり

魔道に墜ちる處を

危ふく免れた樣な次第さ。その後大隈さんのお伴をして靜岡へ泊つた時、大隈さんが上に寢てゐる、その下座敷で高田君は森田といふ校友と二人で頑にやる。翌朝、大隈さんが『昨夜はあてられた。下手なのは市島君か。』といふから『飛んでもない、私はまだ魔道に入つてゐません』と答へた。何時でも高田君と一緒に旅行すると、宿屋で一番聽かそうと來る。わが輩は寢てから聽くと折々修正するのでね。平塚に兩人ゐると觀世清兼がやつて來たので謠つてもらつたがうまいと思つた。』

逍遙翁『一體何流が習ひよいのかね。』

半峰翁『觀世より實生がならひ易いと思ふ。觀世は女にも向く。』

春城翁『坪内君も聽く方は相應に玄人らしいね。』

逍遙翁『劇作の上に關係があるので、能を見る必要があつたか昔は時々見にいつたが、近來はつぱり見ない。』

その頃のこと【十九】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

俚歌の名人

漁夫安次郎の事

九時廿分の汽車で、半峰翁は國府津へ歸るといふ事になり、私も友人が同行五人で海岸の宿屋へ來てゐるといふ電話もあつたので自動車で途中まで送る、その海岸に近い大黒屋といふ宿屋へ行つた。

酒を飲んだり、碁を打つたり、娘さん達ははしやいで話が賑ふ。窓を明けると、山手の方に、四筋五筋の湯氣がゆるやかに立のぼつて黒い峰へ白く映つてゐる。

空には星が一杯で、明日の好天氣を保證してゐるらしい。

夜明け方、夢うつゝに雨聲が聞える樣に思つたが、七時頃みんなが起きて見ると、大降りの雨でがつかりした。

十時頃雨は止んだ。

春城翁は、昨夜双柿舎に泊つてをられるので

今朝はモ一席漫談

をやらうといふ電話があつた。私は直ぐ双柿舎に出かけた。春城翁は『昨晩は、君達が歸つてから、又一本ビールを扱いてもらつて、大いに語つた。』とて前夜の補遺を話された。

春城翁『それは、伊東行きの話で、昨晩網代行きの話の後へ出るべき筈であつたのが數人寄つての雜談で他へ外れてしまつた。これはちよつと面白い、逍遙先生の眞面目を露出した珍談さ。先年、熱海へ來た時坪内君御夫婦と卒然自動車で伊東へ運乘りといふ趣向になつた。四五十年來の夢が實現されたものさ。その時、をかしかつたのは、歸りに、魚を買つた。ぶりを買つた。魚屋へ寄つて大ぶりを切り身にさせ、逍遙先生それを拠へた樣子は無かつた。船で歸つたが、熱海へ著いて陸へ上ると一人の漁夫が現れて、手に持つてゐるのは、目差しだね。藁で繋いだのを、先生に差上げたいといふ。先生これを受けて悠々と手にさげて熱海の町を御通行といふ場面さ。』

逍遙翁『よく君は記憶してゐるねえ。』

春城翁『處が、その漁夫が、熱海の俚歌の名人なのだ。』

逍遙翁『さうだ、あれは安次郎の音頭取りで、私が星月夜を歌舞伎座でやらせた時、あれを東京までつれていつた、それは猿之助や中車や左團次や

歌右衛門の出る劇

であつたが、清元延壽太夫に先づ安次郎の俚歌を移し、來宮踊りを猿之助に傳へたり何かした。本場の役者や下座が七十余人もゐるところだから大抵の者は面食ふのだが、おらだから平氣で歌つたり踊つたりしたと、安次郎が熱海へ歸つてから氣焔を吐いたさうな。』

春城翁『鯱とぶりで家づとが富み、坪内君の家で又大いに飲めた。それからその漁夫をこゝへ呼んで歌はせる。その唄は野趣に富んだものだ――海越とでもいふか、古雅な踊りで、武骨でかつ面白いものであつた。』

逍遙翁『わたしはあれを熱海ベーゼントの中へ書き込んでおいた。どうかして後世へ殘したいと思つたから。』

春城翁『熱海の將來は問題にしにくいが、熱海への註文なら謹ら

樣原劇

その頃のこと【二十】

熱海に於る半峰、春城、逍遙三翁の漫談

薄田斬雲記

モダン老人

春城翁と銀ぶら

「逢来橋か」と逍遙翁が受取つて『馬の入浴の圖だね。』

『それ〳〵』と春城翁はいかにも懷古の情に堪へざる調子『坪内君は、熱海の地理通で、どんな所でも知らない處はない。私もお医でどんな細い道でも知つてゐる。閻夜でも道を辿つて過つた事はない。今のその伊豆山へ行く途中の逢来橋なども一小好景掬すべきものでね、一方には山が、海に近く峙てゐる。この橋下は深流が走つて海に注ぐといふ構圖だね。吾々は散歩の折り、いつもこゝへ來ると橋を渡つてから下に降りて見ると深流に沿うて民家あり、その民家には荒廢した浴場があつて戸も鎖

馬などが勝手に

湯あみするに任してゐる。その家の處から橋を見上げると、半空に架かつて高く見え、この邊の風趣は畫にして見たいやうな自然の妙味がある。』そして民家のあるあたりの、傾斜した村の通路は、一向に修繕もせず、大根の切れ端しが散らばつてゐる、馬糞が落ちてゐる。無極を極めてゐるが、それとて大體の景色を害するでもなく全體に頗る畫趣に富んでゐた。』

逍遙翁『本間の令弟の國雄といふ畫家に描いてもらつたスケッチがあつたが、どこへか無くしてしまつた。余り好い出來ではなかつたが……』

春城翁『坪内君はこの逢来橋の景を、散策中類に賞して沙翁の作も譬ふれば、この景の如きものである。イプセンなどの作は、愛言と雖も沈鍵を積んでゐて却つて沙翁に及ばない。つまり、沙翁のは敢て取繕はないが、無機が敢て眼に入らず、全局において妙を極めてゐる處は、この風景と比すべきものだといはれたが、如何にもと感じたことなどを思ひ出す。こんな風で、一昔前には、熱海ものんきな

詩趣豐かな處で

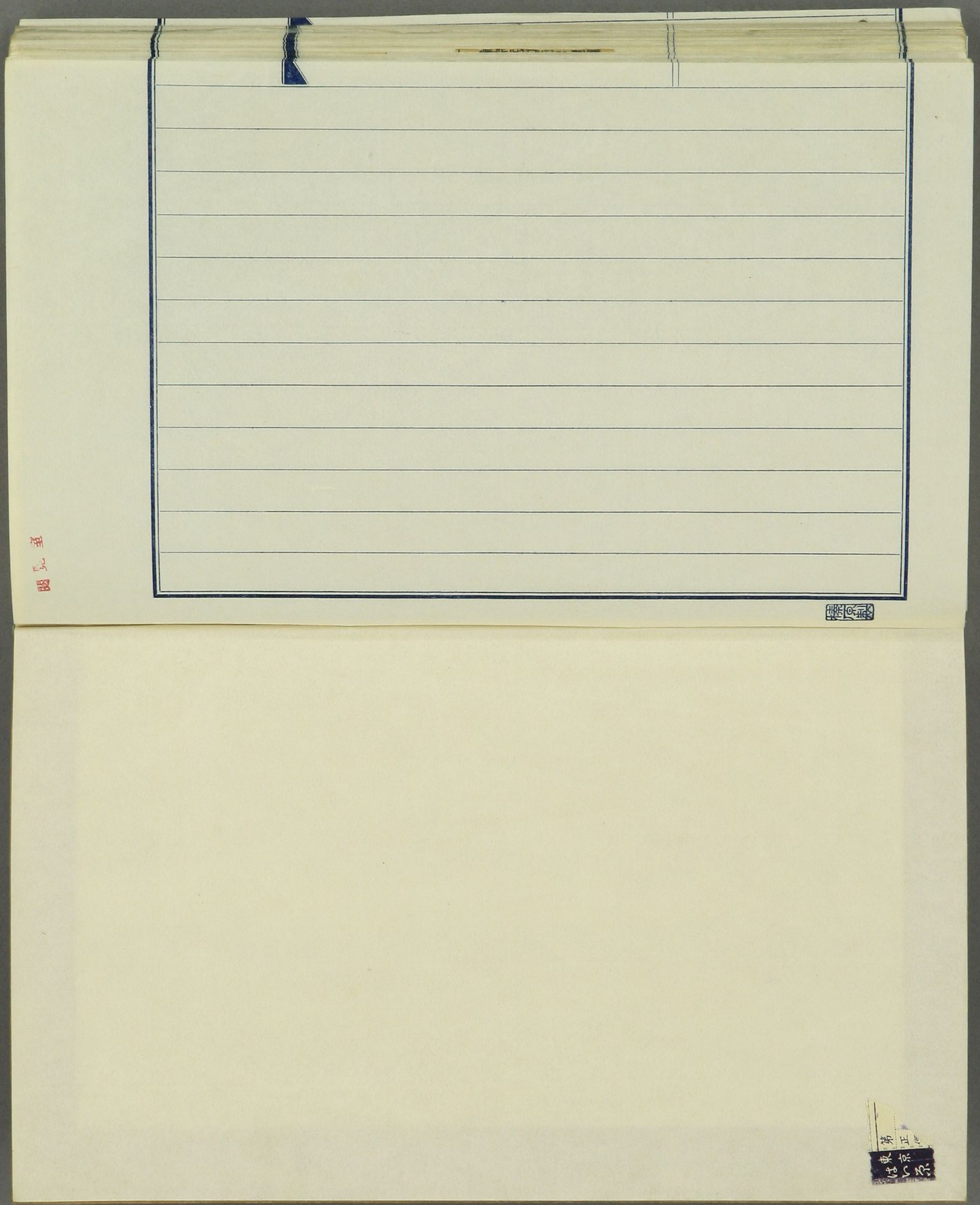
あつたが、昨今は山は掘る、海は埋める。これも大衆時代かね。私は次ぎの汽車で歸らう。歸つたら、若い娘の女侍從と、銀ぶらをする約束だね。君の書いた話題項目の中に銀ぶら情調といふのがあつたから、最後の一幕としてわが輩の銀ぶら觀をやらう。』

『若返つた處でそれが好い』と逍遙翁も若返つて『荷風、魯庵の銀ぶらは數ば聽かされる。春城居士の銀ぶらはモッと老人だけに一層面白からう。』

春城翁『すつかりモダン・オールドにされてしまつたね』と哄笑して『三老の中で、銀ぶらをやるのは私だけであらうが、なんといつても新しい空氣に觸れる處は銀座だね。いつも末の娘が案内役で侍從と來るから、女給を相手にするカフェーへは入らない。隨つてその樣子は知らないが、資生堂、不二家、三共劇藥などへは、折り〳〵出かけてランチを食つたり、飲料を命じたりさ。酒が無くては午餐も出來ないわが輩には、竹葉あたりへ類に足が向く。天金へもたまには行くね。丸ビルの地下食堂、呉服店の食堂へも、女侍從が案内する儘に、數度出かけて見たが騷々しくて好かない。併し呉服店の食料品部で、牛肉のヒレを買つたり、バタなど買ふ事が度々ある。それから、私は近頃、書物買ひをやめた代りに、西洋の玩具や、それに近い工藝品をあさつてゐる。そんな物は銀座にだつて澤山あるとはいへぬが、他の街よりはある。二葉屋や『アザレ』へはいるのはこんなものを見付ける意味からさ。銀座も西洋式に、或は大衆向きに便利になつたもので、その店で酒を飲んでこの店で洋食を食べる、次の店で果物をかじるといふ課さ。銀ぶらは、夜分、深更でなくては眞味は知れないといふが、その銀驚は全くない。いろ〳〵の風俗をした内外の婦人に出遇つてその職業や、國籍など察するのも一興だが

若い娘の慧眼に

はとても及ばないね。銀座シネマや、邦樂座へも娘のお付き合で入ることも、月に一度や二度はある。先づ〳〵私もモダン・オールドの方であらうといふものさね……自動車も來たから、これでお別れ。』

春城翁も歸つてしまふ。

私は妻と友人の娘さんたちが、逍遙書樓を拜見に來るといふのを待つ間、逍遙先生の先導で、お隣家にゐる、生田さんの處へお邪魔をしたり、向ふの峰の中腹に滿開の櫻が一本あるのを『大島櫻』と聞かされたり、前の林で四十雀が類になくのをきいたり、春の熱海の午後は長閑である。空は晴れて海は青く、初島はうるはしい。(終り)